

山崎

第三回
新派文芸賞

特集
ごみ

6

One love, peace!

IPSWICH

山脈

VOL.06

ゴミ通クロスレビュー

「原則傘を持たない」
—小島パブロン

「ゴミと哲学と、いつか死ぬ」
—戸森めめん

「さんみやくちゃん」
—七転ねべす

しん宇宙のお知らせ

「自分が本当に気持ちいい生き方ってなんだろう？」
—草薙健一

「オカルトは結節具（ノード）である」
—佐藤家清

「新・ないたあかおに」—マクロスF外伝—
—草薙健一

「SOUSHIKISS」
—せきうお

第三回新脈文芸賞

編集後記





GOMITU CROSS REVIEW

ゴミと言っても色々あります。ただのゴミもあれば、捨てれないゴミもある。自分にとっては宝物でも他人にとってはただのゴミだし、今日のお気に入りも明日のゴミ。掃除の時は、どれをゴミにして、どれを残すか、ゴミ VS ゴミのゴミバトル！

今回のゴミ通クロスレビューは、そんな一癖も二癖もある愛おしいゴミを読者から募集し、それを一癖も二癖もあるゴミが好きなゴミ専門家たちにレビューしてもらうという企画です。

ゴミレビュアーのみなさん

サイダー系音成

最近肩が重い人

ゴミをレビューすると聞いて「なぜ私を呼ばないのか!」と怒り狂って編集室に殴りこみ、目を血走らせてゴミを眺め、鼻血を出しながらレビュー文を書き、しかる後前のめりに倒れる。そんな人になりたい。

家清

ゴミカテゴリライザー

わたしの知人ならみんな知っているけど、わたしの部屋は猛烈に汚い。ゴミの山の中に住んでいる。わたしはいつもゴミに囲まれているうちに、ゴミの声が聞こえるようになった。ゴミにはいくつかの種類がある。わたしは写真からゴミたちの声を聞き取ってカテゴリズしていきたいと思う。

ムドオン山奇山

ウェブライター

ゴミとは何ものであるか。
ゴミとは、生まれるものである。
ゴミとは、払拭されるものである。
ゴミとは、棄てられるものである。
ゴミとは、燃焼されるものである。
ゴミとは、裁断されるものである。
ゴミとは、埋立されるものである。
ゴミとは、再生されるものである。
ゴミとは、採点されるものである。

スキャベンジャー

スカベンジャー

『素材本来の味』を追求し続けて30年。うまいものもずいぶん食べてきたと自負しておりますがまだまだ道半ばだと思い知る日々です。今日もまだ見ぬ美味を求めてカラスと縄張り争いをしております。



EGO-WRAPPIN'

一枚のカードに記録されている文字や磁気、その情報唯それだけで幾千幾万の価値を生み出す。必要がなくなれば、紙っぺらである。

沙摩爾

サイダー系音工成

その各々のカードに刻まれているカードとしてのデザイン性は間違いなく本物である。選んで部屋の壁にでも飾ればカッコいい。

2

家清

カードはお店がかける呪いみたいなもので、無料でもらえる上にポイントがつくので持っておかないと損した気分になる。期待をさせる期待ゴミだ。しかし、実際にそのポイントを使うのはごくごく稀で、ほとんどのカードはサイフを圧迫するだけ、捨てる時はなんで持ち歩いていたんだろうと損をした気分になる。

ムドオン山奇山

初めに言いたい、これはゴミではない。特筆すべきはメイドカフェ関連のカードである。これには普遍的な価値があり。一生捨てるべきではない。1000円で5ポイントの超円安為替相場がなんだというのだ。財布の紐を緩めよ。(会員)レベルを上げて物理(的な貢献)で(メイドの心を)殴ればいい。

ゆるみん



舐めれば少し刺激が味わえそうですね。アクセントにつまむにはいいかもしれません。

2



テープレコーダー

録音目的で買ったもの。10年近く持っているけど、結局一度も使ってないような気がする。かわいい。

慶

サイダー系音感

今にも自我に目覚め、喋りださんような雰囲気すら感じる佇まい。窓から覗く瞳が2つ。口がひとつ。付喪神として目覚める時までしばし様子を見たほうが良い。

4

家清

陳腐化により希少価値も匂わすレトロゴミ。ドラッガー曰く「イノベーションの第一歩は陳腐化したものを計画的に捨てることである」しかし、イノベーションの一步を踏み込むのは勇気がいる。10年前の物らしいが、写真を見る限りまだ美品。どれだけ使ってないかわかると同時に美品というのは捨てにくい。

ムドオン山奇山

角ばった無骨なUI、カセットという情報丸出しのオープンリールは正しく「ゴミ」の名に相応しい。しかし何故赤色なのだ。赤という色には情熱が宿っている。それは「ゴミ」という存在とは対極に位置するのだ。故にこのテープレコーダーのゴミとしての価値は低いと言わざるを得ない。いわんや新品をや。

ゆるみ

磁気テープを啜るあの感触も最近はずいぶん珍しくなりました。仲間うちでは都はるみが一番うまいというのが定説なんです。私自身はイルカの録音中に雑音が入ってしまったのが渋みがあって大人の味わいという感じがして好きです。





お死花

初めて男の子にもらったお花を押し花にしたもの。その男の子のお葬式にこないだ行ってきました。

せきうお

サイダー系古城

システム的には至って平凡。しかし、長きに及ぶ開発期間は面白さを裏切らない。過程の想像喚起を望むシナリオも上々。

8

家清

年期のはいったゴミほど動かしがたい重たいオーラを纏う。ロマンティックなエピソードを伴ったゴミは、ゴミに見えることもあるし、みえないこともある。本人自身どっちに扱っていいのか、またはどっちに扱いたいのかわからないだろう。こういう両義的な存在は極めて呪術的なものであり、これは聖なるゴミだ。

ムドオン山崎

失われた思い出は、切ない。しかし、いつかは捨て去らねば、シンデレラにはなれないのだ。花びらの色彩は、お気に入りのペーパーバックに染み抜かれて、脳裏に焼き付いたあなたの笑顔は、まるで無声映画みたいね。あたしはまいにち語りかけるの。しおれたそのお死花に、「トーキー、トーキー」ってね。

ゆるみん



スナックですね。いくらでもいけますね。ちょっと小腹が減ったときにあると嬉しい一品です。

8



死タールのツメ

「目つぶってて」って目を開けたら指にシタールのツメ。とってもロマンチックなその男の子のお葬式にこないだ行ってきました。

せきうお

サイダー系ゴミ

まさにシタールやられた。シタールそのものの知名度すら怪しいのに、その爪。汎用度のなさ、見た目の彩りのなさ、一級品のゴミである。残念なのはちょっとカッコいいことである。

家清

シタールを持っていなければミズラップを持っていてもただのゴミだが、これは結婚指輪のかわりにはめられたものなので、立派な指輪に違いない。しかし、他人から見たら用途のよくわからない針金であり、それを理解してもらうのは難しい。現実的な価値と主観的な価値が交差する幻想的なゴミである。

ムドオン山奇山

評価をする人間にとって、満点は「決して出さない」という気概をもって望むべきだと考えている。満点には「でもちょっと…」がないヤツでしょ?と、伊集院光も言っている。しかし、これはどうであろうか。ツメ! シタールの! パンジョーでは無くシタールの! ゴミだ! だがインド人なら左に置くであろう。

ゆるみ

納豆って私あまり好きじゃないんですよ。あのねばった感じが。このツメからはそういうねっとり感が伝わってきます。金属製だからってねっとりしないわけじゃないってことを知らないと口に入れてしまいそうですね。



目・メン・ト・森

その昔友達に貰ったんだかよくわからないもの。捨てるはずの画用紙で捨てるつもりで作ったらしい。

クリーン・エコ子

サイダー系ゴミ袋

作者のやる気の無さを反映したかのような彩り、しかしその裏に潜む執念を感じさせるデザインは存在意義に一考の余地を与える。なにかのテクスチャとして利用すればさぞかし良い狂気具合となるだろう。

家清

ユニークなものは捨てにくい。他にはない魅力を備えているからだ。アートは得てして価値がわからない。ゴミといえばゴミだけど、値段をつけると1円から3億円の間をさまよう。この評価は常に変動するがそのユニークさは変わらない。捨てるべきなのかもわからない思わず判断を保留してしまうアートゴミ。

ムドオン山奇山

これは木なのだろうか……? しかし顔らしき造作も見える。人面樹、なるほど、そういうのもあるのか! 「捨てるはず(マイナス)の画用紙×捨てるつもり(マイナス)で作った」つまりプラスである。得てしてアートとはそういうものだ。じゃあ燃やさなきゃ! うおオン、おれはまるで人間ゴミ処理施設だ……。

ゆるみ

これは美味しい。香りもよく、口に入れるとふわっと融けて濃厚な味わいが口中に広がります。夢中になってあっという間に食べ終えてしまいました。呼べればシェフとか呼んじたいですね。



もえるごみ

膨大なテキストも画像も音楽も動画も、全てこの中に、0と1とで造られている。外付けHDを買ったらもう読み出すことはない。

コンプライ杏

サイダー系ごみ

馬鹿者。ローグライクゲームとか入れて、PCのある場所ならいつでもどこでもローグライクゲームが遊べるではないか。@を動かせ。

家清

そんなにかさばるものでもないし、まだ使うことがあるかも知れないとずっと居座るメモリースティック。分類すると「捨てるほどではないゴミ」になる。中身が見えないので、忘れた頃に中を開いてみると、とんでもないものが入っていてびっくりする爆弾みたいな趣がある。寝かせておくと成長するゴミだ。

ムドオン山

どうせ後悔するようなデータもないんだし、賢者の時にでもさっさと捨てるべき。さもないと、予想外のトラブルを引き起こしかねない。と言うのも、この手のコンパクトストレージは必要なときに無い癖、見つかってほしくないときに最悪のタイミングで発掘されるのである。俺の実体験からそれは明らかである。

ゆるみ

こいつは駄目だ、食べられないよ。

1



マルテの手記

恋人と一緒に読みあわせしようねと2冊購入し、1冊渡した次の日にふられた呪いの本です。リルケ死ね。

家清

サイダー系吉城

過去の因縁はゴミである。この本に罪はない。しかし、罪が無いイコールゴミではない理論とはならない。そもそもリルケって誰。

4

家清

まずリルケはすでに死んでいる。マルテの手記はわたしも好きだが大山定一訳はいただけない、あまりロマンチックじゃないからだ。望月市恵訳だったらうまくいったのではないのだろうか。そもそもふられた原因を本に求めるのもどうかと思うが、そういう負の思考を呼び寄せるものが真のゴミと言えよう。

ムドオン山奇山

捨てるくらいなら俺に下さい。読んだことないから。そういうわけで2点である。

2

ゆるみ

なによりこのボリュームが嬉しいです。2冊セットになってるので育ち盛りのお子さんでもおなかいっぱい食べられます。ただ、育ち盛りならもっと他に食べるものがあるはず。私たちのようになるにはまだ君たちは若い。

7



蹲踞するエントロピー

飽食の時代を標榜するアイコン、コンビニエンスストア。朝でも夜でも、美味しいゴミを作り出すことができる。

霞一美

サイダー系吉成

ちょっとアメリカンドック買ってくる。

7

家清

過剰包装な世の中。食べるものを得るだけなら包装なんかいらぬはずだ。食べれない部分は即ゴミなので合理的に考えれば包装にお金をかけてるものほど売れなくなるはずなのに、そうはならない。消費者は過剰包装を愛し、だからゴミが増える。贅沢は庶民にはびこり、それが日常となる。見慣れたゴミ。

ムドオン山崎

ゴミに集うは塵芥ばかり。ファスト・フードはフィースト・フードだ。おいしいものは、どうしたってゴミに変わる運命を背負っている。ガツガツ貪り食べ尽くした後は紙はクシャッと丸められ缶はペコリと潰される。あとはゴミ箱にドカッ！終わり。実に耳障りの良いゴミたちである。正統派といえよう。

ゆるみ



こいつは駄目だ、食べられてるよ。

1



在庫

いかに手間と時間と金を懸けたものも、売れ残ればいずれゴミとその身を棄す。いっそ捨ててしまおう。

しゅんぺい

サイダー系音楽

正確には「しにたい」点を付けたい。かくいう私にも心当たりがあるからだ。これをやれば自分はきっと何かが変わると思って手間暇かけて大事に作ったは良いが、大して売れず、しかもその頃の残滓が延々と心を蝕み続けるのだ。しにたい。

家清

売れ残ったという紹介文からして自費出版物であろう。進化論的かというと創作とは異性へのアピールであり、これはヌード写真集であり、精子である。バンドをやったり、ダンスを踊ってれば、もっとわかりやすく勝負できるのに、文化系は何故か遠回しにアピールをする。過去の淡い恋のように捨てれないゴミ。

ムドオン山崎

「さらば青春の光」と歌ったのは布袋寅泰であるが、若い日の夢とは目映い光を放つクソなのだ。クソは便器にされるべきだが、何を思ったのか在庫として貯蔵されたそれは、熟成されピンテージワインのような芳醇な薫りを放っている。「全ては明日の為に 導かれた物語 さらば青春の光……」涙が止まんない。

ゆるみ

シャキシャキとした食感が楽しいですね。少し酸味が強いのは旬のものであるという証明です。旬を過ぎてしまうとえぐみが強くなってあまり食用には向かなくなってしまうのが困りものです。この季節ならではの味。



人『ゴミ』

「すごい人ゴミ ...」とシャッターを切った知人。「ゴミ」とは、関わりたくない邪魔っけなものの別称。写真は今年一月三日の浅草寺境内の様様。

ハラヲ

サイダー系ゴミ

人 人 人 人 人 人 漢字で「人」を「森」のように並べて書けば「ゴミ」と読ませて良いんじゃないかと真剣に思いつつある今日このごろ皆様(ゴミ)はいかがお過ごしでしょうか。私は今日もゴミ収集車という名前の電車で揺られて移動します。

家 清

すぎたるものは何でもゴミになる。食べきれない料理。大きすぎる服。過剰な愛情。それは悪ではないが、なんでもゴミだ。人口はどうだろう。わたし達は増えすぎたのかもしれないし、もしくはまだ足りないのかもしれない。それはまだ判断できない。これらがゴミであるかどうかはこの先の歴史が決めるだろう。

ムドオン山奇山

世には人ごみを疎ましく思う輩も多いだろうが、俺はきれいじゃない。老若男女を区別せず、大勢の人ごみに紛れる事は一つの幸せだ。そして人ごみはゴミじゃない。混み、である。渋谷のスクランブル交差点を上から俯瞰したら、きっとゴミが炒られているようにでも見えるだろう。これはそう、人ゴマ

ゆるみ

鳥居はやめておいたほうがいいです。ほんのひと舐めしただけなのに一週間ほど原因不明の高熱にうなされました。もしあの時玉砂利をどうこうしていたら今ここに私はいなかったかもしれません。見えないものには敬意を払いましょう。



ゴミに変わる瞬間

「こうするとゴミ。さっきまで『ごちそう』だったのに…。おもしろいよね」と言って、彼は口をふいたナプキンを丸めて器に放り込んだ。私の知人の芸術家の言葉だ。ものがゴミになる瞬間…。

小島パブロン

サイダー系音工成

そもそもナプキンを放り込む以前から、この「ごちそう」は非ゴミであったのか。私の目にはパンの耳を更に細長く刻んで皿の上に盛りつけた物体に見える。さらに考えるべきはナプキンだ。例えばアイドルの〇〇ちゃんが口をふいたナプキンであれば、それはゴミか!? よろこんで舐めよう！私は遠慮するが。

家清

食べ物は食べるためにある。でも、食べ物が食べれなくなったときそれはゴミになる。わたし達は生きる為にゴミを作る。銃を撃ったあとの薬莢のようにそれ散らかる。薬莢に埋もれないようにわたし達はそれを捨てる。これは普通的生活ゴミだ。外食はゴミを始末する分のお金も払っているので重みを感じなくていい。

ムドオン山奇山

この特異なゴミを捨てるためには、化学製品開発会社が開発したキッチン用洗剤という界面活性剤が不可欠であり、スポンジを吸水させ十分に泡立てる必要がある。写真のように油に塗れている場合、一度水に流すなど予洗いもしてはならないだろう。このような作業は人が食事をする度課せられる苦役である。

ゆるみ



私には依然変わりなくごちそうに見えます。

6



山脈

ゴミになりにくい電子書籍も、プリントアウトしてしまうとすぐにゴミに。

家清

サイダー系古城

電子の世界で存在しうるモノを具現化することで、価値に変動が生じるのは仕方ないのか。込められた熱量は保存され、減衰することなく、閉じ込められている。価値とはなんであるか、今こそ問う時が来たのだ。

家清

本誌である。雑誌というのは様々なパーツで構成されている。表紙、画、写真、文章、それを整える編集。多くのアイデアと熱意とため息で作られているが、それも読んでくれる人がいないとゴミに近い。ともあれ、こんなものを6冊を刊行できたのは奇跡的だ。わたしは運がいい。みんなありがとう。

ムドオン山奇山

山脈とは山の稜線が上がったり下ったりしながら延々と繋がっている様を顕す。これはもう人生だ。人が一列に並んで手を取り合えば、その姿は星を包む山脈と、宇宙からは表されるだろう。いちライターである俺には内情は分からないが、棄てられることによってより練磨されたカタチへと著されることもある。

ゆるみ

複雑玄妙な味わい。これは喩えるならそう、ロシアの家庭料理である……待てよ……雲南省の……ああいや、アーシャル諸島において16世紀ごろ作られていた……テューダー朝の……会津藩……カスピ海……アルデバラン……ううむ……

山田フラメンコさんによる総括



ゴミ通クロスレビューいかがでしたでしょうか。
色々なゴミがありましたね、あなたの見知、たゴミもまだかもしれません。
何がゴミで何がゴミでないかというのは難しい問題です。
わたしも死んだらゴミになるでしょう。ゴミは合理的に扱うほど
捨てやすくなります。でも、全てのゴミを合理的に扱うのは
なかなか難しいです。それは私たちが人の死をなかなか
受け入れられないように、大切なものがゴミになっちゃったことを
受け入れられないからです。

ゴミは、生きるとはなったら、死とはなったらということを
教えてくれます。ゴミが毎日生まれるように、死も毎日生まれます。
それは、私たちが生きていく証です。生きる為には死を受け入れること、
~~生きる~~も、受け入れられないことも大切な事あり。
その大切さを今日のゴミクロスレビューで学んだ気がします。

通

山田 山田フラメンコ
♡
♡



「原則傘を持たない」

私は、原則傘を持たないことにしている。

つまり、いきなり雨が降ったときの「有事」に備えて傘を携行する、というのがない。

天気予報で降水確率が高くて、朝、雨が降っていなければ持っていかないのである。

まず外出の時にはあまり荷物を持ちたくない、というのが私の基本姿勢としてある。であるから、カバンとかも、工作上必要なものを持ち運ぶためにはやむを得ないが、私生活ではなるべく持たないことにしているのだ。

極力、手ぶらでいたいのである。

しかしながら、あらゆる荷物にあって、傘はもっとも「最悪なもの」ではないか。

晴れているときは「ただの、何の役にも立たない棒」でしかない。で、なまじ長さがあるものだから、それを持って歩いていると大層かさばり、まるで無駄なものを持たされている感じがしてきて、何か損している気分になる。

たしかに折り畳み傘だと、それは携行用に作られているから、かさばり度合いは極度に低くなる。しかし、晴れていると、やはり持て余し感が否めないし、そんな日に手に持っているとすぐに家に戻って置いてきたくなる。

そうは言っても、傘を持っていたら、急に雨が降ったときに困らずに済むじゃないか、備えあれば憂いなしではないか、と言う人もいるかもしれない。しかし、それはそうでもないと思う。

特に、私が住んでいるのは都市部なので、あちらこちらに建物やらビルやらお店があるから、極端に雨宿りに困った記憶がないし、さらに地下道やアーケードを行くと雨に当たらない上に、存外迅速に駅や目的地に行けたりするものなのだ。

そんなにうまくいくか？ 本当か？ と言う人もいるかもしれないが、それは傘を持っている、あるいは傘は「有事」に備えて持つべきと思っている人の言い草であって、そういう人は、傘を持っていることを前提にして、突如雨が降った際の行動の仕方や行動できる範囲を考えているから、そう思うのである。

試しに、傘を持たないで外へ出て、雨に降られてみたらいい。そしてそれを数度繰り返せば、「どうしたら雨に当たらずに歩いて目的地に到達できるか」を考える頭と行動原理が自分の中に出来上がってきて、意外と傘なしでも歩けるようになるものである。

案ずるより云々。つまり私のように、傘なしの生活が普通になるのである。

無茶なことを言うな、という読者諸兄も多いことかと思う。しかし、ちょっと考えてみて欲しい。

駅や電車内での忘れ物の一位は傘だ、というではないか。

雨が降るとなると、傘がなければ傘がなければと、強迫観念的に思い、「ちょっとあんた、今日朝雨降るらしいで。傘持ってきいや」とうるさいオカンの人がよくいる。だが、その多くは、立ちどころに晴れるやいなや、今度はまるで今まで雨が降っていなかったかのように、そして傘の存在など初めからなかったように、忘れ去るということを、この事実は示唆しているのではないか。

さらに、その忘れ去れた傘を駅に引き取りに来る人も極めて少ない、とも聞いている。ということは、今日は降水確率が高いから傘を持って行こうかしらと傘を持っていく人の多くの潜在意識の中でも、実は「傘は、なくて済むなら、なくてもよい」という意識があるのではないか。だから、ほとんどの人が、雨が降っていて今まさに困っているのなら傘を希求するのだろうけども、晴れているときは、どこかで「邪魔なもの」、果ては「ゴミ」という意識さえあると言えるのである。

現に、こうした引き取られなかった忘れ物の傘は、一定期間の保管の後、「ゴミ」として処理されるそうである。そしてそれでも、明日からの生活に支障をきたさない人が大半以上なのだから、傘を持ち歩く諸兄もまた、忘れた傘を、取りに行くべき忘れ物ではなく、「ゴミ」と見な

しているのだ。

やはり傘は、持たなくてよいものなのだと、言わざるを得ないだろう。

ただ、朝起きて雨が降っていたり、朝のニュースで「今日は一日雨」と告げられたら、当然、私は傘を持っていく。

へ？ そんなのおかしい、今までと話が違うじゃないか、矛盾しているじゃないかと、憤りさえ覚える人もいるかもしれない。しかし私は、晴れている日に「役に立たない棒」を手に持って歩くのは、アホくさい、だから傘は持ち歩かないのが原則だ、と言っているのであって、今もし雨が降っていたら、当然、傘は持って出る。大体、土砂降りの中わしわし歩いていたら、それは変な人ではないか。

原則には必ず例外則が付きものであることも、読者諸兄は忘れてはならない。

「ゴミと、哲学と、いつか死ぬ」



戸森めめん

ゴミとは結末である、と考えたことがある。それはわたしの哲学の一つだった。

哲学とは世界の根本原理を追及する形而上学としての学問である。ややこしい。簡単にいえば「世界ってなんだろう」というものを頭の中のもやもやで考えることが哲学だ。そんなもやもやをおもしろがって考えていたのはわたしが高校生の頃で、主に掃除の時間のことだった。

わたしの担当は渡りの廊下で、それは一階にあり、外と繋がった校舎外の廊下だったため、どれだけ掃除をしても細かい砂は取り除けないし、みんなきれいな上履きで通るから泥がつくこともない。やることと言えば、渡り廊下の側に生えたユズリハやクマザサの落ち葉を掃きとってそれでおしまい。正直、1分もかからなかったし、枯れ葉が落ちてない日も多かった。あとはホウキを持って掃除をしてるふりをしてればよかった。

わたしが珍妙な哲学をはじめたのも、そんな簡単な掃除のおかげだろう。

たとえば、今、掃いているものはなんだろうか。わたしは箒を使ってはいるものの、それはゴミを掃くためにしているのではない。だって、ゴミなんかない。いや、確かに砂を掃ってはいるけど、砂はゴミだろうか。砂は砂で渡り廊下の横にいくらでもある。だから砂を集めて捨てるのではなく、わたしは砂を掃って元にあった土に戻すのだ。落ち葉もどうなんだろう。砂も落ち葉も渡り廊下にとって不必要なだけで、本来はちゃんと役割のあるものだ。砂は集まって土になる。その土に生えたクマザサが茂り、その枯葉がまた土になる。

ふと自然の循環というものを感じた。ゴミ箱に捨てたとしても、それは焼却場で焼かれて煙になり、雲なって、雨と共に落ちる。これは自分が死んでも同じだろう。天国や地獄に行くという話ではなく、わたしは煙になってそして大地に落ちて広がるのだ。

その時、世界を感じたような気がした。

たとえば、わたしの死体は物理的に煙になるけど、精神的にはどうなるのだろうか、魂というものあればその時に魂は肉体がそうであるようにバラバラになるのかもしれない。夢野久作のドグラ・マグラだ。「脳髄は物を考える処に非ず」でおなじみの脳髄論のように、魂や精神というものは一個の塊なのではなく、細胞一つ一つに魂が宿っているものなのかもしれない。わたしというエゴはその魂の連なりでしかない。燃やされて煙になって分子レベルに分解されるということは、連なりで発生したわたしというエゴの崩壊ではあるが、魂にとっては死でもなんでもなく、ただ元のバラバラの形に戻っただけとも言える。そして、一つの魂に戻り、地球上に広がり、また何かの連なりになるのだ。魂としては、この廊下に広く散らばった砂も、このわたしもまったく対等なものであり、その分子の連なりの形の違いだけなのかもしれない。わたしは口笛を吹くが、これも自分の自由な発想ではなく、その分子の繋がり方がそうさせているのかもしれない。わたしを構成する連なり達が口笛を吹かせることに飽きたら、わたしも役割を終えてゴミのような存在に戻るのかも。ゴミは新しい存在になる為の準備段階であり、結末なのだ。そんなこと

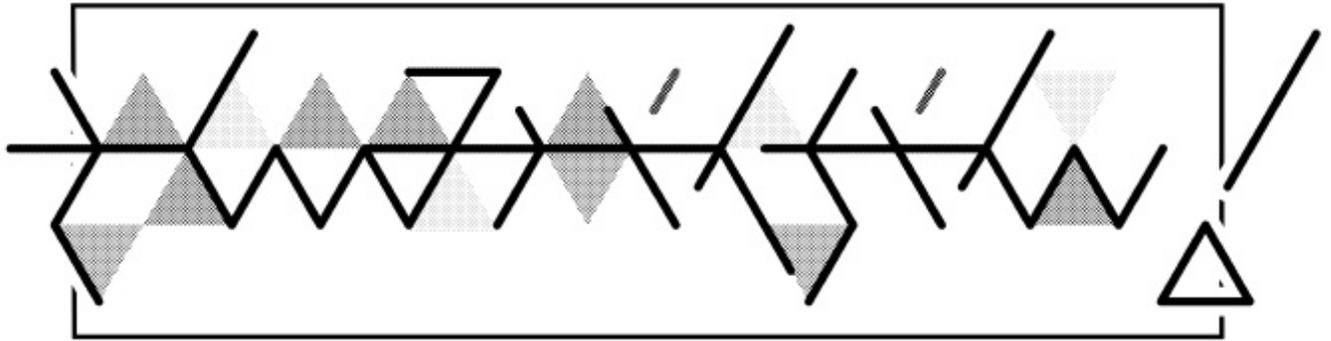
を考えた。当時は素晴らしい発見に思えた。

わたしは学校が終わると急いで下校した。高い空の下、汗ばみながら自転車を走らせ、夏がそこまで近づいているのを感じた。家に着くとまっ先にパソコンを立ち上げてインターネットに繋いだ。当時、仲が良かった登校拒否の女の子にその発見を話したかったのだ。彼女ならきっとおもしろがってくれる。

ところが彼女はひどくつまんなそうにそれを聞いていた、あまつさえ、最後にはわたしに悪態をついた。その発見がどうこうの前にそもそも彼女はドグラ・マグラが好きではなかったのだ、本の表紙が卑猥だし、ちゃかぼこちゃかぼこばかりの小説のどこがいいのかと文句をいった。わたしの発見した大切な何かは、卑猥な表紙とちゃかぼこに負けていた。

わたしはため息をついて、椅子にもたれかかった。そりゃ確かに自分をゴミ扱いされて快く思う人はいないかもしれない。それでもわたしは彼女が死んでゴミになることを想像した。それから自分が死んでゴミになり、一つの同じような存在になることを想像したのだった。

S A N M Y A K U C H A N



作:七転ねべす



山脈に待望のマンガ連載スタート!
二人が織り成す山脈世界!?



山脈から



しん宇宙へ

ご好評いただいていた新時代の参加型電子出版雑誌『山脈』ですが、今回の号を以て休刊となります。

しかし、新時代の参加型電子出版雑誌が終わったわけではありません。

次号からは新しく『しん宇宙』という雑誌に生まれ変わって、新創刊します。

創作を共有する「シェア・クリエイト」を掲げ、まさに宇宙のように活動を広げていきたいと思えます。

じい出版の「しん宇宙」を、是非ご期待ください！

自分が気持ちいい生き方 ってなんだろう 草薙健一

はじめに

【腐女子化する世界—東池袋のオタク女子たち (中公新書ラクレ)】

という本をネット仲間を紹介してもらったのがきっかけだった。
現代の腐女子（里性同士の恋愛を妄想して楽しむ女性たち）の
生き方を書いた本だった。

そこで思った

「腐女子」は女性オタクが行き着いた一つの完成形である。
では里性オタクが行き着いた「萌えオタ」はどうだろう。
ご覧ください。

「腐女子化する世界—東池袋のオタク女子たち (中公新書ラクレ)」

の本で重要なのは以下の点である。

P126

（かつて、女性たちは「社会」や「異性」に承認されようと努力を繰り返した。
しかし、腐女子たちは、同じ嗜好をもつ仲間から承認を得ることができれば、「自分探し」
は要らない、というわけである。）

この「社会」や「異性」、はっきり言えば「他」から「己」を受け入れてもらうことのために、われわれがどれほどの犠牲を払っているか！！

私の周りにいた腐女子の生態はというと、10代後半の彼女(大学の温研の先輩でIT企業のバリキャリ)は「生もの」と呼ばれるタイプで二次元だけでなく三次元の俳優やアイドルや声優さんたちで妄想していた。

例えばクルマのCMかみかでも、里性がふたりいると妄想点火。

そして結果(作品)をブログに書く。

ちなみに2chで腐女子が自分のげずかしい過去を書き込む掲示板のログがあったので、miviでマイクシィのみで紹介したら「理解が無いのはしょうがないけどさらすのだけはやめてくれ」と書き込んで消した跡が・・・。

彼女からは「他から己を受け入れられたい、でもきっと受け入れられたい、そのキキリキこもって1人で楽しんでいた方がいいんじゃないか」というジレンマがはっきり見て取れました。

一方、私は40代前半オタク里性

上司に気に入られるためにつまんないゴルフをしたり野球を見たりしてない

(白己鍛錬や仲間との縛魔研鑽のために武術を練習していた、CSでボクシングやキックボクシング)

それが何を意味するか？

己が幸福かどうかを感じるのには己自身の心である。

だから2次元に萌えようが3次元に萌えようが

己が幸せと感じられるのなら

どうでもいいのだァ！！

相室世界の亦恋は喜くつく

人間社会はギブアンドテイクでかいたっているが 里女関係においてけ違う。

女性に気に入ってもらえるまではギブギブギブギブばかりでテイクがない。

こっちはすでにギブアップである。

こういうこと書くと「下心持って女性に接するなんて最低」とかいう女性もいらっしゃるが

下心も無しにメシおごってもらえるなんて

ありがたいと思え。

「脳内恋愛」「脳内嫁」という言葉がある。

自分たちの脳や心の中に恋人やお嫁さんを作って

妄想して楽しむ恋愛のメソッドである

私たちが実際の女性を相手にするより

本物やアイテムやブルーレイディスクを買って脳内恋愛していた方が

かんたんだしあわせにたのむのだ

(私の脳内嫁は「魔法少女まどか☆マギカ」の暁美ほむら)

ちなみに私は11回連続で

”現実の”お見合いを断られたことがある。

私がお見合いにおもむく女性から目で何かを覚えていたのだらう。

だから結婚はやめて そのかわり気のおけないガールフレンドを

何人か作るメソッドにした

それはけっけつうきくいている

お見合いと違ってガールフレンドとのデートは気楽で楽しい

何人かとはいっしょに執事喫茶に行ったり、上海蟹を食べに行ったりした。

もちろんワリカンで。

サクマシたくかったら、パンツ脱いでくれるかもしれないガールフレンドを新たに作ればいいのだ。

「うつしよは夢、夜の夢こそまこと」

作家 江百川乱来が色紙に書いた言葉だ

うつしよ（現実世界）を生きる私は世を忍ぶ仮の姿の私。

夜の夢の中の私こそ本当の私！

まさにこれこそが「脳内充実」をあらわした言葉である。

おわりに

みなさん、もうおわかりですね。

自分が気持ちいい生き方とはすなわち、自分自身の価値観をきちんと見つめ、肯定し、自分の脳、心、魂を満足させることなのです。

さあ、みなさんも**Let's** 脳内充実！

「あなたの人生 変わるかも？」
【キューティーハニーF】

ノード 結節具？

そう、オカルトは^{ノード}結節具。

わたし達は遠くどこかに行こうと夢をみる。

新しい何かになろうと夢をみる。

みる夢は現実ではなく、なんの接点も持たない2つの事柄である。わたしたちはまったく関係ないの2つを夢の中で結び、根拠となりそうなものを積み重ね、それを現実だと思ふことで夢を叶えていく。

オカルトは関係のないものをつなぐ^{ノード}結束具である。



オカルトとは真実ではないもの。根拠のないもの。反証のできない事柄だ。「わたしが正しいと思うもの」というのは根拠にならないし「他人が正しいと思うもの」も根拠にならない。靈感も、幽霊も宇宙人も再現性はなく、根拠がない。でも、そんなものは世の中に溢れている。パワースポットってなに？ 毎日ニュースでは占いを放送してる。血液型占いも、手相も根拠がないし、前世占いなんか狂気の沙汰だ。でも、そんなものだらけで、長い目でみれば人類だってひよんな偶然で生まれただけで再現性はないかもしれない。今さっき考えたことを同じように再現できる？ 常識と広義のオカルトには明確な違いはない。わたし達と同じように、常識やルールにもまた根拠がないし、反証に耐えられないものは多い。



「オカルトはマンガや映画を指す言葉ではないよ」とわたしは言った。

「あの都市伝説は本当なの？」と質問されることがある。もし、本当であったら都市伝説にカテゴライズはされない。都市伝説とは民間の口承で広がった噂話のことだ。現在ではインターネットなどのメディアの発達により口承のみではないし、民間だけで形成されないことも多い。でも、その基本構造は民衆による自発的な「ゴシップ記事」であり、その役割は真実を伝えるものではなく、もっともらしい刺激的な嘘がより良いものとされる。都市伝説もこれに同じである。ゴシップだ。オカルトはどうだろう。都市伝説はオカルトだ。でも、都市伝説がオカルトのすべてではない。オカルトは概念であり、それだけで、マンガや映画や都市伝説といった娯楽物を指すものではない。オカルトは結節具^{ノード}だ。



わたしの恋人は、わたしと付合った次の日に、「道路でぺちゃんこになった鼠の死体を見つけたの」とわたしに報告した。

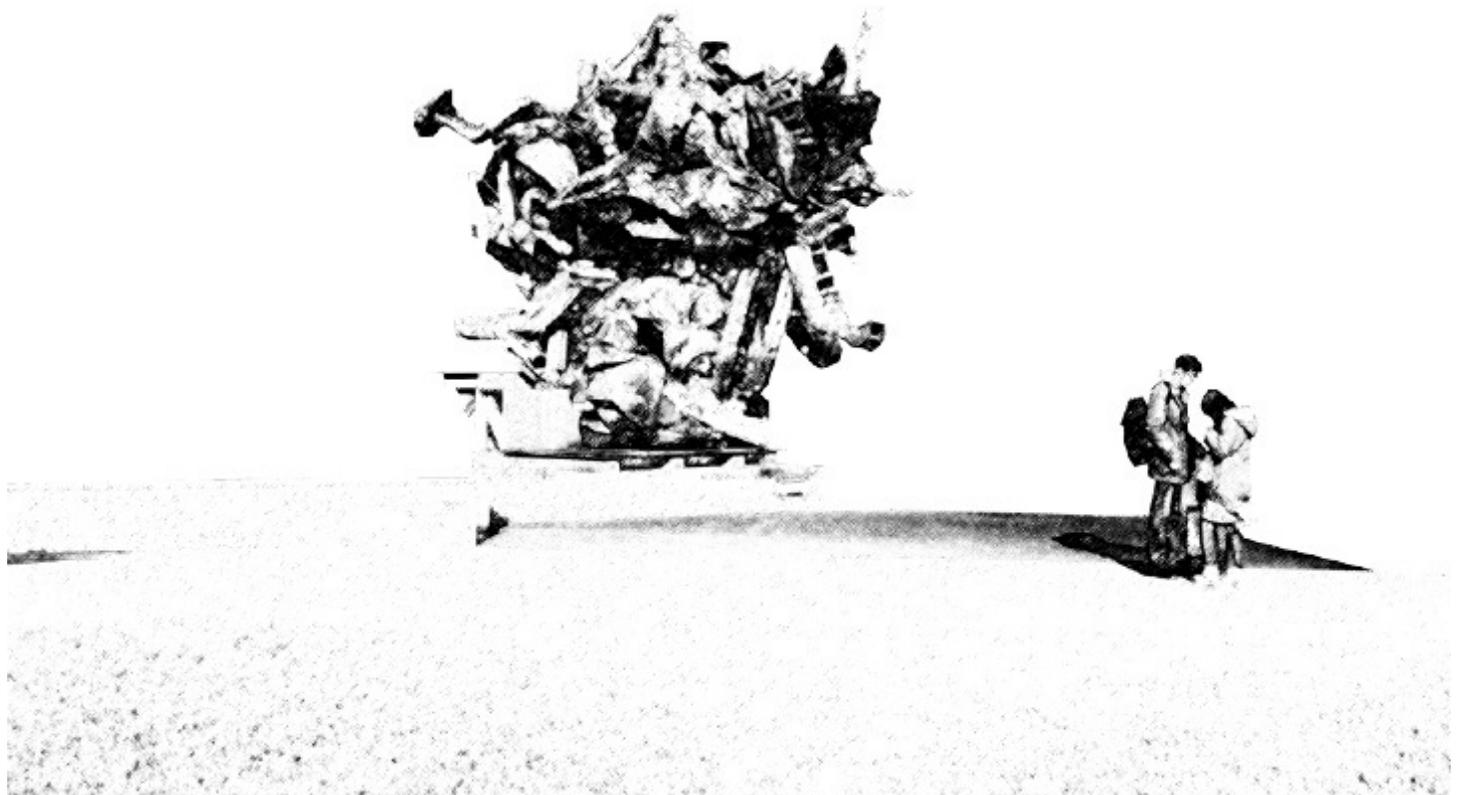
「もう何年もそんなものを見てなかったのに、あなたと付合った途端に見てしまったの。きつと、あなたと付合ったせいだわ」

鼠の死体はなにか重要なメッセージであるらしかった。彼女の中では、彼女と鼠の死体とわたしは無関係のものではない。わたしはなんて答えていいのかわからなかったので笑っていた。

一週間後、彼女はわたしに恋人の関係を解消したいと告げた。

「考えたけど、あなたと付合うのは無理！」

一方的に彼女に、そう告げられた時、確かに無理かもしれないとわたしは頭を抱えた。



形のない心は、
根拠を求め。た
自分の耐とな
わは中にこき

身体を結ぶものが、
なければ、わたし
達は、バラバラに
なってしまふ。現
実と夢を結ぶもの
がないと、やはり
わたし達はバラバ
ラになってしまふ。

わたし達は拠り所を求める。因果的に
答えを探し出す。何がしあわせなのか、
何が楽しいか、それらは不安の解消で
しかない。それはジャンケンで何故勝
てたのか、宝くじが何故当たったのか
という探求に答えはない。ただ、わた
し達は答えらしいものを見つけて、そ
れを共有してしまふ。正しいものはな
いという答えが出ているのに、その答
えをすっかり忘れ、新しい答えを身に
つけてしまふ。おじいちゃん、朝ごは
んはもう食べたっけ？

しかし、わたしと付合ったことのある恋人たちはすべからく鼠の死体を見ている可能性もある。今までの恋人は、わたしと鼠の死体を結びつけないから、この法則に気付いていないだけか、気付いたけど遠慮して報告してないだけかもしれない。得体のしれない負の法則が世の中に存在していて、それがわたし達の仲を引き裂いた可能性もある。彼女が鼠の死体とわたしを結びつけたように、わたしも鼠の死体と彼女を結びつける。体験を、問題を、原因を、どういう風に処理するかは人の自由だ。でも、自由だからってそれを人に押し付けるのはどうだろう。せめて話し合おう、とわたしは思う。お互いの想像の中で完結するのではなくて。



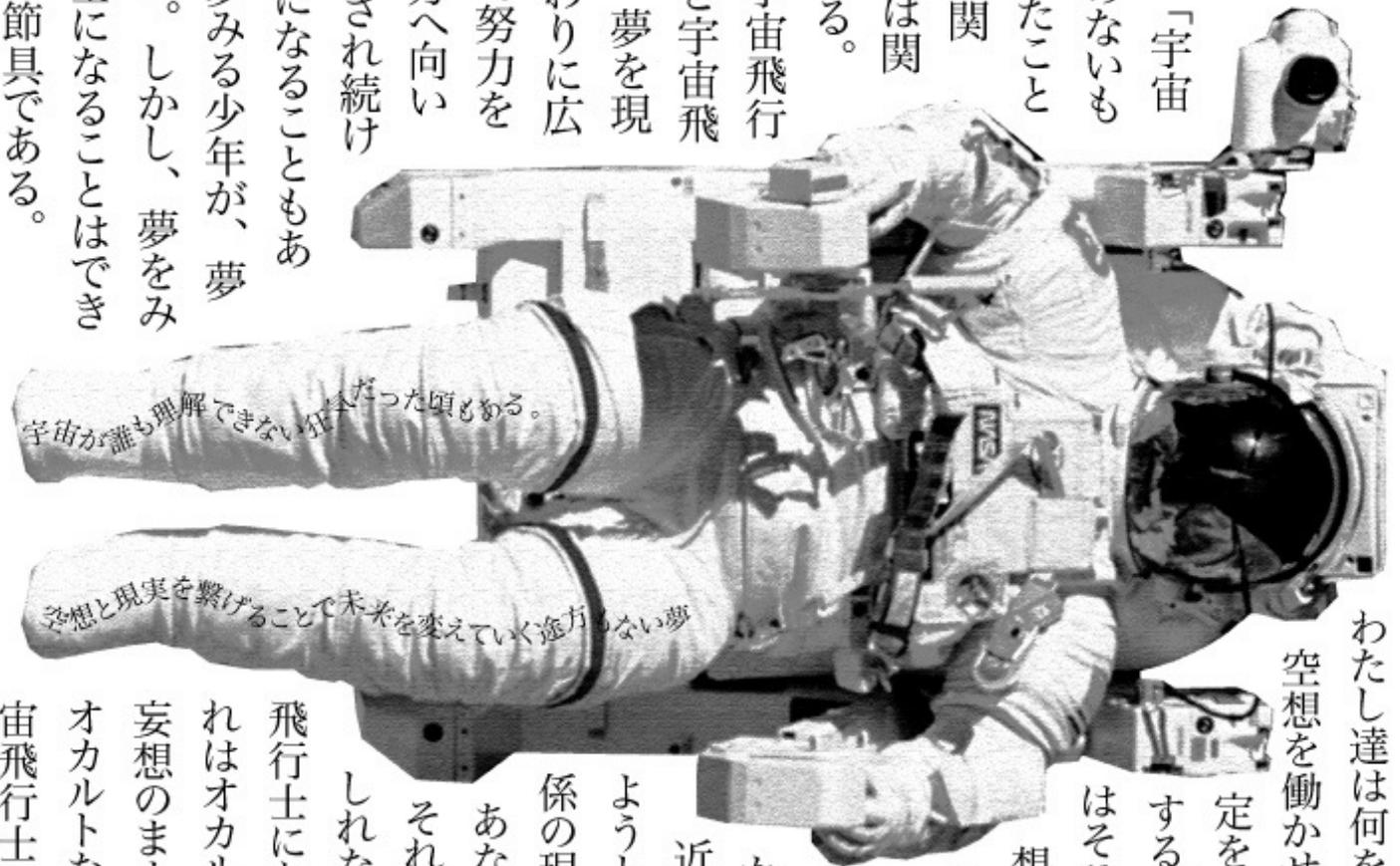
わたしは神だ

「わたしは神で、わたしが世界を6日間で作った」と言っても、それは妄想でしかない。しかし、それを100人が信じたら「わたしは神である」という妄想は個人を越えて、宗教となるだろう。もっと普及して10億人が信じたらわたしは1つの学問になるし、71億人が信じたら、わたしはもう神だ。たとえ、わたしが6日間で世界を作っていないとしても、それは変わらない。71億人がわたしという神の味方だ。認識において真実は



必要不可欠な要素ではない。「宗教もまたオカルトである」。今は進化論というわたし達が猿から進化したという学説が今は支持されているけど、本当にそうだろうか、わたしはわたしがあなただを作ったと思っている。あなたはわたしの一部だ。

少年は宇宙飛行士になりたいと夢をみる。この時、少年と宇宙飛行士を繋げるものはない。「少年」と「宇宙飛行士」はまったく関係のないものだ。わたしが恋人になったことと、ネズミが死んだことに関係がないように、この2つは関連性のない別々の物事である。それでも、少年は自分が宇宙飛行士になる夢をみる。自分と宇宙飛行士をオカルトで繋げる。夢を現実にする為に、狂気をまわりに広げるために、信念を持って努力をする。努力は常に正しい方へ向いているわけではないが承認され続けられ、少年が宇宙飛行士になることもある。すべて宇宙飛行士の夢みる少年が、夢を叶えられるわけではない。しかし、夢をみなかったものは宇宙飛行士になることはできないだろう。オカルトは結節具である。



わたし達は何をしようとする時に妄想をする。空想を働かせる。狂気を閃かせる。1日の予定を立てる時もわたし達は同じことをする。どこかに出かける時もわたし達はそこにいる自分を想像する。それは想像であって現実とは繋がっていない。わたしがどれだけあなたの隣にいる想像をしても、あなたの隣に近づくことはできないだろう。しかし、想像にすぎないそれを現実のようにと目論む、関係のない妄想と、関係の現実を繋げることによって、現実にあなたの隣に行くことを考え始める。それはうまくいかないことも多いかもしれないけど、時には成功する。「宇宙飛行士になりたい」という大きな夢も、「それはオカルトだ」といって思考停止をしたら妄想のまま。本当にオカルトなのか、なぜオカルトなのかと探っていく必要がある。宇宙飛行士になる必要があれば、だが。

宇宙が誰も理解できない狂気があった頃もある。

空想と現実を繋げることで未来を変えていく途方もない夢

オカルト

それは隠された知識としてハイカルチャー層からオカルトサイエンスとして生まれ、反キリスト教思想としてオカルティズムに押し込められ、定義は時代や文化によって変化をしてきたが、一貫して言えることは、オカルトとは事実ではないものを示し、反証できないもの、空想のもの、根拠のないもの、またはその学問についてを指し、その意味は時代と共に広がってきた。しかし、それとともに勘違いされやすい言葉でもあり、その周辺にあるのは更新されない古い定義と、思考停止の集大成のような現象がみられる。

UFOはオカルトではない。ただの未確認の飛行物体だ。UFOと宇宙人を結びつけて考えることではじめてオカルトな事物になる。本来、UFOと宇宙人はまったく関係性がない別々のものだ。このまったく関係のない2つを結びつける古いアイデアがあっただけ。ノード。

存在する人ほど、UFOと宇宙人を関連づけて考えている。未確認飛行物体は主観的な体験と存在していくらでも飛行機に見えるからだ。飛行機を見たことには飛行機はUFOになりえる

「いいかい。手元にあるデータファイルをすっかり処分しろ。あとは切手採集でもするか、女の尻でも追いかけるんだな。UFO問題は感情の泥沼みたいなもんだ。悪銭苦闘すればそれだけ深みにはまる」

ジョン・A・キール

Unidentified Flying Object
未確認飛行物体
UFOがエイリアンシップだという根拠は何一つして存在していない。古い迷信を信じて、思考停止状態になっている。
突飛な妄想と、思考の停止がオカルト思考の入り口。

宗教を信じぬものも信念なし、

信じるのも信念ではない。

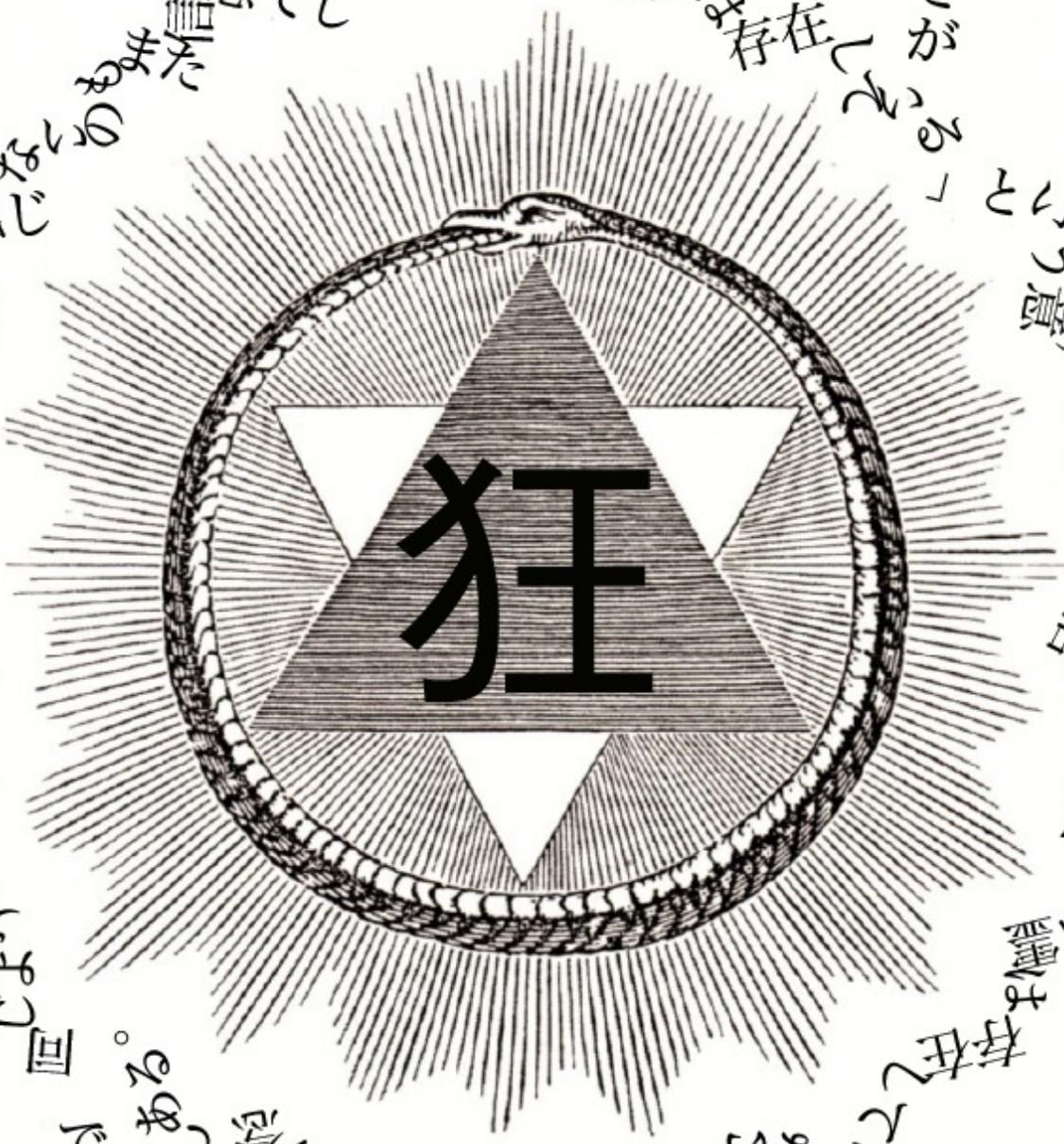
「幽霊は存在してゐる」と

どう意見はひとつの信念だが、「幽

霊は存在してない」

でも、それもまた

信念の信念である。



わたし達は偏見から逃れられない。身分の高い服装をしている人は身分が高いと思うし、その逆もまた同じ。貨幣制度だって紙やコインに虚の価値をつけくわえているだけで、本体はそれ以上の価値はない。みんな思い込むことや騙されることで社会を廻している。虚構はわたし達の血や肉でそれを否定したところでどうしようもない。裸の王様が裸だとしても、コミュニケーションの中でそれを暴くメリットは何ひとつない。

人は自分の中の空白に耐えられない。空白はわたし達の経験則によって埋められる。わたしたちは未来に向かって手を伸ばすのだけど、その腕は常に過去でできている。わたしたちは過去を網渡りしながらでしか未来に行くことができない。しかし、過去と未来は別のものだから、真逆のものである。未来へ向かうものは滅びに向かうことであり、過去と未来とのすれ違いに引き裂かれる。現状に満足しているものは過去に固執して、それが変わることに怒りを感じる。何故なら世界のほとんどは過去からできているからだ。未来は世界の設計図ではあるかもしれないけど成分ではないし、設計図だとしてもそれはひとりひとり思い描いているいい加減なものでしかない。未来への肯定は過去への否定であり、未来へ向かうことは滅びに向かうことではない。しかし、未来へ続かないことには過去も存在しなくなってしまう。わたしたちは生存というジレンマを抱えていて、そのジレンマを解決するものが過去と未来が混在した「維持」というものだ。人々は維持を愛し、維持を欲する。維持ができないものを貶めて、過去や未来を殺してきた。そうやってわたしたちは生きている。維持する為にわたし達は生きる。

狂いながら生き長らう

わたし達は信念で戦い

真実と敵対するものだ。

信念とは、狂気で

信念とは狂気である。もし、信念が狂ったものではなく、正しいものだとしたらそんなものを信じる必要はない。信じるという行為がすでにそのもの不安定さを認めている。不安定なものを固定するために信念がある。信念とは船舵具を固めるもので、それは真実や、正しさとはまた全然違うものだ。虚構を半分認めた上にそれはなりたっている。すべての矛盾を受け入れ、合理的なものを選びそれを強く信仰することが信念だ。信念はよく悪くも人の力を引き出すものであり、それは多くの人を救ってきたし、多くの人を殺してきた。信念なんかなければ少数派は叫ぶ。べつにリベラルな考え方をすればもっと効率的な生き方ができると思う。しかし、現在の世界は狂気の世界で、誰もこの過去の狂気を捨てる気なんかない。狂気の中で裸踊りをしてる。または裸踊りをしてるから狂気じみているのかもしれない。ともあれ裸踊りは楽しくて、気持ちがいいので、それをやめることは耐えられない。したがってわたし達はしばらくの間、もしくは人類は一生涯の中で生きていくことになっている。わたしはわたしの狂気を受容する必要があると同時に、それを狂気だと認めなくてはならない。わたしたちは多くの船舵具に縛られて操り人形のように生きている。わたしたちに自由なんかないのかもしれない。より気持ちいい縛り方を探しかない。SMプレイはそんな人生に似ている。わたしたちは社会は常にリーダーを選出してそのものに運命や規律ゆだねる。それと同じように緊縛癖をすべてを預け、わたし達は縛られていて、その縛られていることを実感することでしか自由を感じることができない。



長い歴史や人数の多さは正しさを証明するものではない。歪みさせて、ねじ曲げることもすらある。強い信念や豊富な経験は真実を映すものでない。それはただ覆うもの。

脳が壁を認識する。壁は存在するが、脳は壁を認識する。

事実とは別ある。

聞き違いを

しる。耳は音を聞き取るが、脳は音を認識する。

脳が壁を認識する。壁は存在するが、脳は壁を認識する。

オカルトは排除することができない。安易なオカルトは思考停止であり、オカルト批判は安易なオカルトを助長させる。

中村古峽は人が迷信に陥る要因を四つに分けている。第一の要因は「生命の不安」。次に「神秘への憧憬」三番目に「心理現象の無知識」四番目に「好奇心」をあげている。わたし達は生きていく意味をしらない。そんなものはないのかもしれない。しかし、その空白に耐えることができない。だから、生きる意味を探す。探すことで命を落とす者もいるくらいそれに耐えることができない。だから、生きる意味と何か別のものを繋ぐようにする。正解なんてない。それはどうやってもわたし達には見えな問題だからだ。生命への不安。

正しい信念は人による。強い信念は他の強い信念を否定する。



強い信念は他の強い信念を否定する。正しい信念は人による。

神秘への憧憬は、肉体という強者におけるルサンチマンとしてわたし達は精神と精神の創造主、形而上的な何かの存在を渴望する。心理現象の無知識。わたし達は思ったよりわたし達の機能を知覚していない。無意識で体を動かしていたり知覚できないものによって自分の判断が変わってしまう。病気にかかりやすい環境はあるし、かかりにくい環境もある。好奇心は好奇心。それがなくなることはない。好奇心が命を奪うこともある。好奇心は猫を殺すか？オカルトはわたし達にとって重要な機能を果たしているらしいリベラルな考えがそれにとって変わる日もくるかもしれない。でも、わたしが生きていく間にそれは訪れないだろう。そこまで大胆なイノベーションが起きるとは思えないし、起きたとしたら、それにわたし自身が耐えられないだろう。だから、どれだけ非合理的な古くさい考えがあつたとしても、それを受け入れなくてはならない。もしくは、それでも思考停止してはならない。なぜなら望もうが望ままいがイノベーションはいつかやってくる。太陽が昇るようにやってくるそれを止めることはできないからだ。

新・ないたあかおに

-マクロスF 外伝-

草薙健一

『新・ないたあかおに』 -マクロスF 外伝- 草薙健一

はじめに

みなさんは浜田ひろすけ作『ないたあかおに』という童話をご存知だろうか？
読んだことがない方はぜひとも読んでいただきたい。
ここにあるのは、かつてこの童話に涙した筆者が送る
アニメ『マクロスF』の二次創作である。

この広い宇宙の中、ただただ戦争のためだけに遺伝子操作で造られた
巨人族の男性たち『ゼントラーディ』と巨人族の女性たち『メルトランディ』。
双方が戦いを始めてから200万周期以上の年月が過ぎた。
そしてこの戦いを終わらせたのは、ただひとりの『マイクローン』
『地球人』の少女リン・ミンメイの『歌』であった。
彼女の『歌』は巨人族たちの遺伝子の奥深く埋もれていた
『文化』を思い出させ、この戦いを終わらせたのである。
彼女がいた宇宙船は畏敬の念を持って『マクロス』とよばれた。

私の名はアルマ・アルトーリアス少尉。
星間移住船団『マクロスXXX』に所属するメルトランディの軍人だ。
リン・ミンメイの歌が戦いを終わらせてから数十周期。
文化に目覚めたゼントラーディとメルトランディ、
そして地球人はともに歩むこととなり
地球人の棲んでいた惑星が戦いで壊滅的な被害を受けたため
新たに三者が共に棲める惑星を探そうと星間移住船団を送り出したのである。
それらは完全なるバイオスフィアを形成し、一個の生態系といえた。
私の任務はそんな星間移住船団のひとつ、マクロスXXXの護衛だった。

ある日、私たちは移住可能な惑星を見つけた。
しかし、そこにはすでに開拓者たちがいた。
その惑星の名は「サレム」とのことだった。
サレムはこの惑星はすでに開拓中であることを告げてきた。
私たちはその惑星を去ろうとしたときに敵襲を受けた。
敵は闘争派とよばれるゼントラーディの一群だった。

想定されることではあった。
ゼントラーディとメルトランディは共に戦いのために
遺伝子操作されて闘うための本能を植えつけられ、造られた生き物だ。
文化を受け入れようとせず、戦いを続けようとする集団は
ゼントラーディ、メルトランディ共にいた。
私たちは必死に戦い彼らを撃退したが、船団はちりぢりとなり、
私は救命ポッドで脱出せざるを得なかった。

私の救命ポッドは運よく惑星サレムに降り着いた。
赤外線探査で近くに集落があることを知り、まずそこまで赴いてみることにした。
もちろん超空間通信で救援を呼ぶことは忘れずに。
朝日が照らす山々の間を抜けると、畑が連なっていた。
そこで私は気がついた。
畑の間の道の幅が地球人の規格で5mくらいしかない。
つまりここは私のようなやメルトランやゼントランが働けるようにはできていない。
いやな予感がした。
私の身長は地球人の規格でいうと18mある。
畑を踏み潰さないように気をつけて歩いたが
ずしーんずしーんと地響きがした。

道を進むにつれ私の予感は確信に変わった。

「なんだあれは！」

「メルトランだ！メルトランが来るぞ！」

「みんな避難するんだ！」

そうだったのだ。

マクロスXXXが連絡のみでこの惑星サレムを立ち去ろうとしていた理由は、

サレムが地球人の純血派の開拓星だったからだ。

純血派とは、ゼントラーディやメルトランディは

それまで忘れ去られていた技術で地球人と同じサイズになることができたが、

遺伝子操作で植えつけられた闘争本能だけは消せはしないと信じて、

ゼントラーディやメルトランディとの一切の交流を断った地球人のことだ。

集落の中央に集まった地球人たちに私は告げた。

「私はアルマ・アルトリアス。この惑星を離れる前にゼントランの闘争派に襲われてこの惑星に漂着しました。

みなさんに危害を加えるつもりはありません。ただ、救難船が来るまでこの惑星にいさせてください」

集落の長らしきものが応えた。

「ここは地球人のための惑星です。ゼントランたちは災いを呼ぶ。速やかにこの惑星から出て行ってください」

「そうだそうだ！」

「メルトランは出て行けー！」

罵声と共に石が飛んできた。

私にとっては砂粒程度のものだったが

彼らの敵意が私に向かっていることが哀しかった。

私は踵を返して救命ポッドに歩み去った。

当然のことながら救命ポッドにこの惑星の重力を突破する能力はない。

不幸中の幸いというのだろう、救命ポッドにはある程度の食料があった。

食料が尽きたらポッドを兼ねている救命槽に漬かって眠ればいい。

私は救難船が来るだろう数日後までぼーっとしてすごすことにした。

ひまを持て余していたある日、私は目を閉じて歌を唄っていた。

「超時空シンデレラ」ランカ・リーの歌だ。

彼女には、ある惑星でまさに行われようとしていた

闘争派のゼントランの反乱を未然に収めたという伝説があった。

唄い終わったとき、拍手の音が聞こえてきた。

目を開けてみると地球人の少年が私のすぐ近く、足元にいた。

「はじめましてアルマ、おれセスタス！」

二人して座ってあれやこれやと話をした。

この惑星サレムのこと。

他の惑星や、マクロス船団のことなど。

「アルマ、今のってひょっとしてランカ・リーの歌？！」

「そうだ」

「いいなあ、他の星は！ランカはゼントランと地球人のハーフなんだろ。

この星ではゼントランが唄っているからって禁止なんだ。

シェリル・ノームの歌もゼントランのために唄っているから禁止。

頭にきちゃうよ」

「純血派の集落の子なのに、くわしいんだな」

「おれ、村長の息子だから星間ネットにもアクセスできるんだ。ナイショだけどね」

突然、集落の方角に煙が立ち上った。

よくない報せだ。

「アルマ、あれ何？」

「つかまっている！」

私はセスタスを掌に乗せて集落まで駆けた。

待ち受けていたのは最悪の事態だった。

私たちマクロスXXXと戦った闘争派のゼントランの残党が集落を襲っていた。

「ここにおれたちの敵のメルトランがいるはずだ！そいつを出せーっ！さもないと全員殺す！」

残党の隊長らしきゼントランががなっていた。

私の放った超空間救難通信は敵にも傍受されていたらしい。

「どうしようアルマ？みんな殺されちゃうよ」

村の外れの丘陵地の陰に隠れた私は大地に静かにセスタスを置いた。

「大丈夫だ。まかせろ」

私は身を起こした。

「それは私だ！みなに手を出すな」

「おお、自分から出てくるとはいい度胸じゃねえか」

舌なめずりする隊長。二流のすることだ。

私は丘陵地に隠れていたときから、この集落を襲ったゼントランの人数と装備を確かめていた。

5人全員小銃で武装しているが強化服を着用しているものは一人もいない。

チャンスだ。

そう判断した瞬間、私はいちばん近い距離にいたゼントランに向かってジグザグに疾った。

「こ、こいつ・・・」

背後に回って両手で頭を捻る。

ぼきっと音がしたのと同時に動かなくなった敵を盾にして敵が右手に構えていた小銃を斉射。

2人をズタボロになるまで撃つ。何しろ相手は戦闘用に特化したゼントランだ。

ちょっとやそつとでは死んでくれない。

弾薬が空になると同時に4人目に向かう。

小銃を片腕で跳ね上げて両掌で胸を打った。

肺と心臓を同時に破裂させられた敵は鮮血を吐いて斃れた。

だが5人目に向かうには距離が遠かった。

「く、来るなあ！近づいたらこいつらを全員殺す！」

敵の小銃の銃口の先には集落の住民たちの姿があった。

私が敵を斃すまでに住民のほとんど全員が死ぬことは明らかだった。

「わかった。言うとおりにしよう」

「両手を頭の後ろに組め！」

私は敵の言うとおりにした。

次の瞬間、私は両肩を撃ち抜かれてあお向けに倒れた。

「このメルトランが！てこずらせやがって！」

近づいてきた敵の蹴りが脇腹に入った。

敵の蹴りは続いた。

しまいには折れた肋骨の破片が肺に刺さって

口から真っ赤な血が吹き出た。

「ようし、止めを刺してやる」

敵は私に銃口を突きつけてきた。

敵が絶対的な優位を確信したときこそが絶好のチャンス。

不用意に私に近づいていた敵の踵とひざに両足を引っ掛けて一気にひっくり返す。

「な、何い！」

あお向けに倒れた敵に馬乗りになった両腕の効かない私がくり出せた技はただ一つのみ、
渾身の力を込めておのれの額を敵の顔面にぶつける頭撃だった。

がつつん。

鈍い音が響いた。

「がはっ」

敵は前歯と鼻が折れたようだ。

それでも私の髪をつかんでこようとした。

がつつん。がつつん。がつつん。

急に敵の手の動きがあやふやになった。

鼻骨の破片が両眼に突き刺さったらしい。

ぐしゃっ。ぐしゃっ。ぐしゃっ。

私は敵の手足の痙攣が止むまで頭撃を続け

敵が死んだと確信してからようやく立ち上がった。

私の視界は真っ赤に染まっていた。

敵の歯と頭骨の破片が額に刺さって流血したからだ。

「アルマ！アルマー！」

足元からセスタスの声が聞こえた。

「みんなを助けてくれてありがとう！アルマ！」

「やめろ！あいつはメルトランなんだ！」

「そうだ！あいつがいなかったらこんなことには・・・」

私は救命ポッドに向かうべくよろよろと歩いていった。

両腕をぶらぶらと垂れ下がらせながら。

いくら私が戦闘に特化したメルトランとはいえこのままでは命が危ない。

一刻も早く救命槽に漬からなければならなかった。

「アルマ！ 待ってよアルマ！」

セスタスの声が聞こえてきた。

きっと精一杯走ってきたに違いない。

だけど私はこう応えた。

「ついてくるな！ ついてくるんじゃない！」

セスタスを置いて救命ポッドに向かった私は視界がぼやけているのに気がついた。

私は涙を流していたのだ。

戦うために生まれてきたメルトランが戦いに勝利して涙を流すなんておかしい。

恥ずべきことだ。

そう思いながらも、両肩を撃ち抜かれた私の手は流れ落ちる涙をぬぐうことができなかった。

私はただただ涙を流し続けた。

私が救命槽に漬かって眠りについてから幾日経っただろう。

ある時、光が差した。

「よう、アルマ」

あいた救命槽のハッチから耳になじんだ声がした。

マクロスXXXのバルキリー（人型可変戦闘機）A小隊のエース、タカハシ少佐の声だ。

それと同時にもうひとつ声がした。

「おはよう、アルマ！」

セスタスの声だった。

だが、何か変だ。

私は常に彼らを見下ろす視点だったのに、今では目線がほとんど同じだ。

しかも、私ひとり入るだけの大きさだった救命槽の内部がやけに巨大に見えた。

「いやそれがなあ」とタカハシ少佐。

「救命槽の記録からするとだな、お前の身体はあんまりにもぼろぼろになっていたと救命槽が判断して

お前を効率よく治療するためにマイクロンサイズに縮めちゃったんだよ」

なああああああ——っ！！！！

「あははは、アルマはマイクロンになっても大きいんだね」

私はセスタスより頭一個背が高かった。

「でき、早く何か着てよ」

救命槽に漬かっていたいた私は当然のごとく素っ裸だったので

横を向いたセスタスが手渡してくれたXLサイズらしきTシャツを

頬を紅らめながら着用した。

タカハシ少佐はそんな私をにまにまと眺めていた。

こいつ、あとで絶対殴る。

私がこの惑星サレムに下りてくることになった戦いのあと、
集結したマクロスXXXの船団は私を救助するために一部の戦力を割いて
サレムに向かわせてくれたそうだ。

そして純血派の地球人たちも私の活躍(?)とセスタスの懸命の説得があつて
他のマクロス船団との交流を始めたとのこと。

私はサレムでの武勲により2階級昇進して大尉になった。

それと同時に長期間の休暇を与えられた。

だが私の価値観では働かないメルトランはただの大飯食らいだ。

私は当分の間マイクロンサイズのままにいることにした。

今、私のとなりにいるのはセスタスだ。

彼はサレムからマクロスXXXへの留学生となった。

メルトランのサイズでいたときは気にもしなかったが

彼は生まれてからやっと15周期を迎えたばかりの少年で私より10周期も若い。

そして主にやっていることといえば私のストーカーだ。

なにかと私につきまってくる。

正直頭が痛い。

誰か教えてくれ。彼を止める方法を。

「待ってよう～、アルマ～」

「ついてくるなっ！」

おわりに

これが私なりのハッピーエンドの「ないたあかおに」です。

もし「マクロスF」をご覧になられてない方がいらしたら

これを機会にご覧いただければ幸いです。

ここまで読んでくださったみなさん、

ありがとう！そしてありがとう！

SOUSHIKISS



SEKIUO

キ ス マ ー ク

だ ら け の

瞼 が 焼 け て

光 る ● 眼^{マナコ} に

炎 が 宿 っ て いる

こ こ に 太 陽

本 番 の 太 陽



LOGO
DOTE



第四回新脈文芸賞発表

KISS YOU

遠藤玄三

サクラの神様

小島パブロン

野蛮で素敵なお夢

にしお

濁った精子

北橋勇輝

アテイの猫

九十現音

いちごあじ

戸森めめん

『ゆく河の流れは絶えずしてしかも、もとの水にあらず。』言わずと知れた方丈記の一節である。再びこの新脈文芸賞の審査員にお声をかけていただき、渡された原稿を読み終えてふと浮かんできたのだ。

同じ「新脈文芸賞」という名を冠した賞でありながら、応募作品の「色」は前回とはまるで異なる。それでいて前回に勝るとも劣らぬヴィヴィッドな作品の数々が私にあの時と同じ感動を与えるのである。

常に移ろいながら流れゆく大河は常に新しき才能を運んできてくれる。さあ、共にその清らなる一滴を味わおう。

『野蛮で素敵な夢』は実に秀逸な作品である。

この作品の中心人物である「そうわさん」は五十代半ばのおじさんで、しかも少々逸脱した性的嗜好の持ち主である。箇条書きのマジックなどではない、おそらく誰が読んでもこの印象は最初から最後まで変わらないだろう。

にも拘らず、このそうわさんという人物は魅力に溢れている。どこがどう、と訊かれれば答えに窮するが、とにかく溢れている。本当にそうとしか言えないのである。

物語はその魅力によって紡がれていると言っていいし、さらには『物語』の枠に留まらないものすら感じさせる。きっとこの人はなんとなく女性にもててきたのであろう。それなりにアブノーマルな行為も行ってきているのではないだろうか、最後にかねてよりの「双子フェチ」を残すのみとなった程度には。

これはあくまで私見に過ぎないが、この作品にはこんなことを取り止めもなく読み手に考えさせるような描写が随所に散りばめられている。ここで見ているのは「お話」ではない、「そうわさん」という人物の半生だ。

彼は単なる登場人物に収まらず確固として存在し、この物語で見えているのはほんの一部分に過ぎず、それでありながらその全てをさらけ出しているかのようだ。ル＝グウィンによれば歴史上ひとりの人物を描くことのできた文学作品は非常に稀であるというが、この作品がそのひとつであることはさして疑うところでないだろう。

そしてもうひとつ、この作品を成立させるのに欠かせない要素——語り手についてだが、その名が作者と同じ「にしお」であることは果たして何を意味するか。この人を喰うことを考え続けているような語り口からすると短絡的に考えるのは性急にも見えるが、果たして。

読むたびに湧いてくる想像は尽きることなく、そしてそのひとつひとつが何と心地よいことだろうか。

始めにこの文章だけはあまり女性に向けられたものでないことをお詫びせねばならないが――

—『濁った精子』にはそれを措いても受賞するべきものがあったことは書いておかねばなるまい。

を読んであなたは何を感じただろうか。この物語は決して日なたの存在ではない。扱われる『自慰』という主題に嫌悪を覚えた方もいるだろうが、しかしそんな方も今一度内省していただきたい——あなたの胸に訪れている嫌悪、その中に別種の重苦しさがいないか、と。

この重みは多くの方が共有したと私は信じている。その出所がこの作品全体をどうしようもなく支配する「思春期」であることは想像に難くないだろう。どうしようもなく肥大する性欲の前に我々はいとも容易く「人」から「ヒト」へ返る。誰もその軛から逃れることはできない。この物語はどこにでもあるありふれたものだ。

そう、この物語はありふれている。我々はこのストーリーを知っている。一挙手一投足が手に取るようにわかる。故に我々はこの物語に自分を見出すより他にない。鏡に映る猿を見ざるを得ない——これは、その重みだ。

そういう点で、作者はなんとも厄介なことをしてくれた。私たちはこの物語の感想を容易に共有することはできない。己の身体にメスを入れ最もデリケートな臓器を摘出することを要求してこられてまで口を開こうという人間はそうはいないであろうから。

もしあなたがそれをできるというのなら——さあ、教えてほしい。あなたの思い浮かべた「女」は誰だ？ 「女子」ではない、AV女優と重ね合わせることを許された唯一の人間は。その顔を思い浮かべて、あなたは何を想っている？

この答えが何であったか、それは重要ではない。この質問を提示できることそのものがこの作品の代えがたき価値である。

『アティの猫』の選評——その響きのおかしさを、作品を読んだ方は分かっていただけだろう。

穏やかで優しい童話の中に籠められたメッセージ、ああ、それに触れることをどうかお許しいただきたい。言わない方がいいことは分かっている。しかしそこに触れないわけにはいかないのだ。

主人公たる氷雨、彼女は住むニコラシカの街のメインストリームに迎合することのできない存在である。彼女はそのニコラシカから逸脱する際に自ら持つ「ナイフ」を捨てることを選択する。そのナイフが「言葉」であることなど勿体ぶることではないので流してしまおう。

「はじめに言ありき」を持ち出すまでもなく存在は言語によって認識される。作中において雲を導く存在である雲が「真の名」に流されそうになる、と述べているのは名前が自己を定義するものであり、存在の根底にあるからだ。名前の影響は自分が自分であろうとすれば断ち切ることはできないのである。

この名前の力はラストにおいて氷雨にもまたはっきりと及んでいたことが示される。夏と冬の両方の季語である「氷雨」はどちらかを選ぶこと、即ち「ナイフ」を用いることはできなかったのだと。

これは一見なるほどと思わせるが、視点をひとつ外に移してみよう。「物語」から「物語の意志」——即ち作者に。氷雨を主人公に据えるということはその主張が「ナイフを捨てること」、すなわち「言葉によって世界を認識しなくともよい」であるとするのが当然だろう。この世のものはあらゆる側面を有する無限集合であり、それを「要素」でしかない言葉で表現することはできないと。

しかし我々の前にある『アティの猫』は童話であり、ゆえにそれぞれのキャラクターは何かの「象徴」として描かれてしまっている。メッセージを伝える手段がメッセージそのものと乖離してしまっているのだ。なんという皮肉であろうか——と、そこで立ち止まってはいけない。

もう一度この物語を読み返してみよう。今私が述べたことは既に書かれていることに気付くだろう——雲の言葉として。

作者は今も氷雨であり、雲である。こんな読めば分かることをつらつらと書き連ねている私はこの物語をナイフでまっぴらつにしようとして空回りしているのだ。ああ、存分に笑ってくれ。

僕らの前に提示された飴玉は『いちごあじ』らしい。

ところでこいつは本当に「いちごあじ」なんだろうか。だってこのお話の中じゃ、飴玉舐めたらトカゲになっちゃうらしいぜ。じゃあどうしてここで言ってる「いちごあじ」が僕らの知ってる「いちごあじ」だって断言できるんだい？

いや、そもそもそこを疑うならここで出てきているのは本当に「トカゲ」なのかって問題もあるな。本当はもっとこう、足が六本あって複眼で羽が生えてて——昆虫みたいなものかもしれない。

待てよ。それを言ったら途中で「わたし」が入れ替わってるかもしれない。ミステリではよくある叙述トリックって奴だ——だめだ、疑ってたらキリがない。

そうだな。僕らは作者の言うことを信用しよう。いちごあじはいちごあじでトカゲはトカゲだ。飴玉を舐めたらトカゲになっちゃうことだってあるだろう。むしろ実際にあったことなのかもしれない。何も作者が人間で作り話じゃなくちゃいけない、なんてこの賞の応募要項には書いてないしな。うん、そうだ。そうに違いない。

となると僕らはいまトカゲの話を聞いていることになるのか！ こいつはすごいぞ！ トカゲの考えていることが分かるようになったらきっとカガク的な何かが発展するに違いない！

……あれ、でもトカゲって案外僕らと同じようなこと考えてるんじゃないか？ じゃあ人間とトカゲの違いってなんだろう？ お互いのことが理解できちゃうんならどっちでも変わらないんじゃないか？

こうなってくるともう、何を考えてるのか分からないアイツのほうがトカゲよりよっぽど人間らしくないんじゃないか。この人、じゃなかったトカゲだってトカゲになっても楽しく生活できてるんだ。アイツよりよっぽど分かり合えるだろう。

うーん、つまり人間ってなんなんだ？ 難しいな。考えすぎて疲れちゃった。

え？ 飴玉がある？ ちょうどいいや。人間、頭を使うと甘いものが欲しくなるんだよね。

今ちょっと両手塞がってるからさ、舌伸ばすから乗せてよ。

『サクラの神様』はそこにいる。

「咲きほこる花は散るからこそ美しい」とは誰が言ったか、タイトルが示すと通りの美しい物語である。そうとも、散るからこそ美しい物語だ。

確かに我々は温かいお話を讀んだ、しかし作中に残ったのは死を待つ女の子と裸の桜、それに掬破りの神が三柱。得たものは一月もすればなかったことになり、失ったものははるかに大きい。

しかし「失ったものが大きい」ことこそが、この作品においては重要かもしれない。

この物語における神とは自らの力の枠の中で何かを為すことができたとしてもより根底にある『決めごと』を覆すことはできない。すなわち自由意志を超越して「そう定められたもの」である。

しかし、それが変化すればどうか。「そう定められた」ことへ反抗する意志が芽生えたときそれはなお「神」であり続けられるのか。その先に待つのはあるいはルシフェルの墮天でありアダムとイヴの失楽である。

だがラストにおいて桜の神は『決めごと』に再び従おうとする。彼はまだ神であることを選んだのだ。しかしこれは今までとは決定的に意味が異なる。彼は逸脱するという選択肢を知り、その上で神であることを「受け入れた」。そこにあるのはシステムとしての神ではもはやない。

墮天という道を一度拓き、そして閉ざす。この物語は大いなる「喪失」の物語なのだ。

『KISS YOU』はバランス調整の工夫がよく顕れている。

ありきたりな宇宙人もの、しかし性別を女と女、それも片方をキス魔にしてみることで作品全体の雰囲気を変質させ、どことなく背徳感のあるものとしている。ともすればそちらに傾いてしまいかねない天秤をある程度で保ち、話の主題を保っているのもなかなかだ。

その捻った設定を起きていることが理解できる程度の説明にしいくらかをぼやかすことで、SF的フレーバーを「サイエンス・フィクション」と「すこし・ふしぎ」の両方において出すことを狙っているのも工夫されている点だ。

そして、それらの設定を最後に次々と回収し畳んでしまう。ここでカタルシスを一点集中するように考えられているのだ。設定に限らず、細かいところにラストシーンに至るための仕掛けが施されているのは一度読んだだけでは気付きにくいだろう。序盤にさりげなく書かれたふたつ目のキスを拒否する理由がラストにおいて意味を持つなど、予想できただろうか？

そうやって作者はこの物語を「もう一度読んだときにニヤリとできる」ように構成し、読者がひっかかるのを手ぐすね引いて待っているに違いない。分量すら二度読むのに苦痛にならない程度、を想定しているのではないだろうか。

あなたの前に美少女が現れてキスをせがんできたなら、このお話の記憶をぜひ送ってあげてほ

しい。もちろん、後ろに怖いお兄さんがいないかは十分注意した上で。

以上六作品、いずれ劣らぬ甘露であった。

「山脈」自体はこの号でその歴史に幕を閉じることとなるが、「しん宇宙」でも新派文芸賞は継続することが決まっているそうだ。ご縁があれば次回も審査員として参加することになるだろう。

ミルキーウェイの金平糖はどんな味がするのか、ぜひあなたも教えてほしい。

「野蛮で素敵な夢」

饒舌な口語文体が読んでとても気持ちがいい。休む間もなくちょくちょく入るユーモアにどんな堅苦しい読者でも一度はくすりとさせてしまうセンスを感じた。

そうわさんはいかにも面倒くさそうで明るいかと思えば、壮絶に暗いダメなおじさんであり、おそらくこのそうわさんに憧れる若者はいないだろう。でも、こういうおじさんは確かに存在している。

にしおくんに至っては、外面はいいのかもしれないけど、心の中ではなかなかひどいことをいってるし、陰口を叩いているという、あまり好ましくない人物だけど、それでも憎めないのは彼にユーモアと彼なりの倫理観がしっかりしてるからだろう。どこかしら育ちの良さみたいなものを感じさせてくれる。

2人ともすごく等身大のキャラクターであって、それが作品の魅力になっている。

とくに最後の落ちは素晴らしい。こんなどうしようもない落ちなのに、何故か「やった。そうわさん、よかったね！」って喜んでしまう自分がいた。年齢を重ねると妙な夢は呪いにしかならず、現実的な幸福の方がうれしい場合は多い。

にしおくんが握手した時、わたしにはそうわさんのとびきりの笑顔が見えた。それがどうも頭の中にもこびりついて離れない。

おそらく作者の持ち味というものが、きれいな世界の中で構成されるものではなく、いびつに歪んで、理不尽にあふれた現実の世界においてこそ光り輝くものなのではないだろうか。

「濁った精子」

小さい頃に教科書で読んだヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」を連想させるような苦々しくも淡い青春小説。

特に文章表現が優れていて、この短い中に、作者が思う「性欲」というのが濃密に描かれている。

「水いっぱい満たされたコップ」「放尿するように射精した」「どぶのように濁っていた」といったように、性欲や、そこから生じたものを液体として表現してるのがおもしろい。

全体的にストイックに書かれていて、その生真面目さが読んでいて胸が詰まる気分させられる。好きな女性に対しても一貫して「女」という呼称で徹底しているのが、またなんとも異常で息が詰まる。

この作品において、唯一、気が抜けているのが、母親の「ご飯出来たよー」の声だけだろう。ここだけストイックさが無い。それは主人公の抱えている問題や、歪んだ世界を、この母親は一切抱えていない。つまり、別世界の人間であることを示している。

しかし、母親は生みの親であり、育てたの親でもあり、無関係というわけにもいかない。それにこの主人公の抱えた悩みを克服した人間であるからこそ母親として存在している。主人公もまた多くの濁った精子から産まれてきたであるという事実があるからだ。母親は思春期の男子にとって別世界の人間ながらも、それを超越した存在である。

この母親というファクターを最後に持ってきたことで、この小説の苦々しさが一層深まっているところに注目したい。

正直なことを言わせてもらおうと、少々短すぎる気もする。だが、この短さこそが、読者に対する、世界に対する挑戦にもとれるのだ。パンクなのだ。冗談にしては手が込んでいるし、本気だとしたら危ない感じが読んでいてヒリヒリさせる。

根源的なテーマ、文章表現力、そしてこの構造、丁寧で挑戦的な文学作品であり、文句なしの受賞作品である。

「アティの猫」

賑やかな教室の中、1人だけ頬杖をついて、窓の外に映る曇り空を眺めているようなそんなアンニュイな趣がある童話。

物悲しさの中に流れるやさしさと、やさしさから産まれるエゴが作品全体に漂っていて、作者の人柄が透けてみえるようだ。

物語の込められたメッセージや中身は決して美しいものではなく、むしろ、世間の騒がしさや煩わしさ、はちきれんばかりの不満や不安で詰まっているのだけど、それが収められている外面的なものは美しいもので構成されている。それはいつ壊れてもおかしくないし、壊れてしまったのは、鋭く尖って人を傷つけてしまうような危うさがある。つまりガラス細工や、アメ細工みたいなハラハラ感がこの小説にはある。

ナイフをぶらさげた猫たちの状景がなんともかわいらしいが、そのナイフと猫の組み合わせというのが、猫の鋭さや、冷たさをいっそう引き立てている。

ある種の人間においては現世はいつでも煩わしい。その煩わしさから解放されたいと喉にナイフをつきたてようとする。しかし、多く人はそんなだいそれたことをせずに、その煩わしさにとけ込む努力をしたり、少しはマシになるように動いたりする。しかし、この物語には、ナイフを突き立てることと、それに順応する以外の手段を提示している。それってもしかしたら、既存の2つの方法より厳しいものなんじゃないかという恐ろしさがある。

物語の構造も、登場人物もぽっきり折れてしまうようなもので構成されていて、一見美しくみえる世界にたくさんのハラハラが詰まった幻想的な童話だ。読むものに多くのものを訴えかけている。さあ、わたし達はどれを選ぼう？

「いちごあじ」

歩いてしゃべるトカゲや、食べると変身してしまうクスリが登場する現代のおとぎ話。そのテ

ンポの良さから荒唐無稽の話として楽しむのもいいけれど、この話の中に旧約聖書のモチーフを見ることができる。

聖書によれば、イブが禁断の果実を食べたのはヘビにそそのかされてだが、アダムが禁断の果実を食べたのは、イブの手によって渡されたからとなっている。この図式は、トカゲにだまされた主人公がそうとは気付かずに他の男性にクスリを渡してしまう図式とまったく同じものである。

またヘビはイブをそそのかした罰として「一生這いずって生きる」呪いを受けることになるが、これは呪いを受ける前のヘビは今と違い手足があったと考えられるし、イブをそそのかしたということは言葉を発することができたわけで、トカゲの校長の姿というのは、まさしく呪いを受ける前のヘビの姿そのものだ。

わたし達は神に禁止された禁断の実を食べて変化し、楽園から追い出されてしまうのだけど、今もこうやって生きている。それはこのトカゲになった人間達がそれでも平然に生きていることとかぶる。

「裸の王様」なんかもこの話に近い。王様は服を着ているつもりで街の中を歩き、周りの人も服を着ているものだと思い込む。そこで子どもが「あの王様、裸だ！」と叫ぶ。この時に今まで服を着ていると思った人たちの価値観が一転する。それまで服を着ていると思っていたものも、一度、裸にみえてしまったら、その後はもう裸にしか見えないだろう。

この「いちごあじ」を読んで思ったのは、キリスト教において「原罪」とされる禁断な行為も、普通に道を歩いている中でふいに起きてしまうものなのではないかということだ。

「いちごあじ」は簡単ながらも、なかなか深いおとぎ話である。

「サクラの神様」

読んでいて、春の匂いと、桜の匂いと、夏の匂いが、まじりあって鼻に香った。九州から北へと、南風と桜が舞い散る状景がなんともダイナミックだ。しかし、そのお祭りのようなエネルギーギッシュな展開に後には現実としての死が待ち受けている。

人間を越えたような力を持つものでも、できることとできないことがある。いくら桜を咲かしても「桜が咲いた」という結果しか残せない。そもそも桜を開花させることはサクラの精からしたら奇跡ではない。彼が本当に望んだことは子どもの延命だろう。だから、この作品はある奇跡的な偶然というものを否定しているようにも見える。

死ぬ運命にある子どもにわたし達のできることは少ない。でも、なんとかして喜ばすことくらいはできるかもしれない。でも、喜ばしたところでどうなる？ その死を免れるわけではけしてない。むしろ、子どもに変な未練を残すだけかもしれない。だからって目をつぶって知らんぷりということが出来るだろうか。わたしだったら出来ないだろう。エゴかもしれないけど、やはりこのこのサクラの神や、北風、南風のように、まわりに大迷惑をかけてもその子どものために何かをしてあげたいと思い、行動するだろう。

それははっきりいえば非合理で、不条理だ。もしかしたら、現実を受け入れてない行為なのか

もしれない。でも、おそらくやさしさというのは、そういった合理的なものを越えたところにある。

最後、自分の足で北へと歩いていく姿は「死を受け入れた姿」にみえる。それはやさしさの限界を知ることかもしれない。サクラの神がまた同じ手紙を受け取ったらどうするだろうか。また南風ともに桜の花を舞い散らせるだろうか。

わたしは同じことはしないと思う。それはサクラの神が自分の足で歩きだしたからだ。

「KISS YOU」

最初の印象的なキスシーンから一気に引き込まれ、そのまま最後までノンストップで読み切ってしまった。テンポがすごくいい。

美少女が学校中の生徒にキスして回るという異常な状景もさることながら、2人のレズビアンっぽい関係にも甘酸っぱさはあれども、いやらしさを感じない。

こういった状景は現実ではあまりみかけないもの、絵としては物理的に実現不可能ではない。突拍子のないSF作品だからこそ、あえて実現可能な状景を繋いでいってから、ラストでそれを見事に飛ばしてみせてくれて心地いい。

今までの学園生活から転じて、取手には彼氏ができていているし、吉祥は片手を失っている。

お互いが別々な道を歩んでしまっていて、もうすでに接点を失いかけているんだけど、再開して、古い約束を果たす。お互いが選んでしまった道を変えることはないのだけど、再び交わってまた別々の道を歩んでいく。

フレイザーのいう感染呪術の考えに「一度結合した状態にあったもの同士は、たとえ互いに著しく害をなすものであっても、未来永劫、結びつきを失うことはない」というものがある。吉祥は一度人間の記憶を捕食し、人間と密接に結合した状態にあったけど、ある一瞬から自分にとって害をなすものになってしまった。それでも取手の元に戻ってきてもう一度結合を果たす。

たぶん、これは取手にとっても同じだろう。

遠い未来に吉祥が人類の敵となって（そんなことはないだろうけど）戻ってきても、この2人の結びつきはなくならないだろう。そんな果てしない銀河をまたにかけた濃厚なキスを感じさせてくれる作品である。

kissyou

女同士の異星人ものは珍しいのではないだろうか。

切ない物語。宇宙人に恋をする、というのは数多有る星々に手が届かないもどかしさにも似て刹那的。

「三年」のキーワード一つで私も一時に三年の月日を経たような気がした。ああ、そうだったか、と思う。ニヤリと作者の笑みが見えた。

キスに始まりキスに終わる物語。だけでも幾星霜を過ごした筈の最後のそのキスは、今までで一番甘酸っぱく、初々しく口腔に残る。

サクラの神様

これからずっと、天気図を見るたび思うのだろう。ああ、桜の神様よ、ずっとこの地で足踏みをして、桜を咲かせてくれないか、と。

あたたかい物語。不意に差し込まれる現実的な情報が、大人の凝り固まったあたまを揉み解す役割を担っている。

大人は情報が無ければ想像すらできない。子どもには見えているものが、大人はわざわざ指差し教えられないと見えないのだ。

故に、これは大人の童話。子どもには当たり前、じっと目を凝らしてしか感じ取ることができない御伽噺。

神は無垢で、歳こそ我々よりずっと重ねているけれど、我々よりずっと純粹で、ずっとよいものだったと言うことを改めて教えてくれる。

いちごあじ

きっと私たち「ヒト」だって、なにものかによって「めろんあじ」の飴玉で変身させられたなにもものに違いない。

「いちごあじ」はそんな足元の確かなものが揺らぐような心持ちにさせてくれる、エントロピーのダウンードラッグだ。

「わたし」とは作者が女のこの客体で持って顕したのだと予想するが、そもそも男女などどっちでもいい。もちろん「ヒト」でなくたって。

「校長先生」が「トカゲ」である必要はない。「飴玉」が「いちごあじ」である必要もない。「存在」それそのものが有ったと思ったら無くなっている、不実のものである。

熱力学第2法則によらなくたって、いちごあじの飴玉は口の中で溶けてなくなってしまうのだ。

濁った精子

とんだオナニー小説だ。

名を与えられた自慰行為は、別のだれかの追想である。

精を受けて以来、幾度と無く行なってきたその行為が、どこかよそよそしく、ろりめいてしまう。

初めから終わりまで冷静に描かれたその行為に、ああ、こういうのもあるのか、と気付かされる。

「奪われた。汚された。犯された。」

こいつは何度でも読まねばならない。そして取り返さなくてはならない。

誰かのものになってしまった自慰に、ぼくは横恋慕する。

アティの猫

濁りっぽい今回の作品群において、とても透き通った筆致、牧歌的な作風だが、物語はエゴとアイデアの有り様に満ちている。

ネコという、我々の尺度からすれば自由の権化のような生き物に人間らしさを与え、虜囚と囲われるような閉塞感をわざわざ生んでいる。

そこに「雲」という人物が、ニコラシカという町に一陣の風を吹き込ませる。

安全は窮屈なもので、案外と心地悪い。それよりかはいくらか危険でも、見た目は魅力的な自由にあこがれるのは仕様の無いこと。

でも、氷雨はたぶん、雲に惹かれつつも、雲の居る場所には実は興味が無いのではないか。

雨は滞った水溜り、そこにじっと、湛えられているものだから。そして、雨はやがて、雲となる。

野蛮で素敵な夢

面白い。風を感じる。

かつて読者がここまで真剣に向き合ったキャラが、文壇に存在しただろうか。そうわさん。そうわさん。

「僕」がかなりひどい性格なのに、それを感じさせないそうわさんのキャラ立ち。そうわさん

。エロそうなそうわさん。

多分、みんなの中にそれぞれのそうわさんがいるんだろう。それを黒板に書き出してみなさい

。

きっと、ビートたけしの絵みたいになるよ。

ハラオの選評

「アティの猫」選評

小説内世界のしっかりとした構築を評価

小説には「世界」の構築が不可欠なのだが、その世界の構築には大きく分けて二つある。一つは、出来事に関わる主要キャラクターの行動の変化によって世界をほのめかされ垣間見られる方法。この場合は、キャラクターの活動から遠心的に世界が断片的に立ち現れる。もう一つは、予め出来事生起以前からあるものとして世界を構築する方法。この場合は、堅固かつ精密に作られた世界の枠組みの中で、その世界の在りようから必然的に出来事が生起し、それに沿ってキャラクターが活動していく。

本作品は、その内の後者の方法を取り、精巧できめの細かいクリスタルのような世界の構築に成功している。ここがこの作品の魅力である。

「区画整理されているニコラシカの街（幾何学的）」・「ナイフで切り分ける（割り切れる二項対立的価値観）」・「こんぺいとうの『量り』売り（＝生産性・計算性）」・「アティの議論」と「電気は発電所で作られている（という大人の説明）」（＝合理性・論理性）」...なんて、規則的な、固体的なロゴス的な世界だろう。

こうした世界に対し、「主人公」と「雲」はアンチテーゼ的存在として対峙する。

「雲」や「風（アメーバ的・不定型）」・「陽が沈むのを見るのが日課」と「（雲の）チョコレート＝『あんなものは子ども食べるものだとかバカにする人も多い』（非生産的・役に立たないもの）」・「主人公氷雨と雲の言動・価値観（割り切れない価値観）」...「主人公」と「雲」は、不規則で、液状のパトス的なものとして描かれている。

取り巻く「世界」と「主人公」・「雲」は、ロゴス的なものとパトス的なものとの対立に他ならない。

そして、こうした「世界構築型」の作品の典型的展開として、その世界の必然性に導かれ、物語は進行していく。だから、文中のニコラシカの古くからある言葉のごとく「世界は考える（ロゴス）ものにとっては喜劇（多くのアティの猫たちの立場）だが、感じる（パトス）ものにとっては悲劇（雲や主人公の立場）」なのである。「主人公」・「雲」は、この世界では特異であるがゆえ、生きにくい存在である、という当然の帰結となる。

しかし、これだけならこの作品は至って凡庸と言えよう。いや小説ではなくただの「一世界の描写」に過ぎない。この作品には、もう一つ注目すべき点である。ここが本当のこの作品の魅力かもしれない。それは、「雲」と「主人公」との関わりに見る「主人公」の立ち位置である。

「主人公」は、たしかにこのニコラシカの街＝「世界」と対峙する存在である。しかし、「雲」は「世界」と対立的存在ではあるが、対峙はしていない。というのは、「雲」の正しい名は「光」である。この「光」は、ニーチェが『悲劇の誕生』で言うところのアポロンの、つまり

はこれもまたロゴス的なものなのではないか。だとすると、「雲（＝光）」はロゴス的世界と対峙しているのではなく、同一のものの裏と表の関係に近い。「雲」は「光」、つまり「世界」のもう一面なのである。

だから、主人公は世界に対峙し沈黙しながら、一方で世界（雲＝光）と対話し共に歩もうとする。この主人公の立ち位置。ここがこの作品の面白いところだ。そして、ここに来て、初めて筆者がこの作品を「童話」と言った（※応募の際、筆者はこの作品を「童話」と称している）意味がわかるのだ。

なるほど、子どもにある種の世を渡る「教訓」と「指針」を示す寓話的特性がよくも悪くも「童話」なら、これほどまでに子どもに「世界との関わり方」を教えるテキストはない。これはまさしく、質のいい、そして王道的な「童話」である。筆者は、「メルヘン的世界」という意味で童話という言葉を使ったのではないと、私は思う。

振り返れば、私たちも子どもから大人になる上で、「世界」に絶望し唾を吐きかけながらも、「世界」に期待を抱き理解を示してきた。「働くのは負け」とうそぶきながら、就職活動にいそしむことで、私たちはどうあれ「世界」の一員になっていったのではないだろうか。

この作品は、そうした子どもから大人になる過程での、世界との関わり方を示していると言えないだろうか。

だから私たちも「ニコラシカの街」に辟易としながら、どこかへ連れ去る明日の「風」を期待している。そして大人になった私たちはこどものように、もはや「ナイフ」の純粹さに過度な期待を寄せられない。

「野蛮で素敵な夢」選評

観察眼と「対象との距離感」を評価

こういう作品（実際の出来事をあり得限り描写した一人称小説）は、いい意味で、「作品評」というより「筆者（主人公＝私）の人物評」にならざるを得ない。なぜなら、この作品は、筆者の、対象に対する観察眼とその対象との絶妙な距離感によって成り立っている作品だからである。これが、他の作品より際立って優れている点である。

最初に会ったところで、よくも「そうわさん」の「隠された本質」に気付いたものである（もっとも、筆者にとってはそうわさんの変態性は顔に出ているので、隠れてはいないのであろうが）。筆者の観察眼の成せる業である。私は当然この「そうわさん」を存じ上げないのだが、おそらくは他の人が見たらこの「そうわさん」に「ある種の違和感」こそ覚えど（ずり落ちそうな眼鏡の掛け方などから）、その「本質」は見抜けないと思われる。「顔に現れている」と簡単に言っているが、実は容易なことではない。この筆者の観察眼がなければ、それに気づくことはなかったと思われる。

個人的な話のだが、こういう「変態性を見抜く特殊能力」を持った人を私の周りでも知って

いる。彼も、ちょっとした違和感からその人の変態性（風俗好きや女装癖など）を看破し、たいがいそれは当たっている。読んでいる中で、私には、この筆者がこの彼と重なってしようがなかった。何かそういうスタンドでもあるのだろうか。

それはともかく、こうした観察眼によって、彼の変態性が徐々に明るみになるのが面白い。

また、対象に対する距離感も絶妙であり、それがこの作品を成り立たせている。

前半は主に、科学者のごとき客観的距離を保ちながら、彼を観察している。だから、彼の言動のおかしなところ一切が悉く筆者によってあげつらわれる。ここでも筆者の観察眼はさえていて、通常聞き流す（くだらな過ぎたり、レベルが低い言動のため）ところを全部拾って並べ立てるので、彼の変さが眼前に明確に示されている。おかしな動物を見つけその一挙一動に疑問を持つ動物学者のようだ。そしてやがて動物学者はこの珍奇な動物に名前を与えるのだ。「ニンニク」太郎」と。

しかし、中盤からちょっと距離感が変わる。「そうわさんの性癖って何ですか」と聞くところである。筆者自身、（そんな疑問）「誰も興味ない」・「誰も聞きたくない」と言っているが、ではなぜ筆者は聞いたのだろうか。

筆者はそれについて直接答えを提示していないが、おそらくはこの珍奇な新生物に「興味」を抱き、さらに知りたいという、まさに学者のような知的好奇心が湧いたからに違いない。そこで、対象との距離は一步縮まるのである。「変な気もち悪いもの」から「知りたい存在」へと。

そして、ラストにおいては、「そうわさんの夢」に筆者がいつの間にか同調している。つまり二人とも夢というか目的を共有しているのだ。「僕が、そうわさんのことで挫折したことを悟ってくれたか、逆にそうわさんに慰められた。僕に申し訳ないのか、双子にすぐ帰られたのが悔しいのか、そうわさんの目は少し赤く充血していた。せっかく屈折していた僕が少しだけでも夢と向き合えたのに、このまま終わっていいのか？このまま前向きなことに背を向けたままでいいのか？」と文中にある。双子と同時に性行為するというそうわさんの目標達成が、いつの間にか筆者の達成すべき目標となっているのである。

私はここで、「学者は研究対象に恋をする」というある学者の言葉を思い出した。ここには筆者のそうわさんに対する愛がある。距離感が非常に近いのである。これには、マンガ「稲中卓球部」の井澤のサンチェに対する愛に非常に近いものを感じた。違和感から理解へ、そして運命の共有…。この距離感の変化がこの話の面白さの本質ではないだろうか。

そういう意味でこの作品は優れている。なお、個人的な希望なのだが、この筆者にはエッセイやルポ記事を書いて欲しい。この観察眼と対象への距離感があれば、きっと面白いものを書いてくれるはずだ。

「いちごあじ」選評

不条理さの巧みな描写を評価

この作品は、非常にうまく「不条理」を表現している。

「不条理」ほど、小説にとって興味深いテーマはない。今まで、多くの小説が「不条理」をテーマにしてきたのは、みなさんご存じの通りである。

「不条理」とは「理屈に合わない」ことであるが、小説で「不条理」を描くのは難しい。たとえば本当に「理屈に合わない」、支離滅裂、意味不明な話をもって、それが「不条理」をテーマとした小説が成功しているかと言えば、そんなことはない。むしろ、それでは「不条理」は描けないのだ。

ではどうしたらいいか、というと、「不条理」を描くとは、読者にその「不条理」さを理解させる行為である。理解させるには論理と筋道が必要だ。つまり、「不条理」を描くには、「不条理」を「条理」に沿って表現することなのである。しかしそれでは「条理」ではないか、という人がいるだろう。ならば、芥川の羅生門を例に考えて欲しい。

下人は、ならば私がお前から衣服を奪っても問題あるまいと、遺体から髪の毛を取る老婆から衣服を奪った。この女は生前人にひどいことをした、だから死んで髪の毛を抜かれても止むを得ないし、それは許されると言った老婆にひどいことをした。その女の所業がいかにもひどくても、その遺体が粗末に扱われていいわけないし、そうすることの権利を老婆が持っているわけではない。明らかに「不条理」である。しかし下人が、今度はそれを言った老婆をその「不条理な理由」で衣服を強奪するところに「条理（そう言うならお前もひどいことやってるのだからひどい目にあってもよいという理屈）」があり、そして逆にその「不条理」さが浮き彫りになるのである。

おっと、前置きが長過ぎた。ともかくこの作品は、そうした「不条理」さをうまく読者に飲み込ませるロジックの巧みさを持っているのだ。

ここではそのロジックの進行に寄与するものとして、「校長先生の強引さ」と「主人公の天然さ」がある。主人公と「校長先生」のやり取りを見ればわかるが、とかげの「校長先生」が言うことは世間の常識と照らし合わせるとかなりおかしい。というよりも、とかげのなりをしていることそのものが既に違和感を催させる。しかし、この主人公の感覚も相当にズレたもので、人間大のとかげを見ても「あっけにとられる」だけで逃げも騒ぎもしない。この天然さが「校長先生」のおかしな、強引な言動を許容することに対しての納得を、読者にもたらずのだ。大きいとかげを見ても泣きも騒ぎもしない感覚なので、とかげが「私は校長先生」と言っても一応は受け入れるし、しかもそいつからもらった飴を気味悪がらず口にするのだ（と理屈付けられ読者は納得する）。

そして、非日常的な風景の中で、会話そのものは定型的論理を保って進行しているのも面白い。とかげ人間が「心配はいらない」と声を掛けるのは、風貌からして奇妙この上ないはずだが、そこには問題を置かず、主人公が「あなたは誰ですか」と声を掛ける。つまり非日常的な出会いにあって、されている会話は日常的、かつ論理的なやり取りなのである。ここにまた「不条理」さが立ち現れる。

こうして書き出しで既に非日常的な不条理な世界を読者に飲み込ませているのが、この筆者のうまさと言えるだろう。そして、そのまま最後まで、読者をこの不条理な世界に何の疑問も持た

せないまま、連れて行ってしまふのだ。

そして、ラストは、実は前半以上に不条理の強度が増している（「とかげの学校」とは何か？また、「とかげのまま女子高生の生活を送っている」とは、どういうことか？）にも関わらず、これまた読者に疑問を持たせてつかえさせることなく、落としている。ありえない世界のありえない話が連続するのだが、うまく日常の論理に合わせて、条理的にことを進めているので、読者もまた、そのありえない世界を拒絶感なく入り込み、そのありえない物語の体験を共有することができる…。非常に「うまい」作品だと思う。

「サクラの神様」選評

「子どもらしさ」を評価

盗んだバイクで走りだして、校舎の窓ガラスを割ったとしても、「この支配」から逃れられはしない。一時の「卒業」はあるにしても。そんなことは大人になるとわかってくることだ。しかしながら、その自分を覆う「秩序」に疑問を感じ、それに抵抗し、それに歯向かうことが無駄なのか、というと、それは話が違ってくる。

ある世界に住まうことは、ある世界の束縛を受けることである。しかし「生」は思うより際限なく飛翔するので、やがてその束縛を窮屈に感じる。これは人として自然な感情である。だから、その束縛から逃れようとするのもまた普遍的な感情なのである。ただ、それがあつた段階で、不可能であることを自覚するのも、また自然である。なぜなら、私たちはその世界に住まい、その世界なくして生きられない。その世界の束縛が単に邪魔なものではなく、自分の「生」を成り立たせる一要素であることを気付くのである。

この作品は、こうした「ある秩序のうちに生きること」をテーマにしているのではないか、と思う。そう考えると、これは非常に哲学的である。またそこで、「生死」のない神と「死」を間近に控える少女が有効なギミックとして働いていると言えるだろう。

世界には、二つのサイクルが存在する。それは「繰り返し」と「一回性」だ。この一見すると対立するこの二つは、この世界の秩序を編む縦糸と横糸として存在する。たとえば「季節」とは「繰り返し」の円環の時間の中にあり、「人の生死」は「一回性」のものとしてある。桜の神はこの円環時間の中に生き、少女は「一回性」の生を生きる。しかし、その縦糸と横糸が交わつたらどうなるのだろう。

本作品の中で、桜の神は人の生の一回性を理解した。その「かけがえのなさ」を痛感する。そして彼女が死ぬ前に桜を咲かせようと奔走するわけだが、ラストでは、また自分が神であることを自覚する。これは、生きるとは、秩序から逃れまいとする一瞬のきらめきであると同時に、その秩序から逃れられない宿命があり、そしてその秩序の中でその生を充実させることもまた生きることなのだとも自覚することだということを教示する。その点でこの作品もまた「童話」であり、是非子どもには読んで欲しい話だ。...

...とここまで、書いて私は思ったのだが、たぶんこの筆者はここまでのことを考えていないだ

ろう。これは、おそらく私の深読みだ。大方、春が近いので桜をテーマにエンターテインメント作品を、また子ども受けしやすいように子ども主人公とした話しを、ビールでも飲みながら思いつきで書いたに決まっている。実は私は、彼を古くから知っているのだが、彼はこんな哲学的センスを持っているわけがない。最近では頭痛に苛まれているらしく彼はそれで「自分も芥川や太宰の域に入ってきた」なんて渋い顔して嘯いているらしいが、そんなの日頃の酒の飲み過ぎが高じただけに決まっている。「こんなことがあったら面白いだろう」なんて具合に軽く書いたに決まっているのだ。

まあしかし、そんな彼だからこそ、こうした童話を書けたとも言えようか。大人というより子どもに近い感性でものを考える彼の作品だ。ここは何も考えないで純粋にただ楽しむのが正しい読み方なのであろう。そういう「子どもらしさ」の方が本当の彼やこの作品の魅力なのかもしれない。

「濁った精子」選評

思いきった写実的描写と「聖なる一回性」を評価

文学が「性」を題材にするとき、それを「美化」するにしても「グロテスク」に描くにしても、何らかの「料理」をするのが小説家の使命だと、暗黙の内に（小説家は）思っているし（読者は）思われている（いかに一流の素材でも、料理せずに素材をそのまま食べさせることを意図的に避けるのが料理人であるように）。だから、あからさまに写実的に描くことは避けられがちである。しかし、この作品はそれを思い切ってやってしまった。それがこの作品で最も評価すべき点である。「私は教師の話を見ずに、その女のスカートから出ている白い脚を垣間見た。白い肌から黒の靴下、そして学生靴。私は頭の中で女の足の匂いを嗅ぐ自分を想像した。気が付くと私は勃起していた。」とある。自然主義作家の田山花袋を想起させる。

これは文学の中では重要なテーマの一つだと言えよう。あることをあるがまま写実的に描くことは（小説＝文学の体裁を保持したかたちで）可能であるかどうか。この挑戦は、自然主義文学の在りようや歴史を紐解けば、いかに困難であるかがわかるだろう。そして、自然主義に対する夏目漱石の苦言や批判を聞くまでもなく、それが困難であることは容易にわかるであろうし、その系譜上にあるプロレタリア文学、たとえば「蟹工船」が主人公の心情の変化を問題にしているというよりも、政治や経済を問題にしている、つまり小説の体を借りた政治啓発ピラになりうるということからして、それが「小説」であり続けることの難しさがわかるものである。

「性」を題材としたとき、この問題はどのように浮かび上がるか。つまり「ヌード」と「ネイキッド」の違いである。

裸体をそのまま写実的に描くことは、その裸体美（ヌード）ではなく人間という生物の裸の状態（ネイキッド）を描くことに急速に近づいていく。そのとき、文学で問題とされる「性」は「ヒトの生殖行為」に成り果てる。「性」を題材としてあるがままを写実的に描くことは、そうした危険をはらんでいる。

まあ上記はここでの本題ではないからして、この辺に留めておくが、それにつけてもそれをやってしまったこの作品は、ただすごいとしか言わざるを得ない。いややるのは簡単かもしれないが、そうした姿勢で作品をまとめるのは、本当に勇気があると言う他はない。

ただ、この作品は徹底的な写実主義でのみ書かれているわけではない。だから、ギリギリのラインで「小説」であり得る。そういう作品であるというのが、本当のすごいところだ。

「私はティッシュの上に出した精子を見た。その精子は女を使って出したからか、どぶのように濁っていた。」これは最後のシーンであるが、ここが「私はティッシュの上に出した精子を見た。どぶのように濁っていた。」では違っていた。その女を使って出したから、それは濁ったのである。つまり、他の女やヌードグラビア、AVではダメなのであって、その女だからこそ濁り、なのである。

これは文学における「聖なる一回性」であって、その女を使ってでしか出しえなかった濁りなのである。つまり梶井基次郎が自らの檸檬の重みにこだわった、あの感覚同様。筆者（私）にとってその女が、特別な、固有な女であり、それを使ったオナニーも、他のオナニーとは全く違う。その時の「そのオナニー」なのである。

この最後の最後の、この俵の際で文学として体面を保つのが、この作品の一番の妙味であろう。

「KISS YOU」選評

上質な「青春文学」として評価

一体、「青春文学」とは何だろうか。

以前、角川書店の『野生時代（現：小説野生時代）』がサンボマスターを表紙に使い、野生時代青春文学大賞（現：野生時代フロンティア文学賞）の告知をしたときに、「上質の『青春文学』を求める」というようなことを言っていた。しかし「青春文学」とは何か。その答えが、この作品にはある。

私は、青春を象徴する出来事としてまずあるのは「人との出会い」だと思っている。青春の時期を思春期とすると、小学生に比べ中学生・高校生になると行動範囲が広がっていく、そこでの人々の出会い。そこに青春の青春たる何かがあるのではないかと。

または、その出会う人の他者性と言ってもいい。今まで小学校生活6年間の中で慣れ親しんだクラスメートと別れ、中学になると、今まで会ったことのない、たとえば隣町のやつとかと出会う。そこで、多くの今まで出会ったことのない他者に出会う。それは異性であり、同性であり、「新たな世界」を開示する。それはまさに「未知との遭遇」に他ならない。

あらゆる、未知の他者において、宇宙人は、変な言い方だが、最も未知かもしれない。この吉祥という宇宙人は、そういう思春期に出会う他者の極端なメタファーなのではないか。地球人ですらない、宇宙人という絶対的な純粋他者は、私たちが中高生のときに出会った、たとえば洋楽オタクだったり、ファッションセンスが妙にずば抜けていたり、人よりも早く彼女を作り童貞を

喪失した、あるいは今までは幼馴染だったあの娘が夏過ぎて急に大人びて異性を感じさせてきた、そんな自分の世界や価値観とは異なる価値観を持った他者の象徴ではないか。だから、そんな他者に会いそして理解していくまでのドキドキとワクワクが、ここには表現されているように思えてならない。

そして、もう一つ青春を象徴するもの、それは「別れ」である。「出会い」と「別れ」は対である。そして「出会い」が「未知との邂逅」であるなら、「別れ」は「既知の回顧」である。ラストで、主人公は吉祥と拒んでいたキスをする。結果「ついさっき思い出したばかりのあのころの記憶、その全てが吉祥の立場から見たものとして溢れてくる。出会いから別れまで憶えていることもいないことも、本当にどうでもいい会話の一片まで洪水のように。」これは「未知」が「既知」のものへとドラマティックに変換される様である。「舌を通じて頭の中に伝わっていく感覚は今までに体験したことがなくて、でも決して悪いものではない。自分と吉祥の境界線がなくなっていく。あの頃の思い出はどちらのものでもなくなって、ひとつの物語になる。」物語へ収斂する「あの頃」は、もはや回顧の対象である。

未知は、それに接し、そして時間を共有することで、やがて既知になる。「別れ」はそのときやってくるのだ。そして一緒にいた時間を振り返って惜しむのである。「未知」が「新たなものに対する慣れ」を強制するなら、「既知」は「慣れ親しんだものの継続」を強制する。このクラスメートとは卒業後も今までと変わらず友だちでいたいし、男女なら別れてもなおいい思い出として在り続けて欲しいと願う。しかし、それを願いながらの甘酸っぱい「さようなら」...これが青春である。

この作品も当然「別れ」で終わる。SF的なロジックを使っているが、非常に本質的で上質な「青春文学」なのである。

そして青春小説の真骨頂はもう一つある。順番が逆になったがこの箇所だ。

「吉祥の『特別』でいたいからだ。何かが突出しているわけでもなく、部活にも何となく入っていなかったあの頃の私はいつだって自分が『特別』である理由を探していた。そして、吉祥は降って湧いた『特別』だった。」最後のところで吉祥とのキスを主人公は拒もうとした。それは自分が吉祥の「特別」でいたいから。しかし、ここは耽美な雰囲気なので非常に「危険な香り」を想定するが、私はそういうことではないと思う。ここは、吉祥の恋人などそういった吉祥の『特別』でいたい、ではない。なぜなら、主人公は、自分が固有の存在でなかったことを回顧し、その上で「特別」でいたいと言っているからである。

これもまた「青春文学」も重要テーマの一つである、「自我の芽生え」である。つまり価値観の極端に異なる他者と出会った主人公が、今まで意識しなかった自我を意識し、それを認識するまでの話なのである。まさに降って湧いた「特別」によって、いかに自分が「特別」でないかを認識し、自分も「特別」でありたいと思ったのである。

自分の中高生時代を思い出して欲しい。やたら、女慣れしているように気取ったり、やたらおしゃれを装ったり、やたら洋楽など通ぶって見せたりしなかつたらどうか。あの頃、私たちもみんな何かの「特別」でありたがったはずだ。そこらへんのサラリーマンにはなりたくない、自分には芸術的センスがあるとか、タレント性があるとか、そう思い込みたかつたのではないか。

だから、吉祥は主人公にとって「特別」であり、その吉祥とは「友だち」なのである。だって、ここで吉祥にキスされたら自分も「その他大勢」に成り下がる（結果キスをしたが）。だからキスはできない。自分も吉祥と同様スペシャルな存在。だから彼女とは同じ立場、ということで「友だち」なのである。

...実は私、全作品の中で、この作品が一番繰り返し読み直しをしたものである。最初ピンと来なかったのだが、しかし繰り返し読むことでじわりじわりと世界が浸透してくる、スルメのような魅力を持った作品だ。ただ、蛇足だが、繰り返し読まなければならなかったのは、いかに私がおっさんになったかである。思えば青春から遥かに遠ざかってしまったものだと悲しい気持ちになっている。

足が止まらないはずがなかった。

夏風邪のせいでひとり少し長く続いた夏休みが明けて、放課後宿題を出したり先生にプリントを貰ったりを済ませてたまたま通りがかった隣のクラス、二年四組。午後四時の教室は電気が消されていて、引かれたカーテンを突き抜けて差す光と窓を閉めているせいでわだかまる熱気が全体の輪郭をぼやかしている。

その中であってただひとつ、教室の真ん中にある女の子だけは鮮烈な存在だった。後ろのドアの小窓から覗くだけではほとんど背中しか見えないけれど、頬の色が、背中にかかる黒髪が、私と同じはずの制服までもが、景色と独立して明瞭だった。

あんな子が学校にいたら知らないはずがないから転校生かも———それだけでも立ち止まるには十分。

でももしそんな美しい『彼女』が生徒指導で年中ジャージでプリントばかり配って授業中寝るとネチネチ責めてきて四十過ぎて独身なことをテニス部に陰で笑われている端塚先生と、キスを、していたら。

立ち止まらずにいられる人なんてこの中学校に、いや世界にだって一人もいないだろう。

驚いているのは私だけじゃなくて端塚先生も同じみたいだった。両手は所在無げに震えていて、動揺と困惑の視線が頭ひとつ分はありそうな身長差を背伸びして埋める『彼女』のつむじ越しに彷徨って———私と交叉した。

二人して『見られてしまった』と身体をびくりとさせる。それに感応したかのように『彼女』が背伸びをやめて、くるりとこちらを振り向いた。途端に端塚先生は風景になる。私の視線は露わになったその容貌に為す術もなく惹きつけられる。それは予感していた通りの完璧さだった。整った眉、すっと通った鼻筋、瞳は遠くて澄んだ夏の夜空の色をしていて、かすかに上がる口の端が不思議となまめかしい。

身動きを取ろう、という気が欠片も起こらない。手から力が抜けて鞆がどさりと落ちる、その音で私はともかく端塚先生は正気に返ったらしい。

「と、取手、これは——」

私に向けて何か言おうとしたその口を『彼女』は再び唇で塞いだ。

先生の目が見開かれて、けれど今度は視線が彷徨わない。むしろ怖いほどに真正面を見据えている。五秒ほどそうしていただろうか、不意に『彼女』が先生から離れると先生はくるりと踵を返して教室の前のドアを開けて出て行った。不自然なほど正確な歩幅で、私のことを忘れたように。

がたりと音がして思わず半歩退くと、先生に気を取られているうちに『彼女』はドアを開けていた。間近で見るとその綺麗さはますます抗いがたい引力になって、とろけるような微笑みが不意に恐ろしくなる。さっきは背伸びをしていて分からなかったけれど少し私より背が高いことに気付く。足下に視線を落とす。私と同じ青い上履きと、見たことのない靴下のワンポイント。

「ねえ」

そっと頬に手が当てられて、前を向かされる。視線が合って黒くて深くてちょっぴり蒼い夜空に吸い込まれていく、空いっぱい映る私が徐々に大きくなっていく。何かこのままじゃいけない気がして、でもこの手を振り払おうという気が起きない。端塚先生の歩き方が蘇る、ただのキスで済むはずがないのだ、ないのに、ああ—————あ。

「まっへ！」

叫ぶ。『彼女』が動きを止めて私の目を更に覗き込む、夜空が少し揺らぐ。

「どうして？」

微笑みを崩して、怪訝そうに聞いてくる。本当に危ないところだった。もし私の理性があと少しなくなっていたら、

「だって、間接キス、なるから！」

そしてファーストキスにも！

それもよりにもよって端塚先生と、だ。目の前にいるのがどれだけの美人で、実際に味わう感覚がそのつややかな唇だとしても——いやそれも何か違うんだけど——それだけはいやだ。

『彼女』の目がまんまるに見開かれて、それからさらに顔を近づけてくる。え、ちょっと、聞いてなかったの、

「……………ふふっ」

突然にその目が細くなって、

「そういうこと、そういうことなのね！ 分かったわ！」

顔を離すとそう言いながら笑い出した。それを引き金に私の身体は私の元に戻ってきて、頬に添えられた手をそっと外してなおも笑い続ける『彼女』から少し離れる。

やっぱりその姿はすごく綺麗で、でもさっきまでの惹きこまれる力はどこかへ消えてしまっているような気がした。なのになぜか視線をそらすことができなくて、ぼおっと笑い転げる彼女を眺め続けている。

それが、吉祥との出遭いだった。

「少しだけお話していかない？」

ひとしきり笑った後、吉祥はそう言って私を教室の中に招き入れた。そのまま適当な机に飛び乗るように座って脚をぷらぷらさせる、それだけで見とれそうになる。

「私は吉祥。よろしくね」

「あ、えっと、私は」

慌てて口を開こうとした私を手で制すると、

「取手明日香—————でしょ。知ってるわ」

思わずえ、と小さく声が漏れた。自慢じゃないが私は何か目立つところのあるような生徒じゃない。何か話題になることが万一あるとしても期間限定で「夏休み明けに出席していなかった子」ぐらいの扱いが精々のはずなのに。

そんな私の驚く姿を見て吉祥は嬉しそうに目を細めると、

「驚いたかしら？ さっき教えてもらったのよ、端塚先生から」

これでね、と言って自分の唇に触れる。言いたいことはたぶんさっきのキス、つまり私のことを教えてもらうために？ でもなんで私のことを転校生が——

「ごめんなさい、『転校生』って何かしら」

今度は体が跳ねるくらいびっくりした。うそ、考えてたこと口に出してた？ ていうか絶対転校生なのになんで転校生って何か分からないの。

「——ああ。そういうものなのね。そうか、確かにあなたにとってわたしはそうなるのね」
違う。

今、私は絶対に口を動かしてない。なのに吉祥は私の考えてることが分かっている、そうしか思えない。

「合ってるわ。精度はこれじゃあまり高くないけれど」

じり、と思わず扉に向けて一步下がってしまう。彼女はいったい何なのか、今更そんな疑問がよぎる。さっきされようとしていたキス、あれはいったい何のためだったのか。

吉祥が少し慌てたような表情を見せて人差し指を立てて私に向ける。何かされる、という恐怖でびくりと体が縮こまる。逃げたほうがいい、頭では分かっているけど足がうまく動かない。

でも『何か』ちっともやってこない。すらりとした指先は少しずつ力を失って、翳る表情はそれでもなぜか今までより一段と綺麗に見えた。

「……ちがうの」

ぽつりと一言、

「出来心なのよ。あなたとまだお話したくて、だから過程を飛ばそうとしちゃっただけなの。約束するわ、効率が悪くてもちゃんと双方向でやるって。あなたが知りたいことにも全部答えるし、キスも間接キスになるから絶対にしない」

そこから堰を切ったように言葉があふれ出す。まくし立てている言葉の意味はいまいち分からなくて、喋り始めたとたんにあの引力は鳴りを潜めて、真正面から見据えられているのに全然平気になっている。

「だから、」

だけど、

「もうしばらく、お話させて」

そんな悲しそうな顔でそう言われたら、もう引力なんていらなかったのだ。

この表現を使うのは正確ではないのだけれど、と前置きされて、

「わたしはあなた達の言う『宇宙人』よ」

いきなりの告白は本当にすんと私の中に入ってきた。吉祥が宇宙人だというのは言われてみればそうしか思えなくて、むしろ今までなんで気付かなかったのだろう、と思ってしまう。

「あら、思ったより反応が薄いよね」

「だってどう見てもびったりなんだもん。宇宙人って」

「どう見ても、ね」

苦笑しながら自分の身体を眺め回して

「一応これは純地球製なんだけれど、どこがいけないのかしら」

「どこって、」

言ってしまうえば全部だ。なんていうか、彼女からは『人』って感じがしない。今もこの教室と全く馴染んでいなくてはっきりと異質なのだ。それを伝えると吉祥は困った顔をする、やっぱり綺麗だけと何かが違う。

「ということはつまり、わたしの排出情報の問題なのかしら。蠢惑のクオリアに対して調整したのだけれどかえってやりすぎだったのかしらね」

.....何を言ってるんだらう。

「えっとね、全人類が魅力を感じるようになってるのよわたし」

なんでもないことのように言われたけれどなんだそれは。

「意外と簡単なことなのよ。例えばほら」

その言葉と同時に、吉祥の纏う空気のがらりと変わる。今まであった引力が一瞬でどこかへ消え去ってなんとなく避けたいようなそんな気分になる——あれ。

「端塚先生？」

何か覚えがあると思ったら雰囲気こそっくりになっているのだ。あんまり経験がないけれど、多分あの人に目の前に立たれたらこんな感じになると思う。

「そうよ。同じシステムであの人の排出情報に合わせてみたのだけれどお気に召さないかしら」

「端塚先生ってのがね.....でも何が同じなの？」

「代謝に伴って排出する情報を変質させているのが——って言ってもわからないわね」

即座に頷く。それを見た吉祥はちょっと嬉しそうに笑う。

「まずあなたが今見ている『わたし』、これはこの星で効率よく活動するための容れ物にすぎないのよ。本当のわたしは『情報』なの」

「ごめんよくわかんない.....」

ここまではいいよね、みたいな顔されても困る。情報ってどういうこと？

「じゃああなた達でいう『魂』だけが存在してるものだと思ってくれればいいわ。でも、あなた達と同じように散逸構造を持つことには代わりがない。だから自己組織化された情報は入れ替わっていくのだけれど、あなた達と違って排出される情報はある程度任意に操作を、」

「まってまってまって」

遂にひとつも分からなくなっただけだ。

「もうちょっと簡単な説明にはできないの？」

「できるけれど、どうなのかしら」

「じゃあそうして！」

「おしっこやうんちをどこからでもある程度自由な形で出せるとして」

「.....」

なんだろうこのずっしり来る感じ。あんなに綺麗に見えるのが、その、そんなものと同じな

んて。

「ね、だからやりたくなかったのよ」

「ご、ごめんなさい」

思わず謝ってしまったけれど何か騙されているような気がする。間を取った説明ができなかったんだろうか。

「いいのよ。で、これがその——排泄で、キスは食事ね」

「え」

「言ったでしょ、私は情報だって。わたしはあなた達が呼吸をするようにものを見て、ご飯を食べるように世界を感じるの。人間の持つてる情報は膨大でね、キスをするとそれが一気に流れ込んでくるの。とりわけあなたくらいの年齢の人間はそれはもう素晴らしいのよ……」

話していくうちに吉祥の表情が少しずつ緩んで、うっとりとしとろけてくる。瞳にあまやかな色彩が混ざって月光のように輝いている。

「だから、」

身を乗り出してくる。時計は五時になろうとしていて、教室は入ったときより少し暗くなっている。カーテンの隙間から入る西日が宙を舞う埃をきらめかせる。小さくラケットの音が聞こえる。

「あなたも食べさせてくれないかしら」

誘い込むようにぺろりと赤い舌が覗く。いつの間にか端塚先生の気配は消えてあの引力が戻ってきている。全人類を引きずり込むという夜空をこちらに向けてくる。

「——間接キスだってば」

それを全部跳ね除けて辛うじて言葉を絞り出したけれど、次はどうなるか分からなかった。

「そう」

吉祥は残念がるでもなく身を引いて、

「そろそろ帰りましょうよ」

そう言ってすたすたと扉から出て行ってしまふ。突然のことにちょっと呆然としていたけれど、はっと我に返って慌てて後を追った。

廊下をなんとなく無言で二人並んで歩く。昇降口で靴を履き替えて、吉祥の真新しいローファーがちょっと羨ましい。

「そういえば家ってどこなの？」

「ないわよ」

「へー」

いやいやいや。あまりにさらりと言われたので聞き流しかけたけど今凄いこと言われた。

「食事も睡眠も別にいらなのよ、わたし。だから家がなくても大丈夫なのよ」

「でも……」

「本当に気にしなくて大丈夫よ。それより、あなたのおうちまで一緒に歩いてもいいかしら」

断る理由もなく、そのまま歩き出す。サーブの練習をしていたテニス部がみんなちらりと吉祥を見て、でもすぐに練習を再開する。

「なんかみんな妙にリアクション薄くない？」

二度も吉祥の魅力にやられかけた身としては、さらりと無視できることが不思議でならない。

「ああ、言ってなかったわね」

吉祥はテニス部を指差して、

「夏休みの終わった日に、学校中に中学生としてのわたしの情報を散布したのよ。だからこの学校の人たちはみんなわたしを見慣れてる、ということになってるわ。例外はあなたくらいなのよ」

「え」

だから転校生が来たって誰も言ってなかったのか。こんな目立つのに。

「あなたを見たときはびっくりしたわよ、受信機構に異常があるのかと——」

「あのさ」

ちょっと気になったことがあって吉祥の言葉を遮る。

「あなたって呼ぶの、好きなの？」

「そこまですでもないけれど」

「じゃあ『明日香』って呼んでいいよ。そのほうがしっくりくるし」

少し意外そうな顔をした後、それが満面の笑みに変わる。その瞬間、夜空に星が瞬くのをはつきりと見た。

「いいのね？」

その表情は今日見た中のどれよりも素敵で、私もつられて笑顔になる。

「嬉しい、本当に嬉しいわ！ ああもう———なんて日なの！」

もうとっくに学校を出ていて、ガードレールもない道をぴよこぴよこ跳ねながら吉祥は歩いていく。はしゃぎようを見ていると、ドライバーが気を取られて事故を起こしそうだなと思った。

って、あれ？

「ねえ吉祥」

「なあに？」

くるりと振り返るその動きのひとつひとつが目を惹く、けれど今気にしているのはそこじゃなくて、

「鞆は？」

学校からずっと、彼女が手ぶらであることだ。

「そんなものないわよ。お勉強なんてつまらないじゃない」

いとも簡単に言うのけて、あっけにとられている私が歩いてくるのをにこにこ待っている。

なんていうか、この子は本当に宇宙人なんだな、と思った。

翌朝学校に来ると吉祥が教室にいた。それも隣の席に。

「おはよう明日香」

「おはようじゃない」

さも当然のような顔をしているけれどそこは安藤くんの席だ。それ以前に吉祥はこのクラスの人じゃない。

「心配はいらないわ。もう既にこの教室にいる人には私がこのクラスでこの席に座るってことになってるから」

「何してんの!？」

思わず声が大きくなってクラスの視線がこちらへ向く。ばつの悪い顔をする私と、

「こういう視線の情報量も悪くないのよね」

ちょっと嬉しそうな吉祥。いいから戻して、と言いかけたところで私の話などどこ吹く風で立ち上がって、今教室に入ってきたばかりの薨くんを捕まえると頬に手を当てて、

「だぁーっ！」

慌ててその手を引っ張って止める。また教室の注目を集めて、ていうかなんで吉祥じゃなくて私に目が行ってるのみんな！

「なぜ止めるの」

「なぜじゃない！ こんなみんな見てるところで何しようとしてんの！」

「キスだけれど」

しれっと答えられた。当然といわんばかりのその態度に私が呆気にとられているうちに吉祥は止める間もなく薨くんの唇を奪ってしまう。傍目から見ても薨くんの顔が赤くてガチガチだ。

「あすかおはよー」

そんな光景をよそに灯子ちゃんが教室に入ってくる。ロッカーに荷物を入れて固まっている私のところへやってきて目の前で手をひらひらさせてくる。

「どったのー」

どったのも何も、そこに私が動揺している原因が——いない。薨くんはまだ赤い顔で男子の輪に入っていて、吉祥は灯子ちゃんに近づいて

「待ったぁー！」

今度は先手を打って両手を掴んで止める。薨くんはまだいい、けど灯子ちゃんは許さない。

「離してほしいのだけれど。記憶情報が改竄できないわ」

「駄目！ 間接キス！」

それを聞いた吉祥は目を見開いて、

「あの先生でなくても嫌なのかしら」

「基本的に誰でも駄目だから」

それは申し訳ないことをしたわね、とみんなのほうを振り返って言う。それってまさか。

「クラスの人、全員？」

「今ここにいる人はみんなキスしてまわってしまったのよ。誰も言ってくれないんですもの」

思わずクラスの中の面子を見渡してしまう。タカ、啓治、笹原くんあたりはいいとして、藤枝くんとか……マッキーとか香澄とか泣くんじゃないだろうか。

「大丈夫よ。あなた以外は私がキスをしていることは自然だと思ってるから。されるとなると別

「けど」

「何も大丈夫じゃない！」

むしろそのせいで被害が拡大したとしか思えないんだけど！

「とにかくキスは一旦駄目！ 何か他の方法考えて！」

「……仕方ないわね」

話についていけなくてぼかんとしている灯子ちゃんへすっと手が伸びる。一本だけ立てられた人差し指が額に触れて、すぐ離れる。

「これでいいかしら」

あまりに簡単な手順に拍子抜けして思わず頷いてしまう。よかった、と言って吉祥はもめている間に入ってきた人たちに同じことをやりに行く。

「ねえ、灯子ちゃん」

「なにー？」

「吉祥ってさ、うちのクラスよね」

「当然じゃん」

即答されたってことは吉祥はちゃんと記憶を改竄できているんだろう。指でちょん、で済むのにわざわざキスしてるってことは、

「よかったね灯子ちゃん……」

「なにが？」

ごはんが主目的じゃないか。そのためにいったい何人が不幸な間接キスをしてしまったのか、ちょっと数えたくない。

朝からどっと疲れた気がして、自分の席に戻ってぐったりと座る。灯子ちゃんに頭を叩かれながら時計を見ると八時二九分で、廊下側のこの席は教室のざわめきを越えて運動部が飛び込んでくる足音がかすかに聞こえてきた。

居場所を見失った安藤くんが机を運ばされるのは、その十分後の話。

吉祥と同じクラスになって一ヶ月が過ぎたけれど、この宇宙人のことは分かってきたような、まだよく分からないような微妙な気分。

まず基本的に食いしん坊だ。キスがごはんという信じがたい構造の彼女は「お腹が空いたの」と言っっては誰彼構わずキスしてみようとする。恐ろしいことにもう二年でキスしていない人は殆どいないらしくて最近是一年や三年にも手を伸ばしつつある。

あまりにいろんな人として回るから、私が懸命に説得して一日のうちに違う性別の人とはしない、ということに何とか落ち着いた。けど「今日は女の子の日ね」なんて言われるとこっちが困る。

でも羨ましいことに本物の（って言い方も変だけれど）女の子の日は来ないらしい。そもそも本当は性別なんてなくて「そのほうがキスしたときがおいしい」という理由で女の子の外見をしてるんだとか。

その話を聞いた次の時間が体育でちょっと目の前で着替えるのが嫌になったけれど、恥ずかしがっていると吉祥に読み取られてしまって悔しいからやけくそ気味に着替えた。吉祥は体育が嫌いでも着替えすらしないでどこかに消えてしまうのに、なぜか着替えのときは教室に残ってるからもしかしてとってしまう。

普通の勉強でも英語の時間なんかはどこかへ行くことが多いけれど先生たちも何も言わないのは多分吉祥が何かしているんだろう。

逆にあんまりサボらないのは音楽と美術で、けれど鑑賞の授業は「おいしくない」のに私達の下手な合唱は「おいしい」らしくてよくわからない。

あとは席替えが一回あったけれど吉祥はまた何かしたらしくて変わらず隣にいた。だから今日も私と灯子ちゃんと吉祥は朝の教室でダベっていたりするのだ。

移った窓際の席はよく日が当たって、残暑がきついと思ったのにふと気がついたら十月で、日差しがあったかなくなったと感じられるようになって衣替えがやってきた。家がないといていた吉祥はどこからか冬服を調達してきて、やっぱりでたらめに綺麗なのだけれど少しあの雰囲気が変わったみたいで、前よりもだいぶ親しみやすい感じになっている。

その理由を聞いてみると「私の情報も日々入れ替わっているのよ」みたいなことを言われたけれど相変わらずよく分からなかった。

毎日がこんな感じで、だから多分明日もこんな感じだろうと思っていた。

けれど。

いつもと同じような日の、いつもと同じ帰り道で全ては終わりを告げたのだ。

ほとんど水の枯れている川を渡った先の公園は普段なら前のマンションの子どもが遊んでるはずなのに、その日は誰もいなかったからいつもよりちょっと静かだった。

唐突に吉祥が立ち止まったので、前を歩いていた私はまたか、と思いながら振り返った。時々、吉祥は本当になんでもないようなものに興味を示して立ち止まる。初めはいちいち理由を聞いていたけれどやっぱり何を言ってるか分からないから最近はずっと待つことにしている。

でも今日のそれはちょっと違った。まず、いつもなら輝いているはずの目が訝しげにすがめられている。視線の先にあるのはタクシーで、よく公園の前に停まっていてそんなに珍しいものでもないはずなのに。

「どしたの？」

「———おかしいのよその車。なんの情報もないの」

「吉祥いつも言ってるじゃん、生き物だけが『おいしい』情報持ってるって」

「違うの。少ないならともかく全くないのは意図的に情報を隠そうとしない限り、」

最後まで言い終わる前におもむろにタクシーのドアが開く音がした。

振り返ると真珠みたいな光沢の服とガスマスク？ みたいなもので全身を覆った人が三人飛び出してきていた。そのあまりの非現実感についていけなくて、先に恐怖がきて身が竦む。ひとりがぐっと腕を掴んできて強く引っ張られる、やだ痛いやめて———

その腕を吉祥が強く握り返した。途端にガスマスクの身体がびくりと痙攣する、手の拘束が緩んで振り払おうとする、けれどまた力が籠もって結局逃れられない。鞆を振り回そうかと思った

けど吉祥に当たりそうで、躊躇している間にもう片方の手も掴まれて動きを封じられる。鞆を取り落とす。

残りのガスマスクが吉祥を両側から拘束する。吉祥の顔が歪むけれど私みたいに暴れようとはせず、しきりに向こうの身体はどこかに触ろうとしている。口を開けた途端にその口も塞がれた。それを見たガスマスクが慌てたように私の口を塞いでくる。凄く強い力で、抵抗もできずに車に引きずり込まれる。

車の中にも同じガスマスクがいて、足をばたつかせて抵抗してみるけれどどうにもならずドアが閉められる。それでも蹴り続けているとガスマスクが口を塞いだまま私の顔を覗き込んでくる。マスク越しに視線があっているのかも分からない曇ったゴーグルを見たその時、麻痺していた恐怖がどっと襲ってきた。抵抗をやめて震えだす。怖い。怖い。いったいなんなんだこの人たちは。私は、私たちは、何をされちゃうのか。

ガスマスクの服と同じ光沢の布が目には被せられる、そして口にも。ますます意味が分からなくて恐怖が募る、今度は何をされるのかと思っていたらイヤホンが耳に挿し込まれた。変な音が聞こえている、少なくとも音楽ではない。

聴いていると心地よいようで気持ち悪いようでそのどちらでもない、不思議な気分になる。なぜか意識がどンドンぼんやりとしたところへ引きずり込まれていく。なんで、なんで、なんで、

「—————思い出したかしら」

そうだ。私はこれを聴いて気を失って、

「—————これが、あなたの経験したことよ」

気がついたら家にいて、

それから一度も吉祥とは—————

「きっ、しょう……？」

「ええ、そうよ。思い出してくれて嬉しいわ」

そう言って彼女は微笑んだ。三年前と何も変わらない笑顔のままで。

驚かないはずはなかった。

駅で待ち合わせをしていた私の前に現れた少女はとても綺麗で不思議な色のぴっちりとした服を着ていて、しかも片腕がなかった。チープな映画の宇宙人にしか見えない。

どう考えても目を引く姿であるのに周りの人たちは誰もそのことを気にしていない。私だけがその異様で、そのくせ何か懐かしくてたまらない姿に呆然とする中、その少女は私の元に歩み寄ってきて残った左手を私の前に翳したのだ。「お久しぶり」と言いながら。

こんな娘に遭ったことがあるなら忘れてはいるはずがない、と思っていたら、不意に私の頭の中に色々な景色が現れて、

そして私は三年ぶりに全てを思い出した。彼女がなんであるのかも。

「彼らは本当にお間抜けさんね、記憶を消すでもなく封じ込めることしかできないなんて。あの学校全員を消して回ったらしいのは評価するけれど」

「彼らって、あの？」

記憶を消す——とか言ってるけどあの時聴かされたのがそうだったんだろうか。

「ええ、あなたの想像しているそれよ。わたし達について研究したかったらしくてね、ずいぶんいじくりまわされたわ」

これもね、となくなった腕に視線を落とす。

「まあ、三年も研究してわたしが逃げるのを阻止することもできなかったんだから大したことは分かってないのよ多分」

そう言って可笑しそうに笑う。絶対に笑い事ではない気がするけれど、本人が笑っているのならそれでいいのかな。

「ていうかどうやって私見つけたの？」

私だって三年前からはずいぶん変わっているし、服だって違う。それに何より私がここにいるってことをどうやって知ったんだろう。

「宇宙人の力、とだけいっておくわ」

ウインクするその目に夜空は宿っていない。今の吉祥は本当にどこにでもいる中学生の女の子、という雰囲気、それが服装や片腕をカモフラージュしているようだった。

そのせいか三年ぶりの再会なのに不思議と壁を感じない。

「えーそういうのずるい」

「わたしにも秘密くらいあるのよ」

それからしばらく「教えて」「教えない」の問答が続いて昔みたいだねって笑って会話が途切れて、

「ところでね、明日香。ひとつお願いがあるんだけど」

そこで吉祥が切り出した。

「おう、なんなりと言うがよい」

「実はね、今わたしとてもお腹が空いているの」

ぞわり、と首筋が逆立った。

「だからその、わたしとキス、してくれないかしら」

息を呑む。視線が交叉する。何も言えずに見つめあう。

分かってる。ただ一言いいよ、と言うだけでいい。でもそれをしたら何かが壊れてしまう、そんな予感が私の喉でその一言がせき止められている。

「ああ、間接キスのことなら大丈夫よ。ちゃんと口は洗ったわ」

にっこりと笑う。確かに私がよく言っていたことだ、けど違う。気にしないとさえ嘘になるけど、そんな些細なことは理由にならない。あるとしたら、

「——どうしても、だめ？」

吉祥の『特別』でいたいからだ。

何かが突出しているわけでもなく、部活にも何となく入っていなかったあの頃の私はいつだって自分が『特別』である理由を探していた。そして、吉祥は降って湧いた『特別』だった。

記憶が蘇った今、あの自分が囁きかけてくる。駄目、と。キスをしてしまったら私も吉祥にと

って「ごはん」でしかなくなるのだと。ひとりの人間として見てもらえなくなるかも、と。

吉祥の笑顔がどんどん翳っていく、それは十分すぎるほど分かっているのに踏み出せずにいる。こんな記憶なら取り戻さなければよかったかもしれない、そうすれば吉祥は何の問題もなく私の唇を奪えたらうに。

でも、こうなってしまったからには自分でどうにかしなければならないのだ。あの頃の私、その小さなプライドを棄て去ろうとして——

気付いてしまった。

なんで私だけが吉祥の姿をおかしいと思えたのか。答えは簡単、『鏡を見ていたから』。見慣れたものの形が変わっている違和感、それが私の感じていたもの。

今日の前に立っている吉祥、その気配はまぎれもなくあの頃の私のものだった。

声と涙、どちらが先に溢れたかは分からない。気付けば私は吉祥を抱きしめて公衆の面前でぼろぼろと泣いていた。

何も心配することなんてなかったのに。彼女が私のことをどう思ってくれているかなんて、一目見れば分かったのに。

「抱きしめられるのは初めてね。悪くないわ」

私の耳元で吉祥が囁く。こんなので喜んでくれるならいくらでも抱きしめてあげたかった。

でも、今はそれより吉祥が望んでいることがひとつある。

背中に回していた腕を解いて、彼女と適切な距離を置く。リップは大丈夫のはずだ。細い肩を掴む。片腕がないせいで感触が少し違う、でも今はそんなことにびっくりしている場合じゃない。歯と歯がぶつかるのだけは避けたくて自ずからゆっくりと。目はどうしようか悩んだけれどいつも吉祥は開けていたなと思ってそのまま。

そっと、唇に触れた。

途端に舌が入り込んできて、そんな濃厚なのをしたことのない私が戸惑うまでもなく絡まりあう——そして、流れてきた。

ついさっき思い出したばかりのあのころの記憶、その全てが吉祥の立場から見たものとして溢れてくる。出会いから別れまで憶えていることもいないことも、本当にどうでもいい会話の一片まで洪水のように。

舌を通じて頭の中に伝わっていく感覚は今までに体験したことがなくて、でも決して悪いものではない。自分と吉祥の境界線がなくなっていく。あの頃の思い出はどちらのものでもなくなって、ひとつの物語になる。

短いその物語はあっという間に終わりを告げて、次に来たのは感情だった。私が吉祥に対して抱いた感情、それが全部自分に返ってくる。決して甘美ではなくてむしろ辛いそれを受け止める。受け止める。吉祥が注ごうとしている「私」を、ただの一つも取りこぼすことのないように。

そして永遠に思えた数瞬が過ぎて。

舌がそっと引き抜かれる。私は涙を流していて、吉祥は笑っていた。

その瞳には、また夜空が戻っている。

「これがそんなに気になってるなら、言ってくればいいのに」

「分かっていると思ってたんだもん」

「言葉にしなければ伝わらないこともあるのよ」

どこまでも白々しく言って、ふたりで笑った。

「じゃあ、そろそろ行くわ」

「うん」

さっぱりした表情の吉祥に頷く。どちらからともなく抱き合う、私が少し背を屈めて、吉祥の片腕が背中を叩く。もう少しそうしていたかったけれど、するりと背中から腕の感触がなくなったので私も離す。

「「さよなら」」

ハモったけれどそれが当然とばかりに喜びもせず。

「お騒がせしてすまなかったわね」

そして去り際に呆然と私たちを見ていた、髪型をキメてこようとしてちょっと失敗している高校二年の男の子に素早く軽くキスをして、吉祥は去っていった。

え？ え？ と更に動揺を深める彼の肩を叩いてやって、

「なーにキスしてんのよ！」

「なにして、え？ マジで？ 何あの子？ どういう関係？ ていうかマジで何あの子？ なんかすげえ敵意感じたんだけど」

あの子は食いしん坊でめちゃくちゃ美人で、実験でぼろぼろになった身体を捨てて宇宙のどこかへ飛んでいこうとしてる宇宙人。敵意が籠ってたのは、きっと君が私のファーストキスを奪った相手だから。

でもきっとそんなことを言ったって分かってくれないだろう、私の『特別』は。

だから回答してあげるのはただ一言。

「私の友達！」

「サクラの神様」 小島パブロン

朝です。

ある家の、一家団欒、朝食の場では、テレビのニュースキャスターが元気よく朝のニュースを読んでいます。

「……それでは、次は『今日の天気』です。気象予報士の長田さん？」

「はい。長田です。今日は天気がよいので外に出してみました。……見てください。東京の空は、雲一つない快晴のお天気です。今日は日中の気温も上がり、まさに『春うらら』と言ったところでしょうか？」

「長田さん、九州では桜の開花が観測されたようです。暖かくなってきましたね。」

「そうなんです。これからは桜のシーズンの到来ですね。ようやく冬も終わりです。……あ、ところで、大西さん、これから桜前線は南から徐々に北上をしていくわけですが、そのスピード。どのくらいか、おわかりですか？」

「えー、どのくらいかな……。えーと、時速40キロ。車くらいかな……。」

「残念！ 正解は、平均時速0.7、0.8から早くても2キロ！ そうですね、大体、子どもがゆっくり歩くくらいのスピードなんですよ。もちろん山などがある場合は、スピードが落ちますが……。」

「へえ、結構ゆっくりなんですね……。」

ご飯を食べながらテレビを見ていた女の子は、テレビから目を離すと、お母さんの方を見ました。

「ねえ、お母さん。」

「なあに。」

「桜が咲くスピードって、子どもが歩くくらいなんだって。」

「今、テレビで言ってたわね」

「桜の神様って、子どもなのかな？ 大人だったらもっと早く歩くもん。」

「ふふっ。そうね。ゆうちゃんの言う通り、桜の神様は子どもの神様なのかな。」

そう言うと、お母さんは、女の子に笑いかけました。

さて、その家の庭の木の上では、そのお母さんと女の子のやり取りの一部始終を男の子が聞いていました。木の枝の上に腰かけ、足をぶらぶらさせながら、興味深く二人の話を聞くと、その男の子はにこにこして言いました。

「ぼくの話をしている……。あの子には、ぼくが見えるのかなあ……。友だちになれるかなあ。」

男の子は、何もない空に向かって、見上げて話しかけました。

「いいや、人間には、神は見えないさ。お前のこと、見えていないよ。」

空から、返事が降ってきました。

「ちえっ……。ぼくは長い間ずっとひとりぼっち……。同じ子どもの友だちが欲しいよ……。」

「人間と神は違うんだから、それは無理な話だよ。……それに子どもと言っても、お前は何千歳、何万歳じゃないか。見た目は『子ども』かもしれないが……。」

「南の風の神は、ひとりでさみしくないの？」

男の子は、また空に向かって語りかけました。

「生まれた頃は、さみしかったこともあったかもしれないが……、もう遠い昔のことだから忘れてしまったよ……。何せ、友だちどころか兄弟ともめったに会えないのだから。」

「会いに行けばいいじゃないか。」

「そうはいかない。兄の北風のところに行ったら、寒くて大変なことになる。会いに行けないよ。」

「……そっか……。」

男の子は、さみしそうにうつむくと、また足をぶらぶらとさせました。

この男の子は桜の神様。正しい名前はコノサクラサクヤノミコトというれっきとした神様です。小さい身なりですが、一人前にも角髪（みずら）を結び、衣禪（きぬばかま）を着ています。ちなみにこれは、大昔の日本の正装であり、日本の神様の正装でもあります。

いつどこで、どう生まれたのかは、本人も誰もわかりません。

しかし彼が行くところ、桜のつぼみは大きく膨らみ、そして咲き誇ります。

それが彼の、神様としての能力であり、使命でした。

毎年春になると、彼は、南から、てくてくと北へ向けて歩いていきながら、日本中の桜を咲かせていくのです。

そして今日は、その「旅立ち」の日でした。

「もう、行くのか」

南の風の神が声を掛けました。

「うん。……そろそろ行かなくちゃ。みんなが待ってるから。」

桜の神がそう言った、ちょうどそのときでした。

「……おおーい。おおーい。」

北の方の空、はるか遠くから別の声が聞こえてきました。

「そこにー……。桜のやつ、いねえかあー！」

「この声は兄貴だ……。おおーい、どうしたあー。桜はここにいるぞあー！」

南の風の神が答えました。どうやら、兄の、北の風の神のようです。

「桜のやつに届けもんだあー。今届けるからあー、ちょっとそこで待ってろあー……。」

「兄貴いー、こっちに来るのかあー。」

「行けるかあー。暑くてたままないよあー。だから、風に乗っけて送るからあー。」

そう言うと、一瞬冷たい風が吹き込んできました。

ひゅうー。

すると、紙ひこうきが北の空から飛んできて、桜の神の小さなてのひらにふわりと乗ります。「桜のやつに渡してくれってよおー。手紙だあー！ 女の子がお前に届くようになって、紙ひこうきで飛ばしたんだあー。たまたまそれ見つけてよおー……。たしかに、届けたからなあー……。」

「おおーいい、兄貴いー。こりゃどこのだれからの手紙だあー。……兄貴、もう行っちゃまったのか……。」

南の風の神がつぶやいた横で、桜の神はそっと紙ひこうきを開きました。

中は、「サクラさんへ」という鉛筆書きのかわいらしい文字で書かれた手紙でした。

『サクラさんへ こんにちは はじめまして わたしはみかです うまれてからずっとびょういんにいます びょういんのおそとには出られないびょうきなんだそうです わたしはサクラがきれいだと思います まいとし びょういんのおにわのサクラがさくのをたのしみにして びょうしつのまどからサクラさんを見ています でもことはみられるかどうかわからないんだそうです みかのびょうきがもっとわるくなって らいしゅうにはしゅうちゅうちりょうしつにいかないといけないと おかあさんにいわれました サクラさんは こんしゅうちゅうにさきますか しゅうちゅうちりょうしつは まどがないってききました。わたしはもうそとをみられなくなってしまったので、こんしゅうがんばってさいてほしいです みか』

「……『びょうき』って……なんだ。」

手紙から目を離すと、桜の神はつぶやきました。

「人間は病気になるんだ。それが元で死ぬこともある。」

「『びょうき』は『しぬ』のか。」

桜の神は、不思議そうに首をかしげました。

「……私もお前も神だから、病気も死ぬこともないが、人間にはあるんだよ。」

「『しぬ』とどうなっちゃうの。」

「死ぬと、ここからいなくなるんだ。」

「ぼくも夏になったら消えるぞ。」

「しかし、お前はまた来年の春も再来年の春も、ずっとずっと『いる』だろう。死ぬってというのはそういうことじゃないんだ。ここからいなくなって、その先もずっといないままなんだよ。」

桜の神は、眉を寄せるとだまってしまいました。

「この子は『しぬ』のか……。」

「私には、それはわからないよ。ただ、手紙見るとずいぶん重い病気のようにじゃないか。しかも悪くなっているようだな。外にも出られないというから……死ぬかもしれん……。」

「毎年、ぼくに会うのを楽しみにしてたのに……。さみしいな……。」

「……ああ、でも遅かれ早かれ、人間ってのは死ぬんだ、だからさっき言ったように、人間の子どもの友だちなんて作れるはず……。」

南の風の神の話、桜の神がさえぎります。

「今週中に、北の方の桜を咲かせることできないかな？」

「えっ？ 無理に決まってるだろう。お前、ここは九州だぞ。南の果てだ。ここから歩いていって、どうして北まで一週間でいけるんだ。お前の足じゃ、一か月は悠にかかるよ。」

桜の神は、空に向かって目を輝かせて言いました。

「……でもさ、いいこと思いついたんだ。ぼく……。」

「なんだ。」

「……ぼくを乗っけていってくれよ！ たしかにぼくの足じゃあ、今週中に北の国へは行けない。でも風に乗っていけばすぐだろ。今週中に間に合うさ。たのむよ！」

しばらくの沈黙の後、南の風の神は答えました。

「……それは、できないな……。」

「なんで？ 嫌なのか。」

「嫌とかではない。それは私たちの『決めごと』に反することだ。この『決めごと』をしっかりと守り続けるのが私たち神の役割。だから……それはできない。」

「なんで？ ぼくはちゃんと桜を咲かすよ……。ねえ、お願い。」

「おまえが、のんびり、南から北へ歩きながら桜を咲かせた後、春が来て、そのあと私は南から北へ暖かい風を吹かせて、夏が来るんだ。これが『決めごと』だ。お前と私が一緒に行ったら、春と夏がっぺんに来てしまう。そうしたら他の草木や動物たちは困ってしまうだろう。だから……ダメだ。お前が北に行った後に、私が行く。これは、私たちが生まれたときからの『決めごと』だ。勝手には変えられないな。」

「……………」

桜の神はまた押し黙りました。

これまで、空高くから南の風の神は、桜の神の様子を見ていましたが、黙って目を伏せる桜の神を見てると、だんだん居たたまれない気持ちになってきました。桜の神が座っている木は桜の木でしたが、せっかく開き始めたその桜の花のつぼみも、こころなしか閉じかけてうなだれているように見えます。そこで思わず南の風の神は、こう言ってしまいました。

「……考えなくもない……。」

「ほんとう。……やったっ！」

「ただし、お前も私もひどく怒られるぞ……。春と夏が同時にやってくるなんて、前代未聞だ……。どんな罰があるのか私にも予想ができない……。」

「だれに怒られるの？」

「おい……知らないのか……。この世界を作ったおおもとの神様だよ。……まあいい。男に二言はない。お前を乗せて、今週中に北まで上ろうじゃないか……。」

気がつくと桜の神の前に、長身で大きな体の浅黒い大男が立っていました。

「旅の支度が済んだら……、私の背中に乗れ！」

その大男は、一度困った顔をしましたが、すぐさまそれを振り切るように、白い歯を見せてにやっと笑いました。

「みなさんっ、見てくださいっ！ この山の桜っ！ 今朝、っぺんに咲いたと思ったら、今度は

南からの風で一瞬で散って、もう葉桜になっていますっ！ 春と夏が一瞬で入れ替わる！ これはまさに超異常気象ですっ！」

テレビ画面の中では、テレビレポーターが興奮して実況しています。

今朝から、日本中、上へ下への大騒ぎです。何せ、南から北へ向かってものすごい速さで桜の花が開いていったかと思ったら、その見ているそばから、今度は強い南の風が吹き、いっぺんに花嵐の様相になり桜は散って、次々と、青々とした葉っぱが広がり始めたのですから。

この日の午前中、寒さ残る3月にも関わらず、気温は初夏の5月並みまで急上昇。これに対し、テレビや新聞は「空前絶後の異常気象」と特別報道番組を組み、総理大臣はこの「異常気象」に対する緊急閣議の招集を決定しました。

サラリーマンはまだ肌寒い朝の通勤に備え厚着をしている人がほとんどでしたが、この急激な温度上昇で、電車通勤中に体調不良を訴える人も次々出始め、多くの電車は止むなく緊急停車。おびただしい数の乗客がホームから病院に搬送されていき、電車のダイヤは大きく乱れました。そして当然、病院では、その大勢の搬送された患者の対応にてんてこまいです。

テレビやメディアでは宗教家や占い師が「世界の終わりだ」などと呼びかける一方、気象学者はこの超異常気象の解明に追われることになりました。

桜の神と南の風の神のおかげで、日本中、すっかりパニックになってしまいました。

南の風の神の背中の上で、天空にいる桜の神はつぶやきました。

「うわあ、すごいなあ。桜色の線がどんどん北の方へ向かっていく……。きれいだなあ……。」

「……何を悠長なことを言ってるんだ……。私たちのせいで地上は大騒ぎに違いない……。大変なことになってしまった……。」

空から見ると、日本列島を横断する「桜色の帯」が北へ上がっていくのが見えます。まさに「桜の線」が大移動しているのです。そして、その桜の線の通った後は、青々とした緑が一面に広がっています。

「今どの辺かなあ。……」

「今、駿河国（するがのくに）、……静岡だ。これから相模国（さがみのくに）に入るところだ。」

箱根の山の神は、遅い朝を迎えました。夕べはお酒を飲み過ぎてしまったのです。

しかし山の神は、川の水で顔を洗って、辺りを見回すと驚きました。

桜の木々が見ているそばから一咲き、二咲き、ぱかっぱかっつと、次から次へと咲いていくのです。そして1分程で満開になると、そこへ急に暖かい風が吹き付け、桜の花を舞い散らしました。

「な、なんじゃこりゃ……。」

山の神は、まだ自分が酒に酔っているとばかり思い、目をこすりました。

しかしそこへ眠りから覚めたカエルがやってきました。そして大きなあくびを一つして伸びをすると、山の神様に話します。

「春なんだか夏なんだか……。何か寝足りないけど……。こんな暑くちゃ寝てられないよ。」

この急に訪れた暑さで、冬眠から起こされてしまったのです。

ここでようやく、山の神は二日酔いから目が覚めました。この「異常事態」は現実だったのです。そして空を見上げると、何と、このまだ寒いはずの季節にも関わらず、南の風の神がいるではないですか。

「おおーいい、南の風の神よおおおい。こりゃあ、どうしたことだああ！ 山がめちゃくちゃになってしまおうよおお！」

地上では、山の神が険しい顔をして怒っています。

「騒がせて悪いなああー。ちょっと、急ぎ用でなああー。」

「なんだ、山の神は怒っているのか？」

「当たり前だ。私たち神は『決めごと』を守るのが仕事。これでは、山の神も『決めごと』を守れないだろう。怒るのも無理はない。きっと他の神も怒っているだろう……。」

「……………」

桜の神は、ここでやっとなことの重大さがわかりました。日本中の全ての人やものに迷惑を掛けていることがわかりました。

「……ぼくのせいだ。……引き返すか。……。」

「……いまさら引き返せないよ。もう日本の半分は『夏到来』の有様だ。ここで止まって引き返したらもっとおかしくなってしまう。もうこのまま行くしかないだろう……。」

桜の神は唇を軽く噛むと、今一度北の空を見据えました。

今まで快晴でしたが、辺りは重苦しい雲に包まれてきて、空気も一段と冷えてきました。どうやら「北の空」に到着したようです。

「おそらく兄貴は、この時期はこの辺にいるはずだ……。さっきの女の子の手紙も、この辺で見つけたんだろう……。」

そうつぶやくと、南の風の神は辺りを見回しました。

「兄貴いいー！ どこだああー！」

今度は冷たい風が正面から吹いてくると、長身で銀髪の北の風の神があらわれました。

「……お、おい、南風！ なんてお前、この時期ここにいるんだ？ 『決めごと』を知らんのか？」

「知ってるさ。知ってるに決まっているだろう！ でも、この桜のやつがあの子に桜見せたいって言うから……さ……。」

「おいおい、バカなことするなよ！ どおりで『いきなり夏が来た』とか何とか、みんな騒いでっから、何事が起きたかと思ったら、お前たちのせいか……。」

「いいか、兄貴。こっちが悪いのはそうかもしれんが、そっちがあんな手紙よこさなかったら、こんなことにはならなかったんだぞ！」

「こっちはよかれと思って手紙を届けたんだ！ まさかこうやって北に来るなんて、だれも思わ

ないだろうが！ 日本がめちゃくちゃになるぞ！」

北の風の神と南の風の神が、お互いにらみ合いながら言い合いを始めると、辺りにはどんどん黒雲が立ち込めてきて、太陽が隠れていきました。

ふと、南の風の神は、その広がり始めた黒い雲の存在に気付きます。

「……お、おい、兄貴……離れるぞ！ ……もうけんかは終わりだ！……」

「なんだ！ 自分の責任を認めるか！」

「……とにかく、離れろよ！」

「なんだよ！」

黒雲は徐々に大きくなっていきます。

「兄貴と言い合いしてたら……。」

「あ、……しまった……。」

「……ったくもう……。」

南の風の神は目を覆い、そして北の風の神もようやく気が付きました。

南の暖かい風と北の寒い風がぶつかると、気圧の関係で天候が不順になるのです。

しかし、二人が気付いたときには、時はすでに遅し。黒々とした雲が辺り一面に広がり、遠くからは雷が聞こえてきました。雨もぽつぽつと降り始めました。

「手紙はどこから来たの！」

桜の神が、二人の間を割って、北の風の神に聞きました。

「もう『共犯者』だ。兄貴にも最後まで付き合ってもらおうぞ。」

南の風の神は、北の風の神をにらみつけます。

「……まあ、来たもんはしょうがないな……。こっちだ……。」

北の風の神は観念して、二人を案内しました。

「みかね……。サクラさんにお手紙書いたの……。」

ベッドの横でリンゴをむきながら美香のお母さんは、美香の話をじっと聞いていました。美香はベッドの上で天井を見上げながら、話を続けます。

「そのまどから、紙飛行機にして飛ばしたのよ。サクラさんに届いたかな。」

「……届いていると、いいわね……。」

お母さんはそう答えると、美香を見ずに、りんごを静かに切り分けました。

今年に入って、美香の病状はさらに悪化しました。

生まれたときからの先天性の疾患で、薬や手術で完治はしません。生まれたときに、担当医からはこの持病で長くは生きられないと、お母さんはすでに聞いていました。しかし、覚悟はしていたとはいえ、この二週間がヤマだと聞いたとき、お母さんはショックを隠しきれませんでした。

しかし美香はまだ6歳なので、病気のこととあと二週間の命であることを、お母さんは伝えていません。いや、まだ小さいので伝えて理解させることができないのです。

美香は、毎年、この病院の庭中の桜が満開になるのを楽しみにしていました。美香はこの病院

で生まれ、この病院の外を知りません。唯一の「外界」へのつながりは、部屋の窓だけなのです。そこから見えるいっぱいの桜を美香は毎年楽しみにしていました。

「今年もサクラ咲くかなあ」三日ほど前、ふと美香がそう言ったときに、「みかちゃん、今年はサクラ見れないみたいなの……」お母さんはそう言うことで、幼い美香に今の状況を察して欲しいと思っていました。

そして、子どもは子どもなりに察するものです。

美香は、それ以来桜の話二度としませんでした。それは美香なりに小さな胸の中で自分の行末を覚悟したようでした。

この桜に手紙を送った話も、お母さんは今初めて聞いたのです。もっとも、お母さんは彼女が紙飛行機を飛ばしたのを見ていましたが……。

この一週間のうちで桜が咲くはずないのは、お母さんはもちろんですが、美香も知っていました。この病院の窓から、毎年桜の開花を見ているのです。この東北で、桜が三月に咲いたことなど一度もありません。咲くのは大体四月半ば過ぎからです。

ですが、お母さんも美香も、そのことについてはお互いに言いませんでした。それはもしかしたら、二人とも、万に一つでも、三月に咲いたらいいなと願っていたのかもしれませんが。

美香も、そしてお母さんも……。

「お天気、急に悪くなってきたわね……。最近変なお天気。急に暖かくなったり……。」

そう言って、お母さんは無意識に窓のカーテンを閉めようとしてしました。そのときです。

「カーテン……開けておいて……」

美香は天井を見ながら、つぶやきました。

「おい、こんな暴風雨の中で、桜を咲かせるのか？ 咲いても散ってしまうよ！」

北の風の神が桜の神に大声で言いました。

北の風と南の風がぶつかりあったのですから、天気は悪くなる一方、しかも二人の風の神のせいで強い風が辺りに吹き乱れます。

「兄貴、暴風雨になったのは私たちのせいだよ……。でも、これじゃ散ってしまうな、たしかに……どうしたものか。悪天候の原因が言うのもなんだが……。」

「あそこの病院の桜を、咲かせればいいんだね……。」

二人の話を見かね、桜の神は確認します。

「あ？ ああ、間違いはない。あの紙飛行機はあの病院から来たもんだ……。たぶんあの病院に『みか』ちゃんって子が入院しているんだろう……。」

北の風の神は、自分に言い聞かせるようにうなづきながら言いました。

「でも……咲いた途端に散ってしまうぞ、その女の子が見ない内にこの暴風雨で散ってしまったら……。どうする。」

南の風の神は、心配そうに聞きます。

「うーん……、ちょっといい案思いついたんだけど……。うまくいくかなあ。二人にも協力してもらいたいんだけど……。」

「え？」

北の風の神と南の風の神と、揃って間の抜けた返事をしました。

「みかちゃん、そろそろ閉めましょうか……。お外が暗くなるわ……。」

お母さんはそう言うと、カーテンに手をかけました。

「ううん……。もう、ちょっと……。」

美香は、天井を見ながらそうつぶやきます。

「だって……お天気も悪いわ。雨も風も強くなってきたし……。」

お母さんは、そう言うと目を伏せました。

「……お母さん……お母さん！」

美香は窓の方を見ると、お母さん呼びました。

「なあに……。え……。」

お母さんが顔を上げると、窓から見える一本の桜がちらほらとかわいい花をつけていました。

「……咲いてるね……桜……。」

美香はベッドの柵につかまると体を起そうとしました。

「みかちゃん、無理しないで……」

お母さんは、そう言いながら美香の上半身を支えました。

こうしている間、一本また一本と徐々に桜が開いていきました。まるで一つひとつの街灯が、夕闇が深くなるのに合わせて、順番にともされていくように、一本ずつ順番に桜が咲いていき、やがて、病院の庭にある全ての桜が満開に咲きました。

「みかちゃん！」

顔を紅潮させ、看護師の安田さんが病室に入ってきました。

「みかちゃん！ よかったね！ 桜が咲いて！」

安田さんは、美香が一番仲良くしている看護師です。安田さんも、美香が桜を見たいと願っていることを、普段から聞いていて知っていました。安田さんは、美香の右手をとるときゅっと両手で包みこみました。

「でも……。この雨風じゃ散ってしまうわ……。」

お母さんがそう言ったとたん……。

ごおおおおおー。

地面が震える程の音と共に、激しい突風が吹きました。桜の木は枝がたわむほど大きく揺らされて、花がみるみるうちに散っていきます。

「ああ……。」

美香は、思わず声を洩らしました。

しかし、突風は、窓に向かって吹き付けてきました。巻き上げられた桜の花びらは、一斉に、雨粒と共に、すごい勢いで窓に向かってきます。

「……………」

余りの勢いに、美香もお母さんも、そして安田さんも、思わず目をつむりました。

ばっ、ばっ、ばばばっ、ばっ、雨と桜の花びらが叩きつける度に、窓から細かくきしむ音がします。

しかし、沈黙……。しばらくしたら、ウソのように静かになりました。

「……えっ……」

それに合わせて目を開けると、なんと窓一面には桜の花びらがびっしりと張り付いていて、外が見えません。美香は声を失いました。

「……すごい……風だわ。」

お母さんは、息を吞んで、ようやく言葉を吐きました。

「……あら。」

安田さんが声を上げました。病室がピンク色に染まっていました。

「……雨……止んだのかしら……。」

気がつくのと、夕日が射し込んでいました。そして窓の一面は花びらが覆っていましたから、夕日の発する光は、その「桜の花のフィルター」を通して、部屋をほんのりと淡いピンク色に照らし上げていました。

「……………」

その桜色の病室で、美香は、とても暖かい気持ちに満たされると、思わず自分を強く抱きしめました。

「満足だろ、桜のやつ。」

北の風の神は言いました。

「ああ、『桜の花のエンターテイメントショー』の演出代は高いなあ……。もっとも演出家はこいつだけだな。」

南の風の神は答えました。

「桜の花が満開になるのに合わせて病院に向かって風を吹かせて、その後晴れ上がらせるなんてな。神様をこきつかいやがって……。こいつに振り回されたよ。……こりゃ、みんなおおもとの神様に怒られるぞ……。まいった。」

二人ともそう言いながらも、どことなく満足な顔をしていました。

「……………」

しかし、桜の神がいやに静かです。

「どうした。」

「……あの子やっぱり死ぬのかな……」

「それは、わからない。……お前は桜の神で、私たちは風の神だ。自分の領分でないことは考えたってわからないよ。」

「ぼく神様だけど、桜の花を咲かすことしかできないから……。人の命は救えないから……。桜の花が咲いたところで死なないってことじゃないから……。」

「……ああ……、お前は桜の花を咲かすしか能がない、『使えない』神様だよ……。でも、『決めごと』はもちろん重要だが、人間の願いを叶えるのも神様の大事な仕事なんだよ……。私は

むしろ、お前にそれを改めて気付かされたがな……。だから……いいんじゃないか？これで……。」

桜の神の方を見ずに、南の風の神は答えました。

「……ぼく、こっから歩いていくよ……。」

「……ああ、そうか……。私とお前のおかげで、今じゃどこも日本は初夏の日和だ。風に乗っていこうが、歩いていこうが、北海道もすぐ暖かくなるだろうがね……。送っていかなくていいのか？」

「だって、……『決めごと』でしょ。……ぼく、神様だから……。」

そう言ってほほ笑むと、桜の神は、さらに北へと歩き始めました。

野蛮で素敵な夢

にしお

ガラングロン……

「いらっしゃいませ。」

「いや、すみません。今日からお世話になります、そうわと申しますので、よろしくお願ひします。」

この時、僕が働いてる、マッサージ店に来たのは、疲れた自慢がややこしい「お客様」という名のおじさんではなく、メガネの位置がややこしい「そうわ」という名のおじさんであった。

そんな、そうわさんの容姿は、顔が真ん丸で胡散臭さ丸出しの赤いメガネを眼球より下に垂れ下げてかけていて、とにかくエロそうという印象だ。

「今日から働いてもらうスタッフさんでしたか。では、お上がりください。」

僕は、この、ごはんですよかけ（メガネを目より下に垂れ下げてかけてること）でメガネを付けてる、そうわという名のおじさんをスタッフルームに案内した。

「初めまして。僕、にしおと申します。ちなみにそうわさんて経験者の方なんですか？」新人の方に聞く毎度おなじみのあまり興味のない質問を試みる。

「どもども、初めまして。よろしくお願ひします。僕ってあれでしょう？ 飽きっぽいでしょう？ だから、よくお店変えちゃうんですよね。」

いきなり初対面なのに、返事に困るような返ししやがって。ツッコミの仕方に迷うし、ツッコんでいいのかも迷う。とりあえず初対面なので、心の中で（お前のことなんて知らないから）とつぶやく。

「じゃ経験者の方なんですか？」

「まあ経験者というかね、適当にやってるんでね。」

メンドクサイ。こいつメンドクサイ。初対面なんだからしっかり答えてほしいのに、なんだそのポアポアした答えは？ 経験者かどうか質問しただけなのに、僕の心の言葉の文字数をこれだけ稼ぎやがって。

「では、次のお客様が来てから色々説明しますね。」

僕は、めんどくさそうなおじさんから逃げた。

「実は僕、ずっと広告代理店に勤めていたんですよ。」

僕は、めんどくさそうなおじさんに捕まった。

「それでね、女性関係でトラブルっちゃって、そこで職失っちゃってさ、で、この年でしょう？ もうその広告関係で就職できないし、とりあえず今、こうやってマッサージやってるんですよ。」

まず何才かも知らないから。こっちはそうわ情報は皆無なんですよ。それよりも、今日からここで仕事するのに、いきなりこの仕事は妥協でやってるんですってアピールはやめて下さい。（

ちなみに、女性関係のトラブルについては、あからさまに顔が物語っているの、なにも引っかからなかった。)

この後も、そうわさんは、僕以外のスタッフにも初対面にも拘らず、鮮やかな黒歴史を自己紹介がてらに発表しつづけていた。

そして、この日、お店のスタッフ一同は「なんか変なおじさんがやってきた」という話題で持ち切りになった。

次の日、「変なおじさん」と陰で呼ばれていたそうわさんは、頭の形が玉葱に似ていることから、「玉葱おじさん」と陰で呼ばれた。

その次の日、「玉葱おじさん」と呼ばれていたそうわさんは、「玉葱よりニンニクに似てないか？」という僕の悪意に満ちた素朴ではない疑問のせいで、「ニンニクおじさん」と陰で呼ばれた。

そして、その次の日の次の日、「ニンニクおじさん」と呼ばれていたそうわさんは、「そうわさんて、杉作J太郎さんみたいだよな。」という僕の作為に満ちた偶然の思い付きではない発言によって「ニンニクJ太郎さん」という呼び名で呼ばれるようになった。

そんな「ニンニクJ太郎さん」ことそうわさんは、その類まれな心を開きっぱなしのオープンハートな性格が幸いしてか、いつの間にかお店の中で人気者になっていき、僕自身もそうわさんがお店にいることで気持ちが高揚していくようになっていた。

僕は、そんな何でも率直に答えてくれる「ニンニクJ太郎さん」ことそうわさんに対して質問するのが日課になっていき、日々、その質問内容がエスカレートしていくようになっていく。

そんなある日、僕はそうわさんに対して、「そうわさんの性癖ってなんですか？」という多分、僕以外の人が誰も興味がないどころかむしろ誰も聞きたくない質問を試みた。

「いやいや、僕は至ってノーマルですよ。」

何をもったいぶってんだこのおじさんは。どう見てもド変態丸出しの顔つきじゃないか。絶対に世間に顔向けできなくなるようなアブノーマルな性癖があるはずだ。ド変態な性癖が出てくるまで僕はめげない。

「いや、絶対にあるはずですよ。僕だって変態ですから。別にみんなに広めないで僕にだけ教えてくださいよ。」

僕は、聞き出してからみんなに広めるどころか、あとでツイッターでつぶやいて世間の晒し者にしてやろうという気持ちでもう一度質問した。

「しいて言えばね、僕はね、双子が好きなんです。双子フェチです。」

まさか時が止まる瞬間というのが、こんな下衆な質問の返しで訪れるとは思っていなかった。僕は、そうわさんの垂れ下がったメガネを見ながら、体感で五時間、実質三秒間止まった。

「なんかね、双子を見ていると興奮しちゃうんですよ。なんでおんなじ顔してんかなって。その、不思議な感じがね、僕を情熱的に興奮させるんですよ。」

そうわさんが、僕の時が止まっていることを悟って話を続けてくれたが、その説明が、僕をさらに混乱させた。

(ぼく、わからないよ。ぼく、なんか、こわいよ。)

こんなにも質問の返答で混乱したことがない。そして、こんなにも返す言葉がないとは。僕は、小学生の時、初めて美輪明宏という存在を知った時と同じ恐怖を感じ、まともにそうわさんの顔を見ることができなくなっている。

だが、よく考えてみると、そうわさんは僕より二十才以上年上なので、性の人生経験を積み重ねると、こういった答えが出てくるのもありえなくはないかなとも思われる。それどころか、双子が好きっていうのは、そんな怖いことじゃないじゃないか、あまりにも突拍子もない答えだったので、少し戸惑っていただけじゃないか。僕は、無理やり自己解決して少し冷静になり、双子フェチのニンニクに視線を戻した。

「ちなみに、その双子関連の体験談とかはあるんですか？」

冷静になった僕は、勇気を出して少し踏み込んだ質問をする。

「そんな経験なんてないですよ。夢です、夢。もう一生叶うことがない夢です。まあ是非、一度でいいから双子を一遍に経験したかったな。」

こんなにも下品なことを、よくいけしゃあしゃあと夢だと言えたもんだ。双子を一遍に体験というのは、つまりそういうことじゃないか。それが夢？ 五十半ばのおじさんの夢？ しかし、その言葉には、なにか本気が伝わってくる。

「いつか叶うといいですね。」

僕は、五十半ばで下品な夢を語ってくれたそうわさんに、素敵で冷たい言葉を送った。

「僕って一度離婚してるでしょう？ 今更、再婚なんて希望持てないし、この年齢だから仕事も選べないでしょう？ だから今、僕が何に希望持てるかと言ったら、双子を一遍に夜を共にすることなんです。もう二十年以上もこの夢を見続けてるけど、一向に叶うことがなくて。まず、双子と出会うこともないですよね。」

そりゃそうだ。双子を一遍に体験するなんてアダルトビデオの世界だ。こんなニンニクみたいなおじさんと夜を共にする双子の子なんているはずがない。なんか、この話は複雑すぎるから、広めたとしてもあまり面白くもないな。

「まあ難しいでしょうね。双子ってそうそういないですから。しかも同時にやりたいなんて絶対無理ですよ。ちなみにそうわさんて、離婚してから恋愛とかしてないんですか？」

僕は、この話を終わらせて違う話題に移りたかった。

「難しいのは分かってるんだけどね、これだけは諦められないんですよ。僕って未だに膨張率すごいでしょう？ 自信があるんですよ。でも、この膨張率が健在のうちに体験しないと。時間がないんですよ。」

知らないよ、あんたの膨張率なんて。それより、思いっきり無視しやがって。話を終わらせようとしたのに膨張させやがって。

「そうですか……今、付き合ってる人とかいるんですか？」

こっちだって無視だ。

「それだけ達成できたら後は何もいらぬよ。もう全てのことを我慢できるな。僕が今、叶えたい唯一の素敵な夢。ちなみに、にしお君て、双子の知り合いとかいる？ もしいたら紹介してほ

しいな。」

無視に無視された。もう会話のキャッチボールが出来ない。まあたしかに膨張率はすごい。こっちは無視しているのにこんなにも膨張するんだから。

「かなり本気なんですね。僕には、双子の知り合いなんていないですよ。残念ですけど、協力できなくてすみません。」

そう言って、僕は、トイレに逃げた。特に何も出すものがないので、とりあえずため息を出す。はあ、やはりそうわさんは手強かった。しかし、なんだこのわくわく感は？ 僕は、今まで、夢とか、本気とか、そういったことを正面から受けとめることができなかつたので、人が話す夢や本気といった類の話には、目を背けてきた。なのになぜ、おじさんが語る野蛮な夢に、こんなにもわくわくしてしまうのか？ 僕が野蛮だからか？ なんか楽しくなっている。僕は、素敵なおことで後ろ向きになり、野蛮なおことでようやく前向きになれる、そんな性悪なのか？ しかし、そうわさんは、あんなにも野蛮なおことを素敵なお夢と語っていた。

この日、僕の頭の中からそうわさんの語ってくれた、野蛮で素敵なお夢が離れることがなかつた。

翌日、僕の気持ちはそうわさんに協力して、あの野蛮なお夢を叶えようという気持ちでいっぱいになっていた。なぜか、協力することが楽しそうだと感じていたからだ。仕事中にも関わらず、僕はどうやってそうわさんに双子を紹介するか考えている。かなり高い壁だ。誰かが言っていた。「高ければ高い壁の方が、登ったとき気持ちいい。」なんて素敵で傍若無人なお言葉。こんなお言葉が僕を奮い立たせるなんて。

「そうわさん。あの時、語ってくれた素晴らしいお夢の話、叶えましょう。協力しますよ。」

僕は、素敵で冷たいお言葉をできるだけ温めて言った。

「ええ？ 協力してくれるの？」

「もちろんですよ。あの時、そうわさんの本気具合が伝わってきたので、僕ができること何でもしますよ。」

そうわさんに対し協力する旨を伝えた僕は、この日、その夢を叶えるために作戦を考える。作戦は、A、B、C、と三通り考え、Aから順に決行に移していく予定だ。もちろん順に危険も伴ってくるので、できれば作戦Aで達成できることを祈りたい。特に、作戦Cに関しては、極力出たくない。この作戦Cには、ややこしい危険が付きまとう。この作戦を決行してしまうと、今後、僕は、そうわさんはおるか、世間からも目を背けて生きていくことになるだろう。それほど危険でややこしいおことが起きてしまう作戦なのだ。そして、僕は、この日、作戦Aを行動に移すことをそうわさんに宣言した。

まずは作戦A。この作戦は、片っ端から知り合いに双子の知り合いがないか尋ね、合同コンパの交渉をしていく作戦である。

決心を決めた僕は、周りの知り合いに臆することなく聞いてみた。

「知り合いに女性の双子とかいない？」

「いません。」大体、この答えだ。

「知ってるけど、あんまり仲良くないし。」次に多いのがこんな答え。

「うちのおばあちゃん双子だよ。」こういった手強い答えも。

「いるけど、先月、片方自殺したんだよね。」安易にこんな質問して申し訳ない。

そんな最中。

「いるけど、どうしたの？」

「紹介してほしいんだよね。」

「別にいいよ。」

ようやく最初の山を越えられた。公園にあるような小さい山だったはずなのに、以外にも時間がかかってしまった。ただ、この口約束を結んだ相手が特別仲がいいわけではなく、友達の彼女という微妙な関係なので、何とも言えない気まずさがある。しかし、ここはそうわさんの夢のため。

「その双子さんと一緒に合コンしたいんだけど。」

「別にいいけど、あまり可愛くないよ。」

これは期待できる。別に顔なんてどうでもいいんだよ。双子でありゃどんなモンスターでもいいんだよ。逆に美人だと、どう考えてもそうわさんに釣り合わないから、できるだけ不細工がいいんだよ。僕は、そうわさんの気持ちを考えないで返事をした。

「是非ともお願いします。僕の知り合いで、どうしても双子と合コンしたいっていう人がいて。その人は双子と合コンしたいという一心でここまで生きてきたんです。早く双子との合コンをセッティングしないと今すぐにでも死んじゃいそうなんです。」

「それは相当だね。じゃ、頑張ってみるね。」

ようやく、光が見えてきた。僕は、気軽に死という言葉を使い、見えないプレッシャーを与え、合コンの約束をこじつける。

それから二か月後、ようやくその時が来た。

合コンの約束をして二か月。この間、何度くじけそうになったか。まず一向に日にちが決まらなかったこと、友達に頭を下げたこと、友達の彼女が僕をうざがっていたこと、そうわさんが金持ちでダンディだよって嘘をついたこと。心が何回道端でウンコを踏んだようなやりきれない気持ちになったことか。やっと努力が実りそうだ。「努力は報われる。」ありがとう才能豊かなスポーツ選手。僕、ようやくその言葉を前向きに受け止めることができたよ。今までずっと、その言葉は人をどん底に落とす未来形悪口だと思っていたよ。

今回の合コンのメンバーは、僕と、そうわさんと、僕の友達、そして相手は、友達の彼女と、双子の姉妹。完璧な陣営だ。そしてあらかじめ考えた流れはこうだ。まず、僕と友達とその彼女で居酒屋に入り、双子が来てから三十分後にそうわさん登場。そうわさんが混じり話が盛り上がったところで友達カップルが退席。そして、その後は、僕が頑張ってみるね。そうわさんと双子のアドレス交換。それが今日の目標である。

まずは僕と友達カップルで居酒屋に入りテーブルに座った。たわいもない会話したところで、

思った以上に早く双子が登場。そして、思った以上に不細工。そして何より、思った以上に双子なのに似てない。これはピンチだ。不細工なのはいいけど、似てないのはちょっとそうわさんに申し訳ない。しかし、あまりにも不細工なので、程よく緊張が和らいだ。

「どうもはじめまして、にしおと申します。」

「あっはじめまして、ゆきと申します。」

少しカエルに似ている双子さんが答えてくれた。

「はじめまして、ゆいかと申します。」

かなり、ニシキヘビに似ている双子さんが答えてくれた。

しかし、なんて微妙なネーミングだ。双子は文字数が一緒という僕の観念が覆された。

「お二人は双子さんなんですよ？」

最終確認。

「そうです。でもあまり似てないって言われています。」

たしかに、カエルとニシキヘビでは似ていない。そして、そうわさんに「双子来ました。三十分後に来てください」とメールを打つ。

この後、僕は、今日はどこから来られたのですか？ とか職業はなんですか？ といった、普遍的な質問を双子にする。

そして、質問をするごとに、空気が澱んでいくその時だった。

「どもども、はじめましてそうわです。ごめんなさいね、ちょっと遅れちゃってね。」

ピキーン！ テーブルが一瞬で凍った。やはり思った以上にそうわさんのインパクトは強かった。誰も身動きが取れない。みんなが何度もそうわさんを見返す。僕であっても、この人がそうわさんじゃないようにと願うほどである。真黒なダウンジャケットを着こんで、その中から真っ赤なアロハシャツが見え隠れする。今日は、頑張って整えてきましたと言わんばかりのその髪型は、より一層ニンニクに近づけている。（え？ うそでしょう？ ダンディって言っていたよね？）みんな僕をTVのニュースに映る極悪容疑者を見るかのように見る。僕は、どんな罪でも許してくれるというキリスト教の入信を考える。

「いやあ、嬉しいな。こんな若い方の飲み会に誘われるなんて、ほんと神様に感謝ですわ。」

僕はその神様に心で土下座をする。

そして他のみんなは、そうわさんに気を遣ってか、質問はそうわさんに集中することになった。離婚したこと、もう二十年彼女がいないこと、マッサージを妥協でしていること、最寄りの駅まで遠いので自転車を使ってること、嫌いな食べ物はほとんどないけど唯一タマゴボーロが苦手なこと、そして双子が好きで今回僕にお願いしたことまで、何も隠すことなく吐き出した。

そして、あからさまに、そうわさんに気を遣うのが面倒そうになった友達の彼女が、「今日、これからやらなきゃいけないことがあるから先に帰りますね。」そう言って友達と一緒に立ち上がった。

まあ、ここで友達カップルがいなくなれば、空気が変わるかもしれない。そう思った矢先だった。

「じゃ、私たちも明日早いので帰りますね。」

双子がこのタイミングを逃さなかった。

ここで帰しちゃだめだ。せっかくここまでこぎつけたんだから、もう少し粘らないと。そう思うのは束の間、僕は、この双子が帰ると言ってくれたおかげで内心ほっとしてしまった。

「そっか残念だね。じゃ気を付けて帰ってね。」

僕は潔く見送った。

そうわさんが寂しそうな目で僕を見る。

僕は黙る。

そして、双子は友達カップルと一緒に帰って行った。

「実際、全然タイプじゃなかったわ。あんま双子つっても似てないじゃないか。」

ここにきて不平を言うそうわさんに少しイラついてしまったが、そんなことはどうでもよかった。僕は双子を見送った時、心の中でポキッと何かが折れた音がしていた。そうわさんの夢を協力しようと思ったのに、僕はこれ以上頑張れないと悟ったのだ。僕が考えていた作戦Bは、実は、僕には地元で双子の知り合いがいたので、地元でそうわさんを連れて行って、その双子を紹介しようという作戦だった。しかし、僕の地元に行くには飛行機に乗らなきゃいけないし、直接の知り合いだから気まずくなるの嫌だし、もうそうわさんと合コンなんてうんざりだ。僕は、作戦Bを心の中で諦めてしまった。

「まあ、今日はありがとうね。ほんと気持ち嬉しかったよ。まあ無理なのは承知だったし、仕方ないよ。」

僕が、そうわさんのことで挫折したことを悟ってくれたか、逆にそうわさんに慰められた。僕に申し訳ないのか、双子にすぐ帰られたのが悔しいのか、そうわさんの目は少し赤く充血していた。

せっかく屈折していた僕が少しだけでも夢と向き合えたのに、このまま終わっていいのか？このまま前向きなことに背を向けたままでいいのか？

僕は、ここで禁断の作戦Cを決断する。

おもむろに財布から一万円を取り出し、そうわさんの手を握り渡した。

「吉原に双子のソープ嬢がいるらしいです。」

この時のそうわさんの笑顔は、今まで見たことがない、太陽みたいな笑顔だった。

僕は、この時のそうわさんの笑顔が、今でも素敵なトラウマとして残っている。

おわり

「濁った精子」

北橋 勇輝

私と女は同じクラスだが一度も会話をしたことがなかった。女の髪は肩ぐらいまで伸びていて、色は黒く輝いている。

その女が座る席を男子二人と女子一人が囲んで喋っている。

女の席は私の席から斜め右上にあるので、会話を聞くことは簡単だった。会話の内容は映画の話で、女たちはよく笑っていた。

教室に担任の教師が入って来ると、それまで騒いでいた同級生たちが叱られた赤ん坊のように黙って自分の席に着いた。

私は教師の話を見聞かずに、その女のスカートから出ている白い脚を垣間見た。白い肌から黒の靴下、そして学生靴。私は頭の中で女の足の匂いを嗅ぐ自分を想像した。気が付くと私は勃起していた。だが股間はブレザーで隠れて見えないので、誰かに見つかる心配はなかった。私は大きくなった性器を股間辺りに力を入れて起こした。そして倒れると、また起こす。その動きを私は何も考えず癖のように繰り返した。

水がいっぱい満たされたコップをこぼさないように私はその女の顔を忘れずに帰宅した。

私は二階に上がって自分の部屋に入った。机の前に座るとズボンとパンツを下ろし、固くなった性器を優しく握って上下に動かす。私は動かしながら目を閉じて、頭の中でその女の顔を広げた。次に私は女を裸にした。そして以前に見たアダルトビデオで女優が言っていた台詞をその女が言っているように想像した。出来るかどうか不安だったが問題なく成功した。

その台詞は女のもので、その声は女のものだった。

私はそろそろ来ると思い、箱からティッシュを数枚、取り出し、ティッシュの上から放尿をするように射精した。

ただ。今まで私はこの女を使って何回も自慰をしているが、また私に罪悪感が襲ってきた。女には悪いと毎回思うが、麻薬のように私はそれを止めることが出来ない。

母が一階から、

「ご飯出来たよー」

と大声を上げる。

私はティッシュの上に出した精子を見た。その精子は女を使って出したからか、どぶのように濁っていた。

「アティの猫」 九十現音

ポプラが立ち並ぶニコラシカの町に、氷雨という名の美しい白猫が暮らしています。

氷雨の日課は、陽が丘の先へと沈んでいく様子を見つめることです。（10月28日。午後4時52分。この季節は、日が沈むのが早いわね）と氷雨は心の中で呟くと、青色の左目をごしごとこすりしました。

氷雨は左右の目の色が違う、いわゆる「オッドアイ」の猫です。氷雨の右目は、多くの猫と同じ黄色をしています。一方で、氷雨の左目は生まれつき、ガラス玉のような青色をしているのでした。氷雨の青い目には、日の光は時折ひどく眩しく感じられます。そのため、氷雨は日が沈んでから外出することが多いのでした。

町へと出た氷雨は、道の端に置かれた「コンペイトウ量り売り」という小さな黒板ポップに目を止めました。窓を隔てた木の机の上にはガラス壺に詰められた白色のコンペイトウが置かれ、その脇ではロッキングチェアに座ったおばあさんがなにやらぶつぶつと呟きながら、マフラーを編んでいます。

するとどこからか、若い猫の笑い声が氷雨の右耳に聞こえてきました。

（ああ、また連中だ）

氷雨が声のした方角に目を向けると、そこには左目が真っ黒な猫が立っていました。「よう、氷雨！ 明日も集会には来ないのかい？」と左目が真っ黒な猫が叫ぶと、彼の取り巻きの猫が「氷雨は、子供だからねえ」と笑いました。そうして彼らは「さあて、準備をしないとな！ 忙しい、忙しい！」と去っていきました。

彼らは、アティと呼ばれる町で一番大きな青年団の一員です。アティの猫たちは白いシャツに身を包み、腰には手のひら大のナイフをぶら下げています。そしてアティの猫たちは定期的に総出で「集会」を開いては、ナイフを手に口々に「青年自治」やら「世代間格差の解消」などということを訴えるのでした。ニコラシカの若い猫は、よほどの理由が無い限りは、アティに入ります。そのため、氷雨もアティの一員として、彼らと同じ格好に身を包んでいます。しかし、氷雨は集会の様子を見る度に感心こそすれど、その喧噪のなかに身も心も浸してしまおうという気持ちにはなる事が出来ず、彼らの熱気を遠巻きに眺めるばかりでした。そんな氷雨を他のアティの猫たちは子供扱いして笑うのでした。

しばらくするとアティの猫たちは、明日の集会に向けて、中央広場で準備を始めました。猫たちは次々と椅子や机や照明器具を持ち込んで「椅子は円く並べるべきか？」「いや、真っすぐ

に並べるべきだろう」などと、大きな声で議論をするのでした。

氷雨は通りからやや離れた場所で、その様子を覗きます。その場所からは広場がすっかり見渡せる一方、辺りは静かで、さらさらと彼方で流れる水の音や魚が時折ぴちゃんぴちゃんと跳ねる音や、鳥が空に羽ばたいていく音なんかも聞こえてきます。

氷雨はその様子を見ているうちに、「この世のどこかには巨大なナイフが存在していて、あらゆる物事を二つに分断し続けている」という話を思い出しました。それはニコラシカに古くから伝わる言い伝えで、アティの猫たちが皆腰にナイフを付けているのはこの話が由来であるとも言われているのでした。

(善悪。優劣。光と影。確かに世の中はナイフで切り分けられているわ。まるでケーキのように)

すると、途端に氷雨の心は色々な感情でいっぱいになってしまい、とにかく頭をからっぽにしたいような思いがしました。(そうだ、湖に行こう。そうして、ただただ水面を見つめましょう)と氷雨は心の中でつぶやきました。

ニコラシカの丘の先には、国立公園があります。そして、氷雨が目指す湖は、国立公園の敷地の西側に位置しています。氷雨は国立公園の階段を登りきると、照明をともした流線形の船が、東方へと通り過ぎていくさまを目にしました。

ニコラシカの町は正確に区画整理をされていて、地図に線を引くと、境界線が板チョコのようにくっきりと浮き出てきます。そのため一つの公園の中でも、西と東で別の地域であるということは珍しくありません。氷雨が向かう国立公園も同様で、湖の位置する西側地域と東側地域の真ん中を町の境界線が走っています。

船の船首で赤いライトがちかちかと点滅します。それは船が町の境界線を越える時のサインです。赤いライトは二三回点滅すると静かに消え、進路を示す黄色い照明灯だけが後に残り、船の姿は段々と遠ざかっていきました。氷雨はその姿をじっと見つめては、船の乗組員の子供の頃の事を想像し、顔を伏せるのでした。

二、三分ほど経ち、氷雨が伏せた顔を上げてみると、すらっとしたグレーの毛並みの男性の猫が目に入りました。彼は山高帽とスーツに身を包み、手には黒い雨傘を握っています。そして、鼻筋はぴんと通り、まつ毛はくるりと上を向いています。その姿は、まるで精巧なアンティーク人形のようなのでした。

氷雨の姿に気付いた彼は「御機嫌よう」と言いました。氷雨が会釈をすると、彼も軽く首を振り、またしばらくその場は静寂に包まれました。

氷雨が大きくのびをして、そろそろその場を後にしようかと思った頃、ステッキを置いた彼がごそごそとカバンの中を漁る姿が目に入りました。そして彼はチョコレートを取り出すと、「食べませんか？」と氷雨に差し出すのでした。

「ありがとうございます」

「一人で食べるよりも、二人で食べた方がチョコレートは美味しいでしょう。中には、『あんなものは子供の食べるものだ』と馬鹿にする人もいますがね」

彼は自分の名を「雲」と名乗りました。氷雨も自分の名を名乗り、「雲とは、珍しい名前です」と言うと、彼は「でも、本当の名前ではないのです。雲とは、勝手に名乗っているだけで」とほほ笑んで言うのでした。

「本当の名前は別にあるのですか？」

「ええ。でも、私はあまりその名前を気に入ってはいないもので」

雲はそう言うと、「貴方は、ニコラシカの猫ですか？」と聞きました。氷雨は頷きました。

「すると、貴方もナイフを持っているのですか？」

「ええ、一応は」

「そうですか。いや、私も小さな頃は、ニコラシカに暮らしていたもので。中央通りのくるみの木は相変わらずですか」と彼は言いました。

「ええ、相変わらずですよ。明日のアティの集会では、綺麗にライトアップされることでしょう」

「私も昔は、あのくるみの木にぶらさがったり、ポプラ通りの花壇に咲く花の蜜を吸ったりして遊んだもので。ただ……」と彼は言うと、「ただ、それが喜ばしい事とは限らないものです」と付け加えて顔を伏せました。

「それはどういう……」

「思い出の中のくるみの木が、途端にカサカサとして見えてくることもあるでしょう。それはまったく悲しい事です」

彼はそう言うとぱっと立ち上がり、「貴方は湖に行くのでしょうか？すぐに行かないと、夜が明けてしまうかもしれない」と言いました。

「あなたは、これから何処に行くのですか？」と氷雨が聞くと、雲は手に持った黒い雨傘を開きました。その雨傘はとても大きく、それを開くと雲の姿は氷雨からはまったく見えなくなってしまうのでした。

「私はこれまで一度たりとも、何処に行こうかなどと考えた事は無いのです。ただ、こんなところがあるのならば、行ってみたいと思うような事はあります」

「それはどのようなところですか？」

氷雨が聞こうとした瞬間、辺りに猛烈に強い風が吹きました。木々は激しくしなり、中には折れてしまうものもありました。氷雨は一番太い木の幹にしがみつき、顔を伏せ、風に耐えました。そして、やっと風が止み、氷雨が顔を上げると、雲の姿はもうそこにはありませんでした。

氷雨は雲を探して、辺りを探し回り、湖にまで足をのばしました。しかし、雲の姿は見当たりませんでした。探し回るのに疲れた氷雨は、湖のほとりに腰かけました。普段は穏やかな湖も、今日は激しく波を打ち、ざあざあという音がしています。

（雲はきっと、風に巻き上げられてどこかへ飛んでいったのだわ）と氷雨は思い、東の空を見つめました。大きく黒い雨傘を広げた雲が風に乗ってその先へと飛んでいく姿を想像すると、氷雨は面白いような気持がして（むしろ、雲は風に流されるのを楽しんでいるに違いない）と思うのでした。そうして、氷雨は湖を後にして、国立公園の階段を下りていきました。

（おや、こんなところに花壇があったかしら）と、氷雨は道のはたのブロックに目を止めました。氷雨はその中から、赤い花を一つだけ摘み取ると、その蜜を口に含んでみました。蜜は、甘いというよりは酸っぱく、しかしとろとろとしていて、不思議と氷雨の体へと浸み渡っていくような気がしました。（そうだ、この味と匂い。この感覚だったんだわ）

ふいに氷雨は、「世界は考えるものにとっては喜劇であるが、感じるものにとっては悲劇である」という先生の言葉を思い出しました。それは、ニコラシカに伝わる巨大なナイフの言い伝えについて、先生がふと漏らした言葉でした。

「ナイフの役割は物を切ることだから、世の中を分断するのだからって訳ないだろう。でも、世の中には切ってはいけないものだからってあるはずなんだ。だって、ナイフが切った残りの半分は何処に行くっていうんだい？ 僕たちは、どこかにあるという巨大なナイフのせいで『残り半分の世界』しか感じられなくなってしまうんじゃないかな」

（どうして、私は先生の言葉を今の今まで忘れていたのだろう）氷雨ははっとする思いがしました。

町の電燈には早くも灯がともり、ぼんやりとした光が町を包んでいます。

氷雨は小さな頃から、豆電球や懐中電灯の光が好きでした。その光は、光である以上に暖かく柔らかく、氷雨の心をくすぐったのでした。これほどまでに美しい電気は、一体どこからやってくるのだろうか。幼い氷雨は電線のはじまりの場所がどこなのかが気になってたまらない気持ちになり、周りの大人たちに「電気はどこからやってきているの？」と聞いて回ったのでした。そして、氷雨の父親や母親、先生が「電気は発電所で作られているのよ」と言う度に、氷雨は何だか割り切れないような心持がして（大人たちは、何も分かってないのだわ）と一人つぶやいたものでした。

夜が明け、アティの集会の当日になりました。

氷雨の家の前には、あの左目が真っ黒な猫が待ち伏せていました。

「氷雨！ 今日こそは、集会に来いよな！ アティの猫は全員強制参加なんだ。いつまでも子どもみたいな真似するなよ」

氷雨は渋々集会に行くことを了承しました。何しろ、氷雨は争い事が苦手なのです。

「夕方、もう一回来るからな。それまでに準備しておけよ」

そうして氷雨は夕刻、他の猫たちに連れられて中央広場に向かいました。

19時からの集会に向けて中央広場は強烈にライトアップされ、氷雨の目にはひどく眩しく映ります。まるで光は完全に広場を覆い尽くし、すべての影を消し去ってしまうかのようでした。

青年団の猫たちは、相変わらず椅子の並べ方について激しく言い合っています。「椅子を真っすぐに並べたら、議論がはかどらない」「椅子を丸く並べたら、スピーチの迫力が薄い」などと普段は仲が良い猫たちなのに、この日ばかりは互いの意見の悪いところばかりを罵り合い、まるで敵同士です。その光景を見ていると、氷雨はたまらなく憂鬱な気持ちになりました。

氷雨は泣きそうになるのをこらえ、「どうしても気分が悪いの」と左目が真っ黒な猫に伝えました。

「少しだけ、少しだけ休んでいていいかしら。集会が始まるまで……」

そうすると氷雨は広場の端っこの端っこにある細い木の根元に行き、影の中に身をひそめました。

氷雨はふと雲のことを思い出しました。

(雲はもうこの街にはやってこないのかしら……)

そう思うと、氷雨はさらに悲しい気持ちになるのです。

氷雨が気持ちを切り替え立ち上がろうとすると、東から広場のライトをガタガタと揺らす強い風が吹きました。氷雨が目を上げると、そこにはあの日と同じように山高帽とスーツに身を包んだ雲が立っていました。

「やあ、久しぶりですね。今日は湖には行かないですか？」

「雲、今日は集会に出なくてはいけなくて。本当は出たくないのだけれど……」

氷雨はそう言うと、感情の高ぶりが抑えられなくなり、雲に向かって叫びました。

「私にはアティに居ることが耐えられない！ この街に居ることも、もう……。私はくるみの木や花の蜜を愛して生きていければ十分なのに。いつの日か、私はそれすらも愛することが出来なくなってしまうのかな。そんなの嫌だわ！」

雲はにっこりとほほ笑み「まあ落ち着きなさい」と言うと、チョコレートを出しました。

「涙が収まるまで、チョコレートを食べるといいでしょう。気分が落ち着きますよ」

氷雨は言われたとおりに、チョコレートを一口ずつ味わいました。そして、氷雨はぽつりぽつりと今日あったことを雲に伝えていきました。

雲は笑顔で氷雨の話聞いていました。そして「辛かったですよね」と雲は氷雨の頭を撫でました。

「本当に辛かったはずですよ。その気持ちは良く分かります。そして、もし本当に辛くて耐えられないというのであれば、アティの猫はそのナイフで自分の命を奪うことだって出来ます。その方が幸せになれる場合だってあるのです。悲しい話ですが」

氷雨は雲の言うことにビックリしました。

「ニコラシカのナイフの言い伝えはそのためにあるのでしょうか。善悪、優劣、光と影を分けるのと同じように、貴方は自分の生と死だって分けることが出来るはずですよ。貴方がアティの猫であり、そのナイフを手にはしている限りは」

氷雨はナイフを鞘から抜き、自分の首に突きたてます。しかし、すぐに手をひそめてしまうのでした。

「駄目、やっぱり出来ない。こんなのおかしいわ！」

「もし貴方が本当に望むなら、貴方はナイフから自由になることだって出来ます。しかし、そのためには強い覚悟が必要なのです」

雲はそう言うと、黒い雨傘を頭の上に広げました。

「私の本当の名前は、光と言います。私の親は、赤ん坊の私に影を見せたがらなかった。常に光の中で、名誉や名声のために生きることを望んだのです。しかし、私自身はそれを望まなかった。地球に光が注ぐ日があるように、人生にだって雨の日や曇りの日があって当然ではないでしょうか。私は雲のように生きることを望みました。雲は常に自然の流れと一体となって、流れ去っていくものですから」

氷雨は雲の話は黙って聞いています。

「だが、名前の力と言うものはとてつもなく強力なものです。私は雲のように生きたいと願いながらも、ともすれば光の力に流されてしまいそうになります。くるみの木や花の蜜の美しさは変わりません。しかし、それを感じ続けるためにはそれなりの努力が必要です。感じ続けることを忘れてしまうと、それらはまたカサカサとしてきてしまう。それに比べたら、ナイフで周りのものを切り続けるなどということはどれだけ単純なことか！」

氷雨は頷きます。

「貴方はナイフを捨てる事が出来ます。しかしその道は険しく、大変です。アティの猫たちに混ざって、ナイフを振りかざす方が楽ですよ。或いはここで自ら死を選んだほうが楽に違いない。貴方はどうですか？」

氷雨は目を伏せ、一生懸命考えます。

「私は、ナイフから自由になりたいです。そして、雲さんと同じようにこの世界を流れて行きたい」

雲は黒い雨傘に、氷雨を招き入れました。

「そう言ってくれると思っていました。何しろ、貴方の名前は本当に素晴らしい」

氷雨は不思議そうに雲を見つめます。何しろ氷雨にとって、自分の名前を褒められるのは初めての経験だったのです。

「氷雨という言葉は、夏と冬の季語なんですよ。知りませんでしたか？ 貴方にはどちらかを選ぶことなんてできるはずが無いし、その方が自然なのです」

氷雨は自分の手で、腰からナイフを外しました。「貴方にはもうナイフは必要ありませんね。これからはずっと」と雲は言いました。

中央広場ではアティの猫の集会在間もなく始まろうとしています。左目が真っ黒な猫が氷雨の名前を呼ぶのが聞こえます。しかし、氷雨はその呼びかけには答えません。

「あとは風が私たちを連れ去ってくれるのを待つだけです」と雲は言いました。

氷雨は雲の言葉に、大きく頷きました。

「いちごあじ」 戸森めめん

路地を歩いていたら、緑色のトカゲが歩いていました。

トカゲといっても一メートルくらいあり、二本足で歩いてるのです。

しかも茶色の帽子に、茶色のチョッキ、ネクタイまで締めています。

わたしがトカゲを見てあっけにとられていると、トカゲの方から近づいてきて「心配いらないよ」と声をかけてきました。

「あなたは誰なんですか？」

「私はこの先にある小学校の校長だよ」

「でも、私はあなたがトカゲに見えます」

「ああ、それは今流行の病気だよ、人がトカゲに見えるようになってしまうんだ。うちの生徒にも病気にかかった子どもがたくさんいてねえ。だから私がこうやって、病院からクスリを貰ってきたんだ、ほら君にもあげよう」

そう言うとトカゲの校長先生は肩からさげた袋からクスリを一瓶だしてくれました。

「これは一錠でいいのだが、きっと君の周りの人も病気にかかっているだろうから」

「あの、お金は……」

「いらんいらん」

「でも……」

「それより今飲んで効力を確かめてみてくれんか」

「わかりました」

クスリ瓶の中にはぎっしりと赤い飴玉のようなものが入っていて、蓋を開けるとイチゴの匂いがしました。

ただの飴玉じゃないのかな？ と疑いながら口に入れるとやっぱりイチゴ飴の味がします。？

「どうかね？ 私の姿は元に戻ったかね？」

校長先生は首を傾けながらギラついた目でわたしを見ています。

「いえ、その、まだトカゲのままです……」

「そうか、じゃあそのクスリは、効くまで時間がかかるんだな」

と言って歩いていってしまいました。

「あの、お金、本当にいいんですかー？」

と去っていく校長先生にたずねると、校長先生は返事代わりに手をふってみせました。

わたしはしばらくの間、校長先生の姿が、トカゲから人間の姿へと戻るかもしれないと、去っていく校長先生の姿を見てましたが、途中で道を曲がってしまったため、とうとう校長先生の姿をトカゲ以外で見ることができませんでした。

また路地を歩いてると人に会いました。何故だかわかりませんが、あっけにとられている様子です。

何をあっけにとられているのだろうか？ と考えてから、わたしも少し前に彼と同じようにあっけにとられたことを思い出しました。

自分の手をみると、なんとウロコが生えています。指も四本に減っていて、するどくしなやかな爪があります。

わたしは病気が悪化してしまった、と思いました。

そして、目の前にいるこの人も、同じ病気にかかっているものと思いました。

わたしは「心配いりませんよ」と彼に説明をしてクスリ瓶から飴玉を十個ほど取りだして、彼に分けてあげました。

後でわかった話ですが、あの校長先生は、実は校長先生でなくトカゲで、トカゲが渡してくれた苺の飴玉のようなクスリは、実はトカゲが作ったトカゲになるクスリでした。

あの校長先生を名乗っていたトカゲも小学生全員にクスリを配りトカゲに変えて、今は本当のトカゲ学校の校長先生をしています。

もちろん、わたしも一匹のトカゲとして楽しく高校生活を満喫しております。

第四回新派文芸賞

締切日 2013年6月9日

応募者の全員が
受賞者になれる
まったく新しい
近未来的文学賞

〈新派文芸賞 募集のお知らせ〉

「何が文学で、何が文学でないか？」分かる人などいない！ だから、「全ての创作者の文学性」を手放しで受け入れる文学賞があってもいい……。全ての応募者が受賞する、前代未聞の文学賞……。第四回「新派文芸賞」の募集のお知らせです。君が思う「文芸」「文学」をかたちにして、募集要項にしたがいご応募ください！ 「全ての人の『才能』は、もっともっと評価されていい！」

【第四回新派文芸賞】

公募要項

賞品：なし

締切： 2013年 6月 9日

発表： 7月末発刊予定の『しん宇宙』創刊号にて

- 1.応募原稿は完結しているものに限る
- 2.文字数制限はとくになし。
- 3.ジャンル制限もなし
- 4.タイトルとペンネームを記載してtxt形式で送ること。
送り先：jii_syuppan@mail.goo.ne.jp まで

メールのタイトルは「新派文芸賞応募作品」をお願いします。

作品を受けとり次第、確認として3日以内に返信します。返信がない場合はお手数ですが、もう一度メールしてみてください。



じい出版では一緒に雑誌を作っていくスタッフを募集しています。

■応募資格

インターネットに接続できること。

これだけです。

経験などは不問です。一応、プロやセミプロの方も参加していますが、編集長自体は素人そのものだし、基本的には素人のために作られた雑誌です。やりたいことや、経験してみたいことをどんどんやってください。

ちなみに、現在の参加メンバーの年齢は10代～60代とかなり幅広い感じになってます。年とか経験なんて飾りです！なにを作るかだ！

■投稿作品について

基本的に、ジャンルや量は問いません！山脈は何でも受け入れます！作品の形式はテキストか画像にて投稿してください。

それと合わせて、ちょっと無理そうだけどやりたいこと、手が必要なことがあればどんどん相談してください。山脈編集部が出来る限りのお手伝いをさせていただきます！

また山脈は無料雑誌のため報酬などはありませんが、作品がたまって個人で電子出版する時に参加メンバーみんなでお手伝いしようと思っています。それを有料で売るのは個人の自由なので、一応、報酬もできるかもしれません。

記事の投稿は jii_syuppan@mail.goo.ne.jp にお問い合わせ致します。

よくわからない時は気軽にコメントしてくださいね。

Twitterで質問してくれてかまいません。

編集長のTwitterアカウントは@yes_ksです。

なんでも
かんでも

作ることに興味がある方

大募集!!

ライター / 編集者 / デザイナー / 絵描き / 詩人 / 無職 / 俳人 / 廃人 / 薬中 / アイディアマン / バイトリーダー / 小説家 / ハイパーマルチクリエイター / 宇宙人 / スカベンジャー etc...





佐藤家清/山脈編集長

以前はイエス曖昧という名前だったんですけど、実名っぽい名前に変えました。
今年はお出しから色々あってくたびれましたけど、色々考えさせられました。
いつ死ぬかわからないので、さみしい死にはならないように生きていこうとシフトチェンジする毎日。

REC/表紙デザイン

死骸と言った方がしっくりくる。そんな様なものに囲まれて暮らして居ます。

ムドオン崎山/ウェブライター

今回のゴミ評論はとても楽しかった。武井咲、剛力彩芽、どっちが可愛い？ の永遠の疑問に匹敵するくらい楽しかった。また読んでください。

えっ、廃刊？ えっ

さうじ/巻頭企画デザイン

今月で事務所追い出されます。

草薙 健一／武術家地方公務員兼オタク評論家

今回初めて電子出版というものに参加させていただきました。
ブログ以外で他人様に読んでいただく文章を書いたのも初めてです。
編集の家清さんにはたいへんお世話になりました。
次回もよろしくをお願いします。

せきうお/おそうめん

合コンに行ったんですけど初対面の人を長時間同じネタで馬鹿にしてたら「殺すぞ」と言われて怖かった

遠藤玄三/編集部

春です。巣立ちの季節です。僕もちょっとしん宇宙まで。

実葛氷柱/雑人

とっぴんぱらりのぷう

蛤ススム/スカベンジャー

最近里帰りしたのですが、昔好きだった女の子がもう二人目の子どもを生んだと聞いてずいぶん寂しい気持ちになりました。

そんな僕にも陽射しは変わらず降り注いできました。

何もなかったように降り注いできました。

次に帰るのはいつになるのでしょうか。そう近くはないと思っています。

戸森めめん/ライター

1時間でエッセイかけて言われて書いた死にたい

七転ねべす/漫画描き

Q、最近ハマってることは？ A「しん宇宙で何を描けばいいのか頭を痛めること」

サイダー結城/シュワシュワ

呑気に炭酸出してる時にいきなりゴミ通企画を持ちだされ「このゴミを作ったのは誰だぁ!!!」と怒り心頭。仕方がないので一つ一つ吟味したが、素晴らしくゴミクズ過ぎてシュワシュワシュワシュワ！ としか言えないまま終わった。

ハラヲ/ライター（選評も担当）

新派文芸賞に関しては選評を見ていただければおわかりいただけますが、秀作揃いで選評者としては大いに楽しませてもらいました。受賞の作家さんには今後の活躍を期待！ ゴミ通企画は私以外の皆さんが想像を越えて「リアルにゴミ」でしたので、正直気が遠くなり、うちに帰りたくなりました。ですから、今実家です。もう戻りたくありません。

山脈vol.06

<http://p.booklog.jp/book/67890>

著者：じい出版

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yesks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67890>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67890>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ